



始



函	鳳
號	219
永	久

男女忠愛關係濃厚なる場所新に亘り
 中に兄妹相抗して快味を感ずる場あり

夕

大正十四年禁止處分



内務省
 作アセアバヤルア
 13.10.13
 ニ正アサ

東京
 官
 11.10.13

述譯三津味木々佐



書叢述譯堂陽春



京東

堂陽春



特 501
550



79W10001

ンニアヤ

ウラジミル・サアニンがその家族のもとに歸つて來た時には、もうすっかり立派な青年になつてゐる母も妹も僅かに彼を憶えてゐた位であつた。

此の數年のうちに彼の容子に別段どこと云つて變つた所は見出せなかつたけれど、その丈の高い頑丈な體軀にはどことなく、大人びた一種の氣品が備はつてゐるやうであつた。

そしてその話にも態度にも、すっかり大人の落着を見せて久し振りのその歸郷を迎へる爲に母と妹とは大騒ぎして、もてなさうと思つてゐたけれど、その企も、彼の容子に少しも久しぶりに歸つて來たといふ様な感動も疲勞も見せないで面喰つてひとりで立消えになつて了つた。

二日程経つと、彼の舉動に十分注意してゐた母と妹とは、彼に對して抱いてゐた自分達の期待が全く裏切られた事に氣がつかねばならなかつた。

妹のリダはサアニンと接してゐると、何とはなく他人にでも逢つてゐるやうで、兄弟といふ意識が兎もすれば無くなりさうになるのでその都度、どきまぎして顔を眞赤にさした。

始め彼女は一般の年若い女が慕ふやうに此の兄を慕つた。そして兄は特別な著しい個性の持主であつて、さうした生涯を受けねばならぬ悲壯な壓迫や、戦や、悩みや、寂しさ等の受難をその

顔から観て取らうとした。

しかしそこからは何も彼女を感動させるやうなものは見出せなくて、彼女の抱いてゐた多彩な兄の生命は實は極く單純で又平凡なものであつた。

兄の話には何だか特異な点もあるやうだけれどそれはリダには分らない事であつた。それに、それは餘り重大でも卓越した事とも思へなかつた。

そして彼女はその空想的な期待で楽しんでゐた憂鬱な重々しい運命と云ふものはそんな生活振の中には見出せるものではないと思つた。

彼女は、兄には別に遠大な理想もなく、只酒や女の事なら熱く知つてゐるだらうと思つた。それで彼女は兄に對する尊敬どころか兎もすれば輕蔑の念さへ起して來た。

兄の針仕事の出來るといふ事やそれをちつとも恥ぢてゐないらしい容子や、その他それに似よつた事を、何とも云へぬ陋劣な事だと忌々しく思つた。

そしてその事は彼女にとつて、晴れやかな朝明けを想像して起きた朝、突然曇つた寒空を仰いだやうな失望と憤怒を覺へた。

又母は吾子の氣を計りかねた。

眞面目だか不眞面目だか、それに彼女の知つてゐる範圍では、さうした生き方をしてゐる人は

ないと思はれた程サアニンの云つたり爲たりする事は事毎に、母に取つては常規を逸してゐる事に見えてその氣持が分らなかつた。

それでゐて、それには何か知ら一種の權威があつて彼女はそれを聞いてゐると彼にやり込められてゐるやうにしか思へなかつた。

そして此の考へは彼女を焦らせ怒らした。

それだけに此の先、息子がどうして行くだらうかと我子の將來が心配になつた。

彼女は自分の今迄通つて來た路を間違ひのないものと見てゐるので、サアニンも自分の通つた通り、生活の安定や幸福と云いふ事にのみ腐心しなければならぬものと思つた。

それにあの子は何と云ふ此の母の考へと、かけ離れた事ばかり云つたりしたりする事だらう。彼のあの考へは根こそぎ打破つてやらねばならないと思つた。

しかしサアニンには將來といふやうなものは何等彼を拘束する原因にはならなかつた。

彼の周圍には太陽と自由の外何もなかつた。

彼の歩みの前には何等の障礙もなく、あれば取つて直ぐにそれを享樂しようとし、又それに少しの躊躇もしなかつた。

晝下りの太陽は綠の庭に柔かな影を搖がしてゐた。

サアニンは早朝から花壇の手入をして、今それを了へ、深々と椅子に凭つて、のんびりとしたいゝ氣持になつた。

炎叢の様な緑の草木や、日光、さては紺青の天空がそのまま彼の魂にさゝやきかける様な幸福を深々と味はつた。

彼は愉快さうにその健かな筋肉をうんと張つて背伸びした。その顔色は五月の曉明のやうに紅潮を呈して健康さうに見えた。

「本當に、此處はいゝ所ですね」と彼はうつとりとなつて獨言のやうに云つた。

此の息子の鷹揚で、傍若無人で、冷靜な態度は、まるで自分を除外してゐるやうにその母には思はれた。

「悪くはないさ」とマリアイワノウナはそれに対する憤りの爲に、冷かに簡單に答へた。

サアニンは一寸母を眺めやつて、考へながら母に云つた。

「それに、ね。お母さんがいろんな事で、僕を煩さがらして下さらないと、もつと結構な處ですけど——」

母はこの言葉に怒つていゝか、笑つていゝか分らなかつた。彼女は毛を立てた鶏の様に立竦んでちつとサアニンを睨めつけた。

そこへ家の方から、背の高い立派な男がやつて來た。骨格のいゝ稍々脂肪肥りの身體で碧い眼に懶るさうな微笑を浮べながら。

「貴方々はいつも喧嘩ばかりしてゐますね、何の事です。本當に……」と遠くから聲をかけた。

サアニンはそれに挨拶しながら

「いやね。ノキコフ君、お母さんが、僕の顔に希臘風の鼻がついてゐると好いと仰言るけど、僕はたとへどんな鼻にしろ天に感謝しなければならぬと云つてるのさ」とサアニンはノキコフの鼻を横目で見ながら微笑んだ。

「何を云つてゐるんだか」

マリアイワノウナは憎々しげに云つた。

ノキコフは高く聲を立てゝ笑つた。

「いや、僕は知つてる、誰だつても君の身の振り方については心配してゐるからね」

「おや、おや、二人で窘めるなら僕はもう、逃げようぜ」

「いゝえ、私が逃げませうよ」

母親は突然忌々しげに云つて、誰の方も見ずに家に行つた。

サアニンはほつとしたやうに、彼女を見送つた。

「ね。君もう擲捨ふのは止し給へ」

「何で僕が擲捨ふものか、母の方こそ獨りでぶん／＼當りちらしてゐるのだ。ね君皆僕に邪魔しないで樂にしようと呉れると好いんだがね」と云ひながら暫らく間を置いて、尋ねた。

「時に、ドクトル、何か面白い事があるか、ね……」

「もう もう 面白いどころか、僕はこゝには飽き飽きした」とノキコフは吐き出すやうに言つた。

サアニンはこの立派な金髪の男の退屈が何處に原因してゐるかを知つてゐた。

「だが、君の若さと美貌と健康とで君に何の不足があらう。たゞ一つ君に欠けた處さへなければ、ね、」

「と、いふと、それは？」

「正しい人生觀を有たないといふだけのことさ、君は餘り多くの偶像を有ち過ぎてゐるのだ。君の今の退屈だつて君は、その原因が君の生活法の面白くないのに基因してると思ひ込まうと努めてゐるけれど、實際はさうぢやないんだ。君自身の生活が君に本當の幸福を與へないからなんだ。いゝかね、唯リダが君に惚れさへしたら、その悲しみも退屈も烟の様に消え去つて了ふんだ。え本當だらう？ これが嘘かね？」

サアニンは愉快さうに眼を輝かした。

「何て、君は馬鹿けた事を云ふんだ」

とノキコフは眞赤になつて叫んだ。優しい人の好い眼には無邪氣で正直な狼狽の涙が流れた。

「君はリダの爲には此の世の一切を忘れてゐながら、それでゐて此のリダに關した話を君は馬鹿けた事と云ふのかね」

ノキコフは明かにまごついた。特にこの事をリダの兄の口から聞くことは譯の分らない程不思議な氣がした。

彼はサアニンに對してすうつと前から正直な最眞を持つてゐた。だからサアニンに今の様な事を云はれても彼を直ぐ様、やくざ者と思ひ度くなかつた。それにリダの事や彼女から受ける神聖な、大きい深い感情の事に思ひ及べば、今それに關してサアニンに云はれた事に對しても、怒れなかつた。

サアニンは黙つて深切に微笑した。

けれどノキコフは又サアニンが彼にとつて、一番大切な事を云ひ出しはしまいかと心配した。

「リダ、ペトロウナさんは何處にゐられるんだね？」

と彼が聞き度くて堪らずにゐてどうしても聞き得なかつた事をかう無意識に尋ねた時、ゆるり

と鼠色の長い髪を曳いて、美しいリダが歩いて来た。

彼女の眼は黒く處女の誇を湛へ、人を動かさねば置かぬ様な上品な魅力と愛嬌とを蒔き散らしながら、騎馬用の長靴を穿いた二人の年若い立派な士官を従へる様にして石段を下りて来た。

リダはノキコフに手を差し伸べ、疑ひ深さうに斜に兄を見やつた。そしてノキコフが彼女に握手した時、どれ程尊敬の意を表はし、おづく彼女を見てゐたかには氣も止めなかつた。

「今日は、ウラジミルベトロキツチさん」

拍車を鳴らしてより丈高いより美しい方の士官がかう挨拶した。

此の男はサルウチンと云ふ名で、騎兵大尉でリダに執拗く懸想してゐる事をサアニンは既に知つてゐた。

サアニンはちつと妹を眼も放さず見てゐた。そして思ひ餘つた様に、

「ほんとに、お前は美人だね」と繰り返した。

「勿論美人ですとも、でも、此處にゐる人は皆美人です」と云つてリダは疑を有つた眼を兄に投じた。

「いや、我々が何でせう」とサルウチンは笑つて「たゞ憐れな、お相伴に過ぎないのです。美しい貴女はそれを背景として一層引き立つて見えるのです」

「貴方は旨いことを仰言るね」サアニンは軽い嘲りを含んで云つた。

「リダペテロキナさんを見れば誰にだつて旨い言葉が自然と出るんですよ」ともう一人のタナロフと云ふ士官が云つた。彼は先刻からリダの帽子を脱してやる事に骨を折つてゐた。

「それで貴方もさう旨い言葉が出たんですね」とサアニンは感心したやうに云つた。

「此の人達に、そんな事を云ふのはもう止し給へな」

先刻から黙つてゐたノキコフは何だか胸に蟻りを持つた調子でサアニンにかう囁いて、一種の氣味よさを感じた。

やつと帽子は脱れた。タナロフは得意になつて仰々しい手つきで、その帽子を卓子の上に置いた。

「まあ 貴方は何といふお方ですね イワンパウロウキツチさん。妾の髪を滅茶くにしてしまつて。家に行つて仕直して来るわ」と云つてリダは一寸その眼付を變へたけれど、又直ぐに媚びる様に愛嬌を湛へた。

「本當に濟みません」とタナロフは狼狽して謝つた。

リダは皆の視線を背に感じて、何故ともなく笑ひ笑ひ急いで石段を上つて行つた。

リダの姿が消えると一同は、急に肩が軽くなつた様に覺えた。

そしてリダが散歩しようとして云つて再び庭の下り口から現はれた時、サルウチンは一番に賛成して腕をリダに伸べた。

「僕も一緒に行き度いものですね」とノキコフは癩に障つた聲を出さうとしたので、その顔が丁度泣き出しさうに見えた。

「来ていけないつて誰も云やしないぢやないの？」

「行き給へ、君、僕も行き度いんだけど、あんまりリダが兄妹だと云ふ意識を有ち過ぎるからね」とサアニンは快活に云つた。

リダはびつくりして兄の心を読むかのやうにその方を打ち眺めた。そして心は、或る何物かをつくづく見詰めた。

リダと一緒に、そこまで来た母のマリア、イワノキナは直ぐに息子の此の言葉を聞き答めた。

「そんな馬鹿な事を、お前は何の爲にお云ひだね、本當にお前は突飛な事ばかり云ひたがるね」「僕は些ともさうは思ひません」

母は呆れてサアニンを見た。そして此子はどうして自分の知つた人達とは全るで、正反對の事を考へ、正反對の事を感じるのだらうと思つた。彼女には身代、教育、社會上の地位等即ち環境の同じ者同志の考へたり行つたりする事は、皆同じ事であるべきだと思つた。

學生は皆革命主義者であり、官吏は皆中流階級の公民であり、軍人は皆名譽心の強いものと極められてゐて、若しも學生が保守黨であつたり軍人が革命家であつたりしたら、それこそ大變、不釣合な、醜惡な現象であると思つた。そして我子サアニンは、その門閥の點からも、教育の點からも、今の様ではいけなかつた。彼女は息子が周圍のものに與へる印象を精密な親心で注意して見た。そしてそれは彼女を悲しませ、失望させる事であつた。

サアニンはそれを知つて、どうにかして母を安心させ様と思つたけれど、生憎、いゝ考が出て來なかつたので、笑つて立上り家に這入つて行つた。

そして退屈さうに寢臺に横つて人間が人格を否定したり、微の生えた面倒臭い支配の下に投げ込んで此の世を一つの寺院にでもなさうと思つてゐるらしいのが、堪らない事だと考へた。それから、彼は基督教の運命や、それが歴史中に演じた役目に考へ移つたが、やがていつの間にか眠氣を催して、ぐつすり眠り込んで了つた。

そして眼を覺した時はもう夜になつてゐた。彼は獨り靜かに庭の芝生の上に出た。そこからは先刻散歩から歸つた連中のゐる廣間が眺められた。サルウチンとタナロフとは翼琴に着いて、リダは縁側の搖椅子にかゝつて、眼を閉ちて夢みる様に獨りで微笑を洩らしてゐた。

ノキコフは黙々と縁側の敷板を、彼方此方へ歩みながらリダを眺めてゐた。

と突然リダの聲がはつきり聞えて来た。
 「餘りぢやありませんか。そんなに行つたり來たりして、些とも聞いてゐられないぢやありませんか。」

ノキコフは始めてサルウチンの歌つてゐるのに氣着いた。彼は先刻から敷板の最後の板を右の足で踏んだら成算のあるものとして、リダに戀を打明け様と決心して歩いたが、此點が思ふ通りに行かぬので、幾度も繰り返してゐたのであつた。彼の頭は熱し、口は乾き心臓は恐ろしく鼓動をうつつてゐた。

彼はリダの聲でふと我に返つて、サルウチンの歌を聞いてゐる中にその教課を踏んでゐない歌ひ手の變な抑揚にすつかり不愉快を覺えた。

「一體、何の歌ですか。自作ですか」彼はいつになく腹立たしく此のよく人の口にする戀歌の事を尋ねた。

「いけませんよ。黙つてゐて下さいな、ね。」

リダは顔をしかめてかう云つてから又附加へた。

「貴方、音楽がお嫌なら、お月様でも見ていらつしやいな」
 成程。梢の背後から満月が柔かな夢の様な光を投げてゐた。

ノキコフは溜息を吐いた。

「ぢや、それよりも貴女を見て……」

ノキコフは自分の言ひまはしが拙かつたので恥かしかつた。

リダは聲を出して笑つた。

「何て、御器用な御世辭でせう」

「僕は、御世辭は云へない」と悲しげに云つた。

「では、どうか黙つてゐて下さい」とリダは不愉快さうに肩を揺つた。

君を思へば啞のごと

黙し嘆けど慰さます

かゝる思慕おもひのなべてなる

惱みの杯飲み干して

君を思ひぬ眞情まことより

世に又ありや あゝ此の戀の切なさよ

翼琴の音は水盤を轉る白銀の玉の様に庭に響いて行つた。

月は愈々冴えて、木蔭の抱く闇は益々はつきりなつた。

「リダ、ベトロウナさん」

ノキコフは急に思ひ切つて口を切つた。

「え、え」

「僕は長い間待つてゐました。——僕は貴女にお話し度いのですが」

ノキコフの聲は咽ぶ様にかすかに響いた。

「何のお話？」

リダは氣にも止めずに、快よさうに尋ねて月を眺め、庭を見やつた

その暗い菩提樹の下には夜の静けさに、酔つたやうに、サアニンが身動きもせずちつと二人の
話に耳を敬てゐるた。

「僕は、僕はね……若し貴女が……僕と結婚して——して下さる……」

彼の舌は慄へた。ノキコフはどぎまぎして自分の顔が赤くなり青くなるのを覺えた。

「何て又拙い事を云つたものだらう」と恥づかしくなつた。

リダは又も何氣なく「誰と……？」と尋ねたが突然、眞赤になつて黙つて了つた。

「僕は、貴女を戀してゐます——僕は、何と云つて可いか分かりません。しかし僕は貴女を非常に
愛してゐます」

彼は何だか眼の前が急に暗くなるやうに覺えた。「事もあらうに戀を打明けるのに、非常になん
て、どうして云ふんだらう」と彼はかう思つて急に口をつぐんだ。

リダは丁度其時、掌に落ちて來た一枚の葉を神經的に引扱つた。ノキコフの言葉は彼女のまる
で豫想しない事であつた。彼女はノキコフにすつと前から親戚のやうに馴れて、決して嫌つて
はるなかつたけれど、此の事は兩人の間に取り戻しのつかない面白くない感情を惹起してしまつ
た。

「私には分りませんわ……まだそんな事、私考へた事無いんですもの」

ノキコフは愈々、眞蒼になつた。彼は不意に立上つて、帽子を取つた。

「さよなら」と云つた彼の唇は妙に歪んで慄へ、その笑ひ聲は變に瘞つた様に聞えた。

「何處へ？……さよなら」

リダは狼狽へた。そして手を差し伸べて無理に微笑まうと努めた。

ノキコフは急いで、握手し帽子は冠りもせず露の下りた庭を急いだ。彼は木陰に入るや否や
瘞瘞的に両手で髪を掻き扱つた。

サアニンは彼の後から、呼びかけようかとも思つたが、又思ひ返して、たゞ微笑んだ。

彼にはノキコフの歩く恰好が非常に滑稽に見えた。そして其場に身動きもしないで月の光に濡

れたリダの美しい姿を、一心に見やつた。

とサルウチンが四圍に氣を配つて低く拍車の響を殺してリダに近寄つた。

廣間ではタナロフが古いワルツの曲を滅入る様に悲しげに弾き初めた。

サルウチンは、やがてリダを軟かに抱いた。

すると急に、二個の影は一個に絡みついて月影に、たゞならずゆらぐのが、サーニンに分つた。

「何をそんなに考へてゐるんですか」

サルウチンは彼女の柔かい耳に囁いた。眼は彼女の眼と近く輝き合つた。

リダはいつも二人が抱き合ふ時のやうに、氣遣はしいやうな、楽しいやうな一種妙な感情に染はれた。

此の男の思想の程度は、自分に比べて非常に劣つてゐると、はつきり意識してゐたが、又同時に若い美しい男に自分の身を觸らせるといふ心持の快い、戦慄の出るやうな氣持をどうする事も出来なかつた。

「誰か見ますよ」と彼女は呼吸塞りさうに、かすかに囁いた。

「いゝえ、只一言云はねば……」

とサルウチンは情慾の血を湧かして一層、彼女に迫つて行つた。「來て、下さい、ね」

リダは戦いた。サルウチンから此言葉を聞く度、彼女は何物かを渴望して氣も弱り、息も寒りさうに覺えた。

「何故」と彼女は鈍く尋ねて月を仰いだ。その眼は濕ひ輝いて何物かを望んでゐた。

サルウチンは、彼女が彼の云つた事を解しても居り、又彼自身の様に渴望してゐるものと確信してゐたけれど、何故と尋ねられて、本當の事を云ふ事は出来なかつた。

「何故つて……たゞ自由に貴女を見て自由にお話が見たいんですから……かうして茲にゐるのは僕には苦しいんですよ、ね來て下さい、え？」

リダはかうしてゐるのが辛い位、快い事でもあり氣遣はしい事でもあつた。

彼女は絶えず眩ひを感じてゐた。そして乾きつた唇を動かして惱しげに囁いた。

「えゝ行きますわ」

彼女は怖ろしい避けられない誘惑が近づいてゐる事を感じながら、よろけた足取で家に行つた。

一人残つたサルウチンは肩を揺り、眼を閉ぢ、齒を露はしてほゝ笑んだ。リダが彼の云ふ通りに身を任せる場合を想像して腦が痛くなる程興奮してしまつた。

彼は今迄リダに對して、彼女が彼に接吻する事を許す様になつてからも、尙拒み難い恐怖を抱いてゐた。彼女の眼には何となく内心彼を輕蔑した様子が見えてゐるやうに思はれた。他の女に

對する時と反對に、リダに對しては自分自身がいつも餘程劣つてゐるやうに考へられてゐた。が、今彼がかつて經驗した女達のやうに、一種の定つた力のない、意志の失せた聲で、彼女が承諾の約束をしてからは彼は急に今迄、失くしてゐた彼自身が甦つて來るのを覺えた。目的の近づいて來たのを感じた。

そして淫樂の惱ましき、快さと、純潔の誇を奪ふといふ他を損ひ得る氣味好さに彼はかつと、頭に血が上る程、彼女を自由にする暴狀無慙な光景を描いた。そしてその光景に己を忘れて暫らく身を任した。

が、やがて慄へる足を踏みしめて、家の方へ歩いて行つた。

サアニンは、十分に見てサルウチンの心の状態を悉く讀みとつて了つた。そして後から尾けて行く行く忌々しく思つた。

「——こんな畜生どもが何といふ幸福を得るのだらう……リダと此奴……そんな事は餘り譯が分らな過ぎる……」

食堂で一同夜食に着いた時、リダは顔色が蒼さめ黙つて皆の視線を避けてゐた。サルウチンは其反對に動物の様に敏感に凡てに氣を配り、狡猾に嬉々としてゐた。

サアニンは平生通り、欠伸をし殊にヲツカを澤山飲んだ。いかにも退屈さうに、睡いらしく思

はれた。けれど食事が済んでから、彼はサルウチンに、まだ眠くないから、散歩勞々ついでに送らうと云ひ出した。

月は高く懸つてゐた。二人は黙つて歩いた。

サアニンは折々士官の顔を眺めやつて、まさか、撲りつける譯にも行かないがどうしたものだらうと思つた。

いつまでも二人の沈黙はつゞいた。もう直ぐ彼の家の近くと云ふ處に來た時、サアニンは突然口を切つた。

「本當に世は様々だ。色んな無賴漢がゐるんだからなあ」

「何ですか」とサアニンの云ふ事が餘り唐突であつたので、サルウチンは愕いて、かう尋ねた。

「いや、一體にですよ、しかし無賴漢といふものゝ、實は至極面白い奴等ですからね」

「何の事なんですか……」

それから呆氣に取られてゐるサルウチンに、律義とか道德とかは只口で云ふだけの事ではんたうはさうした物は自分自身の爲に作つた保護色に過ぎないものであると云つた。例へば片方で納税の義務を果して軍資の調達をしながら、もつと悪い戦争に人が死ぬ事等は屁とも思はず自分等だけ枕を高く寢て居たりして、それで義務とか道德とかを説く人間より公平で、正直で、自然な

無頼漢の方が、どれ程面白いだらうとまくし立てた。

「無頼漢のする事は全く自然な事ですよ、彼は自分の所有でない者でも氣に入ると直ぐに取る。美しい女を見ると暴力や悪計で取るんです。此の事は極く自然です。何故と云つて享樂の理解は人間だけの特権ですからね。誰にだつて分りきつた事ですがね人生は苦しむ爲にあるものではなく享樂が目的ですものね。」

天國等も元來は地上のものだつたのです。そして天國の話も決して下らない妄見ぢやありません。それは絶対の享樂の象徴に外ならないのです。」

「然うです」とサルウチンは相槌を打つて

「本當に制慾は決して人間自然の性質でなく慾望を抑へないのが一番正直な事なんです」と附加へた。

「全くその通り、そしてそんな奴を社會では無頼漢といふんです。ね、いゝですか、例へば君のやうなもの……」

サルウチンは、はつとして身を退いた。

「無論、貴方の事さ。此の世で貴方は一番善い人間です。ね、少くとも御自身の見解では、ね、けれど貴方は貴方より一層善人に逢つた事がありますか……」

「澤山あります」とサルウチン曖昧に答へを濁したが、さてサアニンの腹をどう解していゝものやら、分らなかつた。

「それは誰々ですか？」サアニンは短兵急に、突込んだ。サルウチンは、只躊ろいで肩を揺るばかりであつた。

「そら、爰にゐますよ」とサアニンは快活に笑つて「つまり貴方が一番の善人さ。勿論僕もその連中の一人だが。而して我々二人は、時さへあれば盗まうとか偽らうとか、姦淫しようとか考へてはゐないんですか、ね？ 殊に姦淫しようとはね？」

「突飛な事を云ひますね」とサルウチンは又肩を揺つて呟いた。

「とお思ひですか？」

と云つたサアニンの間には仄かに嘲りの色が見えた。

「いゝかね、無頼漢は最も正直で、自然で、最も面白い人間ですよ。と云ふのは無頼生活には少しも分限と境界の見境がないからね、僕はさうした無頼漢には、毎度特別に尊敬をもつて喜んで握手するんです」と云つてサアニンは例になく明るい顔をして、彼の手を握つた。が突然陰鬱になつて、まるで聲まで變へて

「さよなら」と云つて、踵を返すと、すたすたと行つて了つた。

サルウヂンは身動きもせず、呆氣にとられて、その後姿を見送つた。而して彼の言葉は分らないながら何となく不愉快になつた。

「この考へもリダの事を思ひ出すとすぐ消えて了つて何かしら愉快な様な氣もして來た。」「面白い先生だな」

彼の氣持は變つて或程度までサアニンも、彼の味方であると思つて興奮して自分の室に入つて行つた。

二

サアニンの家から、餘り遠くないニコライ、エゴロキツチスワロシツチュ大佐の家には、高等工業學校生徒のユリイが歸つて來た。

彼は或革命結社に加入してゐるらしい嫌疑で、モスカウから立退を命ぜられて此町に歸つて來たけれど父と、妹のリヤリヤに挨拶を済してそのまゝ部屋に入つて寢込んだ。その熟睡から醒めるといへば、考へが彼の頭を往來して、これは本當は家には歸つて來ない方がよくはなかつたかと思つた。

自分と意見を異にした父親の歴を、今後尙嚙つて行かねばならぬ事も、何うも不愉快に思はれ

た。

それに此の町も彼には厭であつた。此んな俗悪な人間ばかりゐる小都會に今後又二三年ゐる事は堪らない事であつた。

彼が人生の意義と價値を唯一つこれに認めてゐる哲學問題や、政治問題等は到底此の田舎町の凡人どもには解し得らるべきものでないと考へた。その考へも亦益々彼をくさくさした。

ユリイは徐かに窓際に行つて前庭に面した窓を明けた。が此のおつとりとした夕景も、石づくめの大都會にばかり餘り長く住んでゐた彼には、自分では自然を受してゐる氣でも、餘りにこの自然は荒涼過ぎて悲しい氣がした。

こゝでは自然は彼を慰むるでもなく却つて彼にとつて憂鬱と病的な妄想の種となつた。

「あら、兄さん、もう起きたのね。好かつたわ。丁度時刻だから……」とリヤリヤは部屋の中に跳び込んで來た。

彼女は嬉々として得意さうに振舞つた。その調子が 彼の鬱々とした寂しい孤獨な氣分と齟齬になつて、ユリイは幾分不愉快になつた。

「何がそんなに悅しいの？」

「まあ、そりや悅しい事もありますわ、それに私共は今本當に興味のある時ですもの、退屈する

なんて事、それは罪悪よ、又恥よ、私は少し仲間と仕事しなければならぬし、それに貴方の留守の間に通俗図書館を創めたのよ、そりや旨く行つてますのよ、それだもの。どうして退屈しませう」

「でも僕は退屈で仕方がない」

「まあ……そんな事云ふものぢやない事よ……やつと二三時間にしきやならないぢやないの。お歸りになつてから、それにその間眠つて了つて、それでもう退屈だなんて」

ユリイは何となく誇らしい氣持がした。嬉しがるよりも退屈がる方が何となく意味のある事のやうな氣がした。そして妹と話してゐるうち、自分の氣持が、まつたく變つてゐる事には氣が付かなかつた。

「僕は、ちつとも嬉しくはないよ」

「ぢや、いゝわ、まあ悲しみの騎士にして置くわ、ね、私のドンキホテ様さあ行きませう。私は直ぐ兄さんに立派なお方を紹介するわ、ね、さあ行きませう」

「まあ、お待ち、若いお方つて誰だね？」

「私の許嫁よ」

リヤリヤは嬉しさうに兄の顔を、覗き込んで叫んだ。

「おや、然うかね」とユリイはもう一度、妹を見返した。これが程なく人妻になるのかと思ふと何とはなしに可愛想になつて優しい感情が湧いて來た。

ユリイは彼女の背に手を廻して一緒に食堂に行つた。そこはニコライエゴログイツチも食卓について、食事を攝りながら體格のいゝ一人の若い男と話してゐた。

ユリイがその食堂に這入ると、その男は靜かに立上つてユリイの方へ歩み寄り、少しも狼狽せず名乗つた。

「今後、御別懇に願ひます——アナトオルパウロキツチレザンチエフと申します」

二人はお互に握手して快活に顔と顔を見合つた。しかし二人はさう澤山話をしない様であつた。暫らくしてレザンチエフは丁寧に彼に尋ねた。

「貴方は、長い間立退を命ぜられなすつたんですか」

「五年間です」

ニコライエゴロキツチは息子の退去の事について委しく知る事や考へる事は厭であつた。

レザンチエフはその事を少しも知らなかつたので何の氣もなく又尋ねた。

「それで、此地で何をなさらうと云ふお考へですか？」

ニコライエゴロキツチの權幕は非常に險しくなつて來た。その氣持をユリイは直様知つただけ

に却つて反抗的な調子で懶るさうに、答へた。

「差常つて何もしないつもりです」

「何も爲ない？」

ニコライエゴロキツチは立上つて尋ねた。

「さうです。何も爲ないのですが……一體何をしたらいいでせう」

と彼は挑戦的に反問した。

父は息子を叱り飛ばしてやらうかとも思つたけれど、歸つた早々喧嘩をする事は此の老士官の禮に失するので、黙つて口をつぐんで了つた。

ユリイはまるで自分を抑へる事が出来なくなつて、いつでも父に挑みかゝつてやらうと云ふ風であつた。

リヤリヤは此の場の容子におどろくするし、レザンチエフも始めて譯が分つたので、いろいろ話柄を變へようと骨を折つたが、それは却つて油を注ぐ様なものであつた。

かうして夕暮は夜になつて行つた。

ユリイは自分が悪いのではないと信じてゐた。

夜食の時ノキコフとイワノフとセミオノフとが來た。

セミオノフは以前大學に學んだ事があつたが二三月前から此地の或る家庭教師をしてゐた。ひどく肺を病んでゐたので、瘦せて、醜くて、ぞつとするやうな死の影が漂うてゐるやうであつた。

彼を連れて來たイワノフは肩幅の廣い長い髪の先生で態度の不遠慮な男であつた。

彼等はユリイが歸つたと聞いて直ぐ挨拶に來たのであつた。

彼等が來たので非常に賑かになつた。その賑かさは二三日來悄氣きつてゐたノキコフをも捲き込んだ。彼はリダに戀を打明けた日から此のかた、心の安らかな日とはなかつた。

と云つてリダの家に行くのは恥かしい事であつた。どこかで逢へたらと思つた。それにあの時以來、時々道等で逢ふと、彼に氣の毒がつて殊更深切に挨拶するので彼の希望は又新しくつながるやうに思へた。

「どうです、皆さん」と皆が愈々歸らうとする時ノキコフは云つた「何時かあのお寺で、ピクニックをしようぢやありませんか」

この動議には一同直ぐに賛成した。そしてその日割や、仲間を決めた。その時ノキコフはサアニン兄妹を呼んでは？とすゝめた。結局その六人と、シャヴロフ、シナイダカルサキナ、オルガノザナ・サアニン兄妹、サルウヂン・タナロフ等を招く事に決めた。

そして一同は戸外に出た。

月は隈なく照つて、静かなおつとりした夜であつた。

イワノフは眠いと云つて、獨り無頓着に街道を向うの方へ歩いて行つた。

ノキコフはセミオノフと一緒に歩いてゐた。

レザンチエフはピクニツクの相談といふ口實のもとにリヤリヤの傍に大分遅く迄居残つた。

ユリイは一人庭に立つてゐた。そして父はまだ寝ないのだらう。今二人が逢へば又役にも立たない争をするだらう。それは厭な事だと思つて、じつと其處に立つてゐたが、不意にセミオノフの辿つて行つた道の方へ歩き出した。

セミオノフはまだ遠くへは行つてゐなかつた。

よろ／＼とあへぐ様に前屈みに歩む彼の寒さうな影法師がはつきり大地に映つて、時々重苦しい咳をしては躑けて行つた。

ユリイは彼に追ひついて、その容子がまるで別人のやうに變つてゐるのに氣がついた。

夜食の時は始終、他の者より餘計に笑ひ興じてゐた。セミオノフが今は悲しげに慘ましい姿で歩いて行く、そして堪へず苦しさに絶望の音がその咳から響いて來る様であつた。

「貴方寒くはありませんか」とセミオノフがあまり度々咳をするのでユリイは氣にかゝつて尋ね

た。

「僕は何時でも凍えてゐるんです」とセミオノフは忌々しげに答へた。

ユリイは何となく氣が咎めて話を變へ様としてその聲に熱心を現はして尋ねた。

「貴方は餘程、以前大學をお止めになつたんですか」

「ずつと以前です」とセミオノフは暫らくしてからやつと答へた。

それからユリイは學生生活について殊にその最も重要と考へてゐる事等に関して、盛に説き立てた。セミオノフは黙つて耳を傾けてゐるやうであつた。

やがて、ユリイの話は概くやうな調子で、革命傳教の衰微した原因に及んだ。

「貴方はベエベルの最後の語を讀みましたか」

とユリイは尋ねた。

「讀みました」

「どうです？ よくはなかつたですか？」

セミオノフは、その返事をする代りに興奮してその丁字杖を打振つた。そして急いで切れ切れに叫んだ。

「貴方に答へる事は……斯うして僕は死ぬるといふ事です……いゝですか。たゞ死ぬるんです

ぞ」

彼は又、その杖を振つた。其影法師も氣味悪く、彼に並んで、その黒い腕をひよろ／＼と動かした。その影を見つけたセミオノフは忌はしさうに、吐き出す様に語を續けた。

「ほら、僕の背後には死が、僕のやる事を一つ一つ竊つてゐるんです……ベエベルに僕が何の用があるんだらう……皆が一生喋り散らしてゐるのがよく分る……だが僕の知つた事はたつた僕が今日明日にも死ぬと云ふ事だけです、分りますか、忌々しい事だ」

「大學の事や、ベエベルが云つた事が僕に重要な事とでも、貴方は考へてゐるんですか——若しも貴方が僕のように、死なねばならない事になつて、それを自分で知つた時、その時も矢張りベエベルやトルストイやニイチエやその他あらゆる馬鹿達の云つた事に意義があるとでも思ふんですか。」

死ぬと云ふものがどんなものか、貴方には分りますまいかね……僕は死ぬるんですよ。小説に書いてある事ぢやない。實際なんです。自分の身になれば貴方だつて變な氣がするに違ひないあゝ、僕は死ぬるんだ。ただそれつきりですよ」

セミオノフは又苦しさに咳き入つた。

「今直ぐにも死ぬ様に時々思ふんです。冷たい地の底にね、此の鼻は落ち手足は腐つて了ふんだ。

そして僕が現に僕が今生活してゐる地の上には、貴方は相變らず生活して行くんです。まだまだ生きて行けるんです。散歩もされるでせう、月も眺められるでせう。僕の墓の前を通られる事もありませう、そしてその時僕は何とも云へぬ、淺間しさに腐つて行くんです。あゝ——」

「それにベエベルとか、其他の鳥羽繪にある様な連中が僕にとつて何でせう」と彼はいやで堪らぬと云つた風に呟いた。

ユリイが甚しくその言葉に狼狽へてる時セミオノフは聲低く別れを告げた。

「さよなら、僕の家はこゝです」

ユリイは見すほらしい彼の手を握つて、何とか慰さめてやらうと思つたけれど、とても慰さめる事は出来ぬと思つて

「さようなら」と云つた。

ユリイはセミオノフの姿が消えて、聲音と咳が聞えなくなると、そろ／＼歸りかゝつた。何だか急にあたりが暗くなつたやうに彼に思はれた。

彼は家に歸つて自分の室に這入り、先刻のセミオノフの言葉を考へた。そして今迄非常に重大に思つてゐた事が、實はさほど必要でなかつたと云ふ事が、初めて彼の頭に浮んだ。

自分がセミオノフと同じ立場に立つたら、きつと同じ事を嘆き訴ふるだらう——

それは自分の生涯が人生を益しなかつた爲でもなく、理想が完成しなかつた爲でもない——只生の享樂の盡きないうちに、すべての官能が死で、閉ざれて了ふからである……

ユリイは間もなくかう考ふる事は恥かしい事だと思つた。そして自ら辯解した。——時々悲しげに自分に嘔やく、本然の自分自身の聲を聞くまいと努めた。けれどもそれは苦しくもあれば不愉快でもあつた。

そのうち彼は苦しい眠りのうちへ落ちて行つた。

翌日空には一點の雲もなく、澄み切つた空氣は鮮やかに陽炎を燃やしてゐた。

リヤリヤは今日のピクニックの爲に早朝から一生懸命になつてゐた。そのうち時刻通りにレザンチエフ、ノキコフ、イワノフ、セミオノフが集つて來たので、用意の馬車に乗り込んだ。間もなく馬車は草原の道を走つた。匂やかな風は車を吹きぬけて。車中の人々の髪を撫でた。

やがて一行は、後方から來たサルウデン、タナロフ、サアニン、リダの馬車と一緒に走つた。兩方の車からは、冗談や、挨拶やら取りかはされて、非常に愉快さうに賑はつた。けれどユリスワロシツチは同じ車の中で、セミオノフが何の心配もなく笑つたり冗談を云つたりしてゐるのが不思議でもあり、不快でもあつた。昨夜あんな事を云つた今日此程樂しさうに振舞つてゐるのを見ると、全く彼には譯が分らなかつた。大して悪い容態ではないのか知らとも思つた。

彼は頭が紛叫して來たので、もう考へまいと努力した。

山はだんくくと、はつきりとなつて來て、頂上の寺の塔や白壁は、日に輝やいて見え出した。山裾には河が洋々と幅広く流れてゐた。

馬はやがて瑞々しい草を踏んで走つた。草、草花、さては水の香が強く鼻を衝いて來た。會合點には早や三人の先着が待つてゐた。

一人の學生といろんな色模様のある小露西亞の服裝をした兩人の娘で、草の上に布を敷いて支度をしながら、笑つたりふざけたりしてゐた。

馬は鼻を鳴らして止つた。一同は喜び勇んで跳び下りた。

リヤリヤは茶の用意をしてゐる二人の娘に直ぐ、挨拶をした。

リダは上品を逸れない程度に、兄とユリイをその娘達に紹介した。

そして又急に思ひ出した様に、サアニンとユリイをも紹き合した。

サアニンは逢ふ人を皆面白いと思つた。ユリイはその反對に、自分に取つて偉いと思はれる人は殆んどないと思つた。

イワノフはサアニンをあらまし知つても居り一番イワノフ自身の氣に合ふ人物なので、第一にサアニンの傍によつて、語を交へた。

その中食事が始まつて、チツカや葡萄酒を飲み出して來ると、皆打ち解けて陽氣になつて來た。愉快な笑聲は彼方此方から起つた。競走もした、山にも登つた。

一同が又、草原のもとの場所に下りて來て茶を飲んでゐるうちに、太陽は暮れかけて、その弱い光線は河を黄金色に輝やかした。

それから皆急いで河岸に下りて舟の中に席を占めた。舟は水の上を軽く這つた。

「ユリイニコライエイツチさん、何故貴方は黙つてゐらつしやるの？」とリダが口を切つた。

「何も話す事はないやうですから」

「ユリイニコライエイツチさんは下らない話がお嫌ひですよ」とセミオノフが口を入れた。

「あら眞面目な話を？」とリダが云つた。

「ちや、あちらを御覽なさい。あちらに話題がありますよ」とサルウチンが岩の方を指した。

とそこには半ば茨で掩はれた暗い穴が見えてゐた。

「あの穴ですか」とイワノフが引取つて

「どんな洞穴かそれは知らないが、何でも貨幣鑄造所だつたとか云ひますがね。無論お定期通り一味の奴は捕つたですよ。悲しいことには此のお定期通りと云ふ奴が來ますからね」

「それが來なかつたら君は二十哥片の錢でも造るのかね」とノキコフが尋ねた。

「なあに哥片なんか、けち臭い、留布さね、無論、君」

サルウチンはイワノフを面白く思はなかつたから聞える様に高く噓をした。

けれどイワノフは頓着なく續けた。

「其後、必要がないから荒れるまゝにしてゐるんですけどね。僕は子供の時這入つた事があるが多少は面白いですよ」

「そりや面白いでせう。キクトルセルゲイエキツチさん、貴方お這入んなさいよ、貴方勇氣のあるお方ですもの」

リダの調子には、皆の前でサルウチンを嘲けりたがつてる様な趣があつた。「何故にです？」

「僕が這入りませう」とユリイは突然叫んで顔を赤くした。何となく皆が笑ひはしないかと恥かしく思つて。

「這入るがいゝですよ」とイワノフは笑つた。

舟は岸に着いたリヤリヤは急に氣遣はしくなつて來た。

「兄さん。そんなつまらない事、爲ないで下さい」

「無論さ たゞつまらない事さ。だが多少かはつてゐて面白いだらうよ」とユリイは努めて平氣を裝つて答へた。

洞窟の入口から暗く濕つほい内部を覗き込んだ時、サアニンは、只二三の者どもの注意の的となる爲こんな面白くもない危ない事を爲るユリイの態度が分らなく、又滑稽に思はれた。そんな目的の爲なら、もつと雜作もない事がありさうなものだと思へた。

ユリイは蠟燭を灯して人々の嘲笑に對抗するやうに、自ら笑ひながら這入つて行つた。彼は用心深く手探りして這入つて行つたが、洞窟の内は濕々して不快でもあり、危なくもあつた。

彼は引返さうか、それとも少し時の經つのを待つて皆には深く這入つた様に話さうか知らとも思つた。

此の時、不圖後方の方から足音が聞えて來た。ユリイは蠟燭をあけてすかす様に見た。美しい娘が一人こちらへやつて來るのであつた。

「シナイダバウキナさんですか」

「さうですわ」

とその娘は驚いて尋ねた。ユリイにさも愉快さうに答へた。

ユリイは娘の云ふまゝに嬉しさうに微笑んで、危険等は考へても見ないで氣輕に進んで行つた

四方から洞窟の壁はおびやかす様に兩人に迫つて來た。頭の上には恐ろしい土の蓋が、生物の様に掩ひかぶさつて兩人を威壓してゐるやうであつた。一切が墓のやうな印象を與へた。

カルサキナは少し氣味が悪いので、ユリイに助けを求むるかの様近く寄り添つてゐた。

「まるで、生き埋めにでもされたやうですわね。こゝならどんなに叫んだつて他の誰にも聞えはしないと思はれますわね」

「聞えませんが」とユリイは微笑したが、次の瞬間には彼は暈を覺えた。此の美しい娘は今自分の手中に落ちてゐる。誰だつてその叫び聲を聞く事は出來ない。或る慾情が彼の心を襲つたので、彼の頭の中は熱風のやうに渦卷いた。けれども彼は直ぐに考へ直した。

革命主義者ともあらうものがと自己を制した。

「どんなに響くか一つ試して見ませう」と云つた聲はかすれて顫へた。

「なあに……」と女は尋ねた。

「一發やつて見ませう」

「何か落つこつては來ないでせうか」

ユリイは大丈夫と確信しながら云つた。

「さあ どうですかね。貴女怖いんですか？」

「いゝえ、さあ撃つて御覽なさい」

ユリイは手を伸ばして曳鐵を引いた。まぶしい火の光が閃いた。そして怖ろしい轟が鳴り響いた。

「これだけですな」とユリイはさも何気ない風で云つた。

「歸りませうよ、さあ」

二人は歸りかけた。カルサキナは前になつてユリイに背を見せて歩いた。ユリイは脊や肉附のいゝ腰を見ると、又或る慾情が起つて來た。

「あのね、シナパウロキナさん、貴女は僕と一緒に此の様な所を歩きまはつて怖くはないんですか。此處からは叫聲も聞えはしないし貴女は僕を些とも御存じないぢやありませんか」

二人とも明かに羞恥を感じたが、又空をかける様な快よい感情をも覺えた。

「妾は貴方を道義正しい御方と思ひますもの」と女は弱く少し慄聲で呟いた。

「それは屹度、貴女の見違ひですよ」とユリイは熱い呼吸をした。

「それなら、私身を投けて了ひますわ」

カルサキナは一層顔を赤らめた。

此の簡単な言葉はユリイの心に深い同情を漲らした。

彼の心の興奮は消え去り、頓に自由と輕快な氣持になつた。

しかしカルサキナは妙に情が熱して考へた。

あんな事を云はれても、腹が立たない所か却つて、快よい感情を覺えるのは何故だらうと思つた。

そして彼等が、黄色い粘土で汚れて出口に立つた時、

「で、どうした」とセミオノフは平氣で尋ねた。

實は先刻、洞窟の中での銃聲を聞いて、妹のリヤリヤは泣かんばかりに心配してゐたのである。

「可成り珍らしいです。そして美しいですね」とユリイは辯解でもするやうに云つた。

夜は四圍に靜かに忍んで來てゐた。月は既に上つてゐた。

「さあ、もう出發しませうや」とイワノフが舟の中から叫んだ。

舟は再び、河の中央に出て、際しもない空を迂るやうに、進んだ。

鷺が鳴き出した。實に靜かに澄み渡つた夜であつた。

岸の突出してゐる部分の陰が舟に落ちてゐるが、やがて明るみに近づてゆくと、四圍は前より

一層明るく、廣く、自由に見えた。

カルサキナは上半身を伸ばしながら、美しい透きとほつた聲で歌ひ出した。歌謡は小露西亞の

民謡で温かに悲しいものであつた。

カルサキナが歌ひ了へると盛な拍手が起つて水の上を響き渡つた。

「もつとお歌ひなさいよ。ヅビヌシユカさん、貴女の自作の歌なら尙結構ですけれど」とリヤリヤは望んだ。

「貴女は詩人でよもおありなさるのですか。神様はお氣にさへ召せば一人の人間にいくつもの才能を與へて下さるんですね」とイワノフは云つた。

「さあ、歌つて頂戴よね」とリヤリヤは又願つた。

カルサキナは少し極り悪るさうに微笑んでゐたが、直ぐに又歌ひ出した

戀人よ 吾が戀人よ

君は知れりや

君が胸に憧れ寄る吾が心を

吾は此の祕事をいと深く胸に抱けり。

此世の誰かそを知らむ

たゞ かの涙の日 靜かなる夜にのみその思ひ浮び來む

又彼の星よ森の木よ

さあれ よし此の祕事を知るとても、

言痛き者もあらざれば

あゝ此の思の嬉しさよ、

一同は又も悦んで拍手した。皆の心は有頂點に高くなり、自由に奔放に愛と幸福を求めてゐた。と突然イワノフが大い低音で叫んだ。

「夜よ……日よ……さてはシナイダパウロキナの君の瞳よ……希はくば戀愛深くあつて貰ひ度いな。そして僕はその幸福者でせうか」

「致へてあげよう、君は決してその者ぢやないよ」とサアニンが云つた。

「嗚呼悲しいな」とイワノフはおどけて叫んだ。

一同は吹き出した。

「妾の詩は拙かつたでせう」とカルサキナはユリイに尋ねた。

「僕はいゝと思ひましたよ」とユリイは彼女の黒い美しい眼を感じて、その實大していゝとは思はなかつたけれど、眞面目な顔をして云つた。

「そりや、兄さん、貴方はまだよく此のシナさんを十分知つてはゐないのね。シナさん自身からして、もう調子が佳くて、美しく、それに聲も響がよくて美しく、其の詩は、又調子が佳くて美

しく、シナさんて云ふ名からして調子が佳くて、美しいんですもの」
とリヤリヤは喜びで一杯になつて、カルサキナを抱いた。彼女はカルサキナの事をシナと呼んでゐた。

しかしリダに取つては、みんなのカルサキナに對する稱讃は不愉快であつた。彼女は不意に、そつけなく

「もう歸りませう」と笑ひもせず云つた。

「リダ、お前は歌はないか」とサアニンは妹を顧みた。

「いゝえ、私は氣が乗らないのです」と少し激した調子で云つた。

しかしみんなは、まだ歸るのが惜しかつた。けれどレザンチエフが明日の事を思ひ出してリダの動議に賛成すると仕方なく一同歸りかゝつた。

歸りは馬車の中でも誰も餘り、はしやがなかつた。各自何か考へ入つたと云ふ風に、

往きと同じく野の草は人々の靴を打つた。涯もない野には青色の月光が煙の様に漂うて、物音一つしない静寂な夜を馬の蹄だけが、此の閑寂を破る一つの物音である様に響いて行つた。

その後二三日經過した或夜、リダは遅く家に歸つた事があつた。

筋肉は緊りがなく、何とも云へず四肢五體が疲れ切つた様子で、氣持も憎く、些細な事には氣

も向け度くないやうな呆やりした風であつた。

彼女は何故こんなにだるいだらうと思つて見た。そしてやつとそれに氣附いた。

「それは、サルウヂンに身を任した爲に相違ない」とさう思ふと急に彼女は愕きと憎しみの情で頭が痛くなる程かつとなつた。

彼女は、あんな輕薄な拙らない、低級なサルウヂンに對して少しの權利を有たなくなつたと思ふと堪らなかつた。

もう、彼の前では意志も、自己も奴隷のやうに、素直に捨てなければならぬ。どうして此んな事になつたのだらうと思つて見たが、それは分らなかつた。

いつもの通りサルウヂンを氣儘に操つてゐるうち、どうする事も出来ない衝動を覺へ、考へも分別も失くなつて、燃ゆる様な情慾の渴望が、彼女を支配したのであつた。その時彼女の身體からは力が失せてしまひながら、その露出した足に、サルウヂンの両手が觸るゝや痒癢るやうに震へた。そして身體が、その両手の方へ引附けられるかのやうに自分から身體を彼の方へ押し附けた。

劣情に燃へ熾るサルウヂンの眼の下で、彼女は快よい恍惚と、狂ふ様な感能の苦しさを織り交ぜて、もはや従順に彼に身を任してしまつたのであつた。

リダはかう思ひ浮べると気がくさくさして来た。
 彼のような馬鹿な奴等と自分の一生を穢して了つた事は彼女の自尊心を傷けることであつた。
 しかし彼女は又思ひ返した。
 ——いや何でもない事だ。二人出會つた。それで密通いただけの事さ。只やつてみたかつたから身を任したただけだわ。娛しまれる時娛しまないのは馬鹿な事だ。何でいけない事があらう。
 と

斯う考へると實際何でもない事であつた。

あらゆる不安な思は掻き消すやうに消えて、自分の心が鳥の様に自由に、軽くなつたと思つた。

心に適ひぬ

されば愛しぬ

はや飽きぬ

されば放ちぬ

斯う口ずさんで自分で耳を傾けた。

「お前はまだ寝ないのか、リダさん」

窓の彼方から兄の聲がした。

リダはびつくりして縮み上つた。が直ぐに微笑して、裸出した肩へ大きな布を引かけて窓際に
 出た。

「何て、貴方はびつくりさせらんです」

サアニンの眼は輝いた。

「其様な事しても駄目だよ」と面白さうに彼は低い聲で意味深さうに

「布片なんか ない方が遙かに、お前は美しいよ」と云つた。

リダには其の事は分らなかつた。そしてサアニンが擲捨ふやうに笑つたので一層彼女はどきま
 ぎした。

「お前は別嬪だね」

リダは兄の顔を、素早く見たが、その表情に愕いた。彼女は見てはいけないものを見た様に
 心は淺間しさに慄へた。けれどその恐ろしい印象から逃ける爲に彼女は、もつと窓から身を乗り
 出して兄妹らしく微笑んだ。

柔らかい月の光が一層優しく、彼女を撫でた。

「人間といふものは、いつも自分の幸福に萬里の長城を設けるものだからなあ」

リダはサアニンの此の聲に、明かな不自然と興奮とを讀んだ。

「どうして？」とリダは益々愕いて尋ねた。若し彼を見てもしようものなら、何か恐ろしい出来
 事が起らねば止まないと云ふ豫感に慄へて、その視線は庭に投けてゐた。

——「たい。そんな事が出来得べきものだらうかといふ事さへリダは考へた事はなかつた。と同時に又どこかで面白いと思ふ心もあつた。」

そして彼女の熱した頭は、最早や何の見境もなくなつた。嫌悪と渴望の好奇心から自分の頬の上に、兄の熱い息を味つた。そして彼女は一種、むづ痒い様な快よさを喚び起した。

「たゞ、さうさ。」と云つたサアニンの聲は涸れてゐた。

リダは電光が全身を走つたかの様に不意に愕いて立上つた。彼は自分が今何をしたのか知らなかつた。

彼女は卓子の方へ前屈みになつて、ランプを消した。

「もう、寝る時刻ですよ」

ランプが消えて外は一層明るくなり、サアニンの姿ははつきり月光に照り出された。彼は草の中に立つて笑つてゐた。

リダは寢床に這入つても心の動搖、胸の鼓動をどうする事も出来なかつた。

——「本當に自分は狂つてゐるのではないか知ら。つい偶然云はれただけなのにもう私は……あんな事を考へるなんて、もうそんなに迄、墮落してゐるのか知ら……」

リダは枕に埋つて泣いた。そして自身を非常に不幸なものと思つて泣いた。サルウチンから處女の誇を破られた事を泣いた。

そして兄は自分がもう墮落して了つてゐると思つたからあんな眼付をするのだらうと思つた。終ひには、彼女は全女性の爲に涙を流した。妻となつてから、その若さと美しさをいつでも男の爲に使はねばならぬとは何といふ侮辱だらうと感じた。男の心を娛しますれば、娛します程、彼等の女に對する侮辱は加つて行くものだと思つた。

「どうしてさう男にばかり権利があるのだらう？」とリダは暗闇を見つめた。

けれども、自分自身の事を考へ出すと、彼女のまだ若い力の漲つた肉體は昂然と、彼女に肉體自身の権利を求めた。

彼女は愉快であり、必要なものなら、取つてそれを味ふのに何の不思議があらう。肉體の欲するものは何でもやつてよいのだと云ふ権利の念を喚び覺した。

そしていろ／＼な思念が、次から次に彼女を襲うた。

恐ろしい昏亂に陥つて彼女の魂は、疲れきつた、息苦しい夢の中に這入つて行つた。

丈の高い、冴えた聲を有つた多少センチメンタルな眼をしたカルサキナは、ユリイに取つて深くその心に彫みつけられた。しかしユリイは又彼一流の解釋から、彼女の肩や胸や眼等が彼の氣に入つたのではなく、上品で純潔で處女らしいのが好きだと思はうと努めた。

彼は恰も初めて彼女に逢つた時、そのふくよかな身體が彼を興奮させた事は忘れたかのやうに。そしてさう考へる事が遙かに高尚で、善良であると思つた。

しかし彼の心には彼が醜惡だと決めて卑んでゐる劣情がすでに彼女に對して起つてゐた。勿論それは、彼の意識にはまだ上つてゐなかつたけれど。

けれど此の無意識の熱情は、いつもと違つて、別な特殊の道を取つて現はれた。彼はかうした若い美しい生涯を生る象徴と見て、これを描いて見度いと云ふ慾望を感じた。

ユリイは以前から繪をやつてゐた。彼は暇さへあれば畫を描いてゐた。畫家とならうとした事もあつたが、結局金の缺乏と革命運動が彼をその道に進ませず、今は時々刷毛や調色板を握るだけであつた。

本當に勉強したのでないから、彼の企てはいつも、不愉快で期待逸ればかりを齎らした。

今度もカルサキナから受けた繪の觀念が、まだ彼の心に出來上らないうちから、すつかり感興に驅られて夢中に着手した。

彼が最初の一刷毛をキャンパスの上にタッチした時、彼はまるで有頂天に興奮してゐた。今から描かうとする繪が一々快よく彼の頭の中に浮び出た。

所が次第に技術上の困難が出て來た。頭の中では瞭然と力に充ちてゐるのにキャンパスの上では淺薄な弱々しいものにしか出來ないので、彼の頭は次第に困亂して來た。

そして段々現はれて來たのは、特殊の性格等少しも出てゐない老婆の薄のろなものであつた。ユリイはほんやりと見つめて、その繪のなつてゐないのがつかりした。

泣く事を恥ぢと思つてゐなかつたら、今彼は聲を擧げて泣いたであらう。しかし彼は繪の前に坐つてその愚鈍な生命を見てゐるうちに、愚鈍とか、淺薄とか云ふものが表徴してゐる此の田舎町で今後二三年を過さねばならぬなら死んだ方が優だと考へた。

その考へは又、彼に新しい畫題を與へた。

今度は死を描いて見ようといふ願ひに早變りした。

ユリイは小刀を取つて、忌々しさうに、今迄あんなに興奮した彼の生命を刮ぎ始めた。それは彼に取つて忌はしく腹立たしい事であつた。

それに繪具の旨く除れない事も又木炭の線が油の下塗に着かぬ事も、彼を肉體的に苦しめた。彼は刷毛を取つた。けれども直ぐ精力は消えて了つて又懶るさうに畫き始めた。しかしこの氣乗りのしない運筆が、却つてどんよりした調子を旨く出して來た。けれども描いてゐる中に、彼の死の觀念は自然と消えて、今度は老境の描寫になつた。

彼は疲れ果てた老婆が、荒れ放題の路を、棺を脊負つて、どんよりした陰氣な夕闇の中を、とほくゆく姿で現はさうとした。

暫らくしてノキコフが來て話しかけたが、彼は、たゞ聞き流して自分の仕事を止めなかつた。

ノキコフは溜息を吐いて座床に凭れた。彼は黙つて考へるのが快よかつた。リダの拒絶は少なからず彼を惱ました。リダとサルウヂンとの浮名は、すでに此の町では、至る所の噂となつてゐるが、彼の耳にはまだ這入つてゐなかつた。で彼は誰をも妬まうとは思はなかつた。

彼はユリイの描いてゐる繪を見つめつゝ、自分の生命の老い朽ちねばならぬと思ひながら、さて死なうと云ふ考へは一寸出て來なかつた、彼はたゞ、自分の生命がかくも慘めに廢つた以上は他の人々の爲に生きて行かねばならぬ。これは義務であると思つた。それで此處の一切の事は棄て、了つて、ペテルスブルグに行き其處で再び黨派との關係を結ばうと云ふ考へが既に彼の心に

湧いてゐた。

彼はかうした壯嚴な理想によつて、輝やかしい悲壯美の圓光を放つてゐる彼自身を見た。

リダに對する軽い吐責の情は、少なからず彼を動かして、無意味な涙が流れさうになつた。ユリイは絶えず描きつゞけた。

ノキコフは愉快さうに立上つて彼に近づいて來た。繪は今の處なか／＼仕上げにはなつてゐなかつた。それがノキコフには却つて深い印象を與へた。

彼は此の繪を非常に旨いと思つた。彼はすっかり感服した容子を隠しもせず、無邪氣にユリイを見やつた。

「どうかね？」

ユリイは此の出來榮の嬉しさで、さつきからの不愉快が、すっかり拭ひ去られてゐたので、快潤に尋ねた。

「いゝさ 大變に巧いよ」

「だけどね こんなもの、何にもならぬよ」

ユリイは自分を天才だと思つた。そして天才はいつも自嘲の氣持を抱いてゐるといふ様な見解を持つてゐた。

ノキコフは此の言葉をユリイの勿體振つた言ひ草であると思つてはゐるけれど彼自身の失戀の悲しさがふと心をかすめると、成程こんなものは全く何でもないと思つた。それでノキコフは考へも無く彼に云つた。

「どうして、何にもならない？」

ユリイは此の間には直ぐに答へる事は出来なかつた。何故かと云へば先刻の言葉でも、大して根柢あつて云つたのではなく只自分に對する狂信と人の褒めるものを容易に貶して了ふと云ふ事が、何となく優れた事と思はれたために云つたに過ぎなかつたのである。

「ね 君」ノキコフは又云ひ出した「君が、『南方』に出した論文も僕は讀んだよ。あれは全く巧いね」

「あの様なものはいやなものさ、あんなもので一體何が出来るものかね。掠奪と處刑と暴力で、世の中は巧く行くものだよ。論文など何の益に立たう、彼を書いた事を今僕は後悔してゐるよ。あんなもの馬鹿どもが讀むだらうよ。讀んだつて何にも役には立ちやあ、しないよ」

ユリイはセミオノフの言葉を思ひ出してゐた。

彼は嘗て黨運動に與してゐた時の事や以前には救つてやらうとしてゐた階級に對して、今ではまるで冷淡になつた事等が、彼の頭を走り過ぎた。

ノキコフは急に

「そんな立場から論じたら、何事をしても役に立たないさ、君等は皆利己主義だね」と云つてサアニンの事を思ひ浮べた。

「實際は又さうしたものだよ」

ユリイの言葉は次々に熱して行つた。それは夕方のわびしさと、前に廻らした黨派運動時代の追想とから、遽に激して正常を主張する氣分を興奮させた様であつた。

そして後には自分で自分を熱中の中へ、好んで追ひ込んで行くらしかつた。

「全體、僕等のあらゆる努力が何を意味するんだね、我々が望みを囁してゐた理想の將來に、少しでも近づく事が出来たかね。我々の夢みてゐる自由そのものさへ、すでに支離滅裂の最初の芽を含んでゐるのではなからうか。」

そして人間がその理想に到達し得た後は又逆もどりをして、歴史は最初からやり直したね。それでなければ人間唯自分の事しか考へないね。しかしどんなに調子が好くつても、一體僕等が何物に到達するかね、無論自分の才能と仕事で名を擧げる事は出来るだらうさ。そして低劣な自分以下の人間の尊敬は贏ち得るだらう、しかしそんな尊敬がその人間にとつて何にならう。そんな風の生涯がつまりお終には墓まで續くのだ、それでも猶その人間に意義があるかね。結局見すほ

らしい骸骨の上に月桂冠がかゝやくだけさ」

ユリイは悲痛な面持でつゞけた。そして自分自身の言葉にすつかり満足して耳を傾けた。その言葉は實に立派で堂々として痛切なものと思はれた。そして彼一流の自己讚美の感情が、物々と湧いて来た。

「それで運が悪るけりや、隠れた天才であるけりやならない、滑稽な夢想家としておどけ新聞の種さ。道理も、理解もない人間として誰の役に立てるものか」

「あはムムム」ノキコフは彼の言葉を遮つた。

「誰の役にも立たないと君がさう云ふのだね。でそれは君自身の告白といふ事を君は心づかないのかね」

「君は本當に滑稽だね。僕が僕自身の人生觀を持たないとしても君は思つてゐるのか、しかしね僕等がいくらあがいたつて世の中はどうにもならないものだよ。例へば、僕が存在しなかつたと假定して、此の世がその爲一文の損でもするのかね。それでゐて立派な品位ある人間としては、その一文の價値もない事の爲に生きて行かねばならず、生きて行く爲には苦しみもせねばならず、そして苦しみ苦しむ許りで死なねばならないのだ。」ユリイの言葉は次第に別問題に這入りつゝあつた。

今はノキコフに答ふるのではなく、彼特有の決りのない感情に對して喋つてゐた事を、彼は自分では氣がつかなかつた。

「いゝかね、此の避けられない事實が僕を苦しめるのだ」彼はさも物慣れたやうに云つた。けれど心ではセミオノフの云つた死の事を思ひ出してゐた。

「僕はこの死と云ふ事實が當然である事も、何人の抵抗も許されない事も知つてゐる。けれどもその事は餘りに悲惨であり凄愴であり過ぎる」

「なあに、死は君一つの必然な物理學的現象だよ」とノキコフは自分の陰氣になる感情をいつはつて、何の頓着もなさうに平氣で答へた。

「おや、何だつて、それが僕に何の關係があらう。たゞ僕等の死が誰の役に立たうが立つまいが皆詰まらない事だ」ユリイはノキコフの態度と言葉に氣を苛立たせてかう云つた。

「君が十字架にかゝるとしてもか」

「それは全く別の事だよ」とユリイは曖昧に斯う答へた。

「君は矛盾してゐるよ」とノキコフは優越感で揚々とユリイを見下してかう注意した。

ユリイには此の調子が直ぐ分つた。彼は非常に怒つた。両手で髪の毛を撚つて鋭く叫んだ。

「何あに、僕は決して矛盾ぢやない。その二つの間に大きな區別のある事は分り切つた事ぢやな

いか。例へ僕自身から進んで死ぬとしても……」

「いや、區別はないよ、全く一つだよ、そのあれだけだよ君等のいつも氣をつかつてゐるのは……如何に自分等が烟火や喝采で騒がれるかだ。それだけを願つてゐるのだ。兎に角利己主義だよ。それだけぢやないか」

ノキコフは依然として、自分が優れてゐると思つた調子で續けた。

「それは君の假定の勝手さ、しかしそれで、此の事實は些とも變りはしないよ」

二人の話は全るで、繼れあつてしまつた。

ユリイは順序の立つてゐなかつた事に、やつと氣附いたけれど、彼はも早やその筋道を見付けて、引出す事は出来なかつた。其の話は今さき迄、張り切つてゐたのだがと、彼は忌々しさうに彼方此方へ歩き廻つた。そして自分の氣を落着ける爲にかう考へた——氣分が巧く合はないと筋道の立たない事ばかり云ふものだ。

二人は暫らく黙つた。ユリイは窓の所に一寸立止つて外を見てゐたが帽子を握つて

「ちつと散歩しよう」と口速に云つた。

「よからう」とノキコフも直ぐに賛成した。彼はひそかに若しヤリダに逢ひはせぬかと云ふ希をもつて散歩路へ出た。しかし幾度も、その路を往き來したけれど遂にリダに逢ふ事は出来なかつ

た。

二人は公園でいつもやつてる音樂堂の方に氣乗りのしないながらも耳を傾けた。いつも此處では拙い合奏ばかりやつてゐるのであつた。

樂人達はお互に競争でもしてゐるやうに、又耳も眼も持たないかの様に各々一人だけで演つてゐる様にやるのでまるで調子は合はなかつた。けれどもそれは遠くから聞くと、團々とした一つの柔かな、又悲しげな調子をもつて響いて來た。

散歩してゐる連中は大がいに同じ連中で其の往き歸りに幾度も顔を見合した。その連中は冗談や笑聲やで賑かであつた。そしてあの物哀しい音樂にも、此の靜かな夜にも、不調和である事がユリイを不愉快で、忌はしい氣持になした。

二人はやがてサアニンと逢つた。彼は愉快さうに、幾分擲揄氣味に見ゆる微笑で、挨拶した。此の事がユリイには氣に入らなかつた。彼の耳にはサアニンの言葉は、凡て皮肉に痛く聞えた。そこへイワノフが同様に愉快さうに聲高に挨拶してやつて來た。けれど、さつきからの拙い氣分は動かなかつた。

「どこへ君は行くのか」と先を越されまいとしてノキコフはイワノフに尋ねた。

「僕の友達を奢らうと思つて……」と衣囊からヲツカを出して物體らしく、笑ひながら答へた。

サアニンも直ぐ聲を揃へて笑つた。

かうした事をユリイは無作法であり、俗悪なものであると思つて、忌々しきうに肩を揺つて顔をそむけた。

サアニンはその氣持を知つたけれど氣にもかけず相變らず、愉快的微笑を洩らしてゐた。がイワノフは意味ありけに、その低い聲を長く引いて、

「僕は君に感謝しますよ。僕は、僕があゝの收税吏見たいな者でない事を感謝します」

ユリイは顔を赤くした。忌々しい奴だと、イワノフを輕蔑して又肩を揺つた。

「ではノキコフ君、僞信家ノキコフ君、君だけは一緒に來て呉れる様に」とイワノフはノキコフを促した。

「どんな、下らない事の爲に？」

「いや、大いに下る事の爲にさ」

ノキコフは答へもせず平氣を裝つて其處等を見渡した。しかしリダの姿はどこにも見當らなかつた。彼は打怖れた。

「リダかい、リダは家に坐つて罪を悔いてるよ」とサアニンは微笑んで云つた。

「馬鹿な、それより僕には一人病人があるんだ。だから……」とノキコフは狼狽して辯疏した。

「なあに、そんな病人は君の手を藉らなくても、斃つて仕舞はね、チツカだつて君の手を藉らなくても、僕等だけで飲まれるにはやれるがね」とイワノフは吐き出すやうに云ひ切つた。

「うゝむ、そして酔つばらうかなあ。今の俺にはそれがいゝだらう」とノキコフは辛い思をして答へた。そして、

「では行かう」と元氣らしく大聲で云つた。

彼等はユリイを跡に残して行つて了つた。

ユリイは一人になると自分だけの考へを考へつゞけた。その時女の聲がして彼を呼び止めた。

それはシナカルサキナとゾボワアとであつた、二人は路の傍の腰掛に坐つてゐた。帽子を冠らず、小脇に本を挟んでゐる二人の姿が暗いかけの中にあつたと見えた。

ユリイは喜んで二人の方へ歩いて行つた。

「何處に行つたんですか」と彼は尋ねた。

「圖書館にゐましたの」とカルサキナが答へた。

ユリイはカルサキナの隣に坐りたかつたが、その時ゾボワアが、一寸身を退いたので此の不器量の女教師の傍へ腰を下した。

「貴方大分不機嫌さうな顔をしてゐらつしやるんですね」とゾボワアは別の癖で、その狭い唇を

不愉快さうに引き結んだ。

「さう見えますか、僕は十分愉快なつもりですがね。まあ多少退屈ではありますけど」

「貴方は退屈してゐらつしやるんですか」

「ズボワアの間に軽蔑の響が籠つてゐた。」

「では何か此地でする事があるとしても貴女は仰言るのですか」

「少くとも泣いたり笑つたりする時間は私にはありませんよ」

「そりや、僕だつてさうですよ」

「それでゐて、貴方は泣言を仰言るのですね？」

「ズボワアは擲擲つた。」

「それは僕の生活ですよ。笑ふと云ふ事は、餘り僕には心得がないのです」

彼の聲には何となく苦々しい調子があつたので二人の女は黙つて了つた。

ユリイも黙つたが、又微笑んだ。

「僕の友達の一人はかう云ひますよ。僕は奇怪な生活をしてゐるつて」

「どんな意味で？」

「僕は人の生活されない様な生活をしてゐるんですよ」と答へた。この様な事はまだ誰にも聞か

された事はない、面白い言廻しだと自分で思つた。彼は自分の全生涯は誤られたもので、自分は非常な不幸の中に生きてゐると思つた。此の思は彼に悲哀の満足を與へた。

かうした事を人に訴へる事は彼を娛しました。しかし男に對つては本能的にかうした話はしなかつた。けれど女に、殊に美しい若い娘達にはかうした自分の事を長く物語る事を望んだ。彼は美貌で、その話は美しかつた。だから女達は慕はしさを交ぜた同情を彼に寄せるのが常であつた。

此夜も初めは冗談の様に云つてゐたけれど直ぐにいつもの感傷的な調子に移つて行つて、長たらしく自分の事を話し出した。

それは彩に富んで生々してゐるので、二人に強い印象を與へた。女等は彼を信じた、そして同情を寄せた。彼の話を聞くと彼は異常な才能を有つた天才であつたが、彼の環境が彼を破綻させた事や黨派に加入してゐた時も、誰も、彼を理解しなかつたといふ事を信じさせられた。

彼が國民の指導者となるかはりに一個の追放者となつてゐる事は、彼自身の罪ではなく、偶然の運命と人類の愚昧が責を負はねばならないやうであつた。彼は話してゐる中、先づ自ら悲しい氣持になつた。

音楽は矢張り以前の様に悲しげに奏でられてゐた。

夜は暗く物思はしけな姿であつた。三人は入れ亂れた夢見心地になつた。

「ユリイニコライエキツチさん、で貴方はまだ一度も自殺といふ事をお考へになつた事はありませんか」

「貴女はどうして僕にそんな事を聞くのですか」
「いゝえ たゞ……………」

彼女は黙つて了つた。その間はユリイにするといふよりも、戀もなく幸福もなくその退屈な單純な生活が、直ぐにも老境に及ばねばならないといふ自分の考へに答へてゐたのである。

「では貴方はあの黨派の幹事會にゐらしたんですか」

このカルサキナの問はユリイを愉快にした。

此の美しい娘の前で、その娘たちが一種尊敬を有つてゐる此の會にゐたと云ふ事はきつと娘達の氣に入るだらうと、彼は確信した。

「さうです」と簡單に答へた。

この簡單な答へが大きな効果を齎らす事を意識しながら——彼は限りない満足のうちに、深々と呼吸を吸つた。

二人の娘達は彼の答を聞くと直ぐに黙つて了ひ時々尊敬に充ちた眼を、ユリイに投じた。

終ひにカルサキナは立上つて、喜びに輝やく眼でユリイとゾボワアを見合つた。あり／＼と彼

女の興奮は他の者にも讀まれた。

「行きませう。もう晚いんですよ、ユリイニコライエキツチさん今度は貴方の故ですよ」と嬉しさうに笑つた。そして傍に來たユリイと笑ひ合つてゾボワアを待つた。ゾボワアは幾分立遊つた様に本をきちんと小脇にとゞのへてから歩き出した。

三人は盛んに話し、盛んに笑つた、悲哀は何處かに消え去つた。

ユリイは二人をその家に送り届けた。

ユリイが行つて了つてからカルサキナは云つた。

「何て可愛いお方でせうね」

「そら、そら、戀しちやいけませんよ」とゾボワアはその頬を指でついた。

「貴女は直ぐそんな事を考へるのね」

カルサキナは自分の心を突かれた様な愕を感じて叫んだ。

ユリイは氣も軽くはづんで嬉しさうに興奮して家に歸つて來た。

描きかけた繪を一寸見たが別に變つた感じも起らず、直ぐ床に入つた。その夜、彼は、華やかな夢を見た。若い美しい女達の夢を見た。

彼は翌日、終日その日の早く暮れるのを待つた。

そして夜になると直ぐに昨夜カルサキナに逢つた場所へ行つて見た。彼女等と過した昨夜の思出は、彼にも一度さうした幸福にひたりたい慾望を起さした。

今夜は澄み切つた、暖かい静かな夜であつた。

彼は誰にも逢はなかつた。忌々しい氣がして頭を不愉快に打ち振りながら歩いてゐた彼は不圖自分の方に寄つて来るシャヴロフを見付けた。彼は遠くから丁寧に聲をかけてゐた。

「何をふらくやつてゐるんですか？」シャヴロフは親しげに尋ねた。

「退屈ですよ。そして君は？」とユリイは詰らなさうに尋ねた。

「僕等は今夜は通俗講演をやるのです」

「何處で？」

「市立小學校でやるのです」

ユリイはこの學校はカルサキナとツボワアが出勤してゐる事を知つてゐた。そしてリヤリヤが此の講演の話をしてゐた事も、今思ひ出した。

「僕も来ていゝんですか」

「どうぞ、ね……」とシャヴロフは嬉しさうに好意を現はした。彼はユリイを主義の爲に眞に一心に戦つて呉れる勇者だと思ひ、彼の黨派運動の役目をもよほど買被つて、彼に對しては殆ん

ど信仰に似た尊敬を持つてゐた。

ユリイはいつも嘗ては同じ幹事會の一員であつたけれど、此のシャヴロフに對しては、まだ幼稚な一學生と見くびつてゐた。

「僕はそんな事には少なからず興味を有つてゐますよ」

その癖心では行く行けば、カルサキナに逢へるかも知れぬといふ願を抱いてゐたのである。「どうぞ、ね」と又シャヴロフは繰り返して云つた。

彼等は急いで二階作りの學校の建物に近づいて行つた。もう大分聴衆が集まりかけてゐた。會場にはツボワアとリヤリヤとが窓際の處に立つてゐたがユリイの這入つて来るのを見て、親しさうに挨拶した。

「よく来たわね、貴方が来たから大變よかつたわ」とリヤリヤは云つた。

ユリイは薄暗い部屋を見廻したけれど、カルサキナの姿は見えなかつた。彼は何となく裏切られた様に感じた。

「シナイダバウロキナさんは加入らないのですか」

けれど此の時演壇の下に燭火を點さうとしてゐる彼女を認めた。

「私が加入らないですつて？」

彼女は透きとほつた聲で叫んで、やはりと演壇から跳び下りて、彼に身をよせかけた。處女の生々とした健やかな匂が、彼の鼻を衝いた。

シャヴロフは忙しさうに彼方此方に奔走してゐた。會が始まらうとすると外にゐる者は皆雪崩れ込んで、各自席に着いた。

主義宣傳者にのみ涌く興味が、ユリイを捕へた。彼は好奇の眼をみはつた。聴衆には老人もゐた。青年も小兒も混つてゐた。二三の貴婦人や此の學校の校長や豫備高等學校の男女教師等がゐた。短い上衣を着た者、胴衣を着けた人、兵士、百姓、さては上衣代用の肌衣を着けた澤山の小兒等で一杯になつた。

彼はカルサキナの傍に席を占めて、シャヴロフの落着いた、それでゐて拙い普通選舉論の講演を注意して聞いた。

シャヴロフの無味な統計表をでも読み上ぐる様な印象を與へた講演をも聴衆は俯聴した。

しかし第一列にゐた例の貴婦人達や豫備高等學校の教師やらの、インテリゲンチアの代表者達は直ぐ何か囁き始め、動き出した。

ユリイはそれが忌々しく癪に障つた。

シャヴロフの拙さが氣の毒に思へた。そして彼が疲れたのを見付けてカルサキナに囁いた。

「終つてから僕も一つやりませうか？」

カルサキナは優しい賛意を現して慫慂した。そして一寸の暇を窺つて、其事をシャヴロフに告げた。彼は自分の拙さに氣がついてゐたので、早速悦んで演壇を下りた。

ユリイは演説が好きであり心得もあつた。

彼は真直に演壇に上つて活潑にやり出した。

そしてその最中にも度々カルサキナを見やつて、彼女の視線とぶつつかつた。さうすると一時狼狽て、書類の方を見ては又一層適切に辯じ立てた。彼は彼女の爲にばかり喋つてゐる様であつた。しかし彼が終へた時には、皆拍手した。第一列の方からも喝采が起つた。

それで、その講演會は了つた。

ユリイは二三の人に紹介された。皆彼の演説の巧いのを褒めた。シャヴロフは心から喜んで、彼の手を握つて、

「眞個に有難うございました。僕等もあれほどやれるといふんですが……」と深い感謝から恭しくお禮を云つた。

外には星が輝いてゐた。

「貴方は何處に行きますか」とゾボワは彼に尋ねてから「私はシャヴロフさんとラトオワさん

の所へ行きますが……」とつゞけた。

「貴方はシナさんを送つて下さる？」

「喜んで送りませう」とユリイは素直に答へた。

カルサキナはゾボワアと協同して一軒の家を借りて住んでゐた。ユリイとカルサキナとは其の路々、演説の聴衆に與へた印象について語り合つた。

「私共の處へいらつしやいな」と入口の所に立つてカルサキナはさう云つてから戸を開けた。

「貴方庭の方へいらつしやいな。私の室にお伴れし度いんですけれど、取り散らかつてゐるかも知れませんの」

彼女は笑ひながら一人家の中に這入つて行つた。

ユリイは何となく快よい好奇心を燃やして庭の方へ出たけれど、さう遠くへは行かなかつた。暫らくしてカルサキナが闇の中を階段の上に出て來たのを見つけて狼狽へた。

「此處にゐますよ」と云つた彼女の微笑にも狼狽へた調子が讀まれた。

二人は接骨木の叢と芝草の間を向ふに歩いた。若々しい葉を着けた櫻の強烈な香氣が鼻を衝いて來た。

彼等は破れかゝつた籬に凭れて空を眺めた。

接骨木の枝から雫が落ちて來た。

「私、何か歌ひませうか、貴方はお好き？」

「えゝ、どうぞ。」

美しき 美しき 戀の星よ——

彼女は歌ひ出した。彼女の聲は軽く澄み渡つた。彼女は彼の凝視を焼きつくやうに身體に感じて聲は感情に慄へた。

萬物は呼吸を殺して聞き入るかのやうであつた。

彼女が高い白銀の様な音調で歌ひ終ると、四圍はより一層靜寂を増して行つた。

ユリイはちつとカルサキナを傍目も振らず見つめてゐた。兩人は何となく一種夢見心地の惱ましさの中に身を任した。何となく恐ろしい様な嬉しい様な氣がした。

「じめ／＼して來ますわ、もう行きませう」

二人は内心を残しつゝ狭い道に戻つて來た。いろんな神祕な、又美しい空想がユリイの頭に浮んで來た。二人は民間の黨派運動等について語り合つた。しかしそれは今の二人には不用の事の様、ともすればその會話は杜絶え勝になつた。

そんな風で戸口の所まで來た時に室内では寢音や、戸棚を開ける音がして來た。

「おや、オラさんが歸つてゐるわ」とカルサキナは叫んだ。

すると室内からゾボワアは出て來た。

彼女の顔は蒼ざめて取亂してゐた。二人は何かあつたのだなあと思つて直ぐ氣づいた。

「シナさん、随分探したのよ。貴女何處にゐたの？ セミオノフさんがもう死ぬるんですわ」

「何ですつて？」

「セミオノフさんがもう死ぬるんですよ、血を啜いてね。アナトウルパウロウツチさんはもう駄目だと仰言るんですよ。私共が病院へお連れしたんですけれど、まあ何といふ急な變り方でせう、みんなだね、ラトウワで茶を飲んでゐましたの、あの方も大そう陽氣にね。ノキコフさんと話していらつしやるうち、俄に咳が出てね、蹠蹠となさつたかと思つたら咳と血を、ね啜と——卓の上に、お皿の上に——眞黒な、濃い——」

「何ですと、あの人が、そしてあの人の身知つてゐるんですか——」とユリイは氣がかりな好奇心に燃えた。そしてあの月の夜、とほくと歩いた悲しげな姿や聲が直ぐ浮んだ。

「——貴方がたはまだ生きて行かれるでせう、僕の墓前を通られる事もありませう、そして僕はと云ふと——」と

「知つていらつしやるやうですわ、私共を見てね、何うしたのだつてお尋ねなさるんですわ。そ

して、身體が慄へてね、もうお了ひですかつて——あゝ何て恐ろしい氣味の悪い事でせう」

「恐ろしい事實だ。死は」ユリイの顔は蒼ざめた。ゾボワアは溜息を吐いた。カルサキナの顎は震へた。しかし彼女はさうした重苦しい灰色の氣持になる事は出来なかつた。彼女は今若さで充ち満ち、彼女の本質は生で満たされてゐたのである。それにこんな美しい夏の夕のすべては、彼女に取つて幸福と愉悅に輝いてゐる時、どうして苦しみや、悲しみを想像する事が出来よう。彼女がかう思ふのは普通の事であつた。けれども彼女はそれを悪い事でもあり恥づべき事でもあると思つた。

それで自分の心に悲しい同情と愕きを起させようとして尋ねた。

「可哀想な方ね、ほんとにいけないでせうか？」

「アナトオル、パウロキツチさんは今夜か明朝早くには、もう萬事駄目だと仰言つてゐます」それを聞いてカルサキナはおづく、

「で私共は行つた方がいゝでせうか、それとも行かないがいゝんでせうか、私ちつとも存じませんのので……」

三人共實は同様の疑問に迷つてゐた。果してどちらがいゝかと。それでも暫らくしてユリイは

「行きませう。多分面會は謝絶でせうけれど」
 「さうですね。それに入を見たがつていらつしやるかも分りませんわね」とゾボワアは、ほつとして答へた。

「シャヴロフさんとノキコフさんも、行つてゐますよ」

三人は陰氣に黙つてセミオノフが今死にかゝつてゐる病院を訪ねて行つた。

そこは薄暗く陰氣な廊下があつて、カルボオルとヨオドフォルムの匂が強く漂つてゐた。

三人は教へられて階上の方へ進むと、此處は階下よりも幾分明るくもあり清潔でもあつた。

ユリイは勤番醫室と標札のかゝつてゐる室の戸口から内部をのぞきこんで何とか云つた。

すると部屋の中から出て來たのはレザレケエフであつた。彼は平常と少しも變らず快調で愉快さうであつた。

「やあ、今日は私が勤番ですよ」と云つてから彼は急にまるで變つた表情に落ちて行つて悲しさに又重大事さうに聲を落した。

「もう意識もないでせう。がまあ行つて見ませう……」

「もう牧師は迎ひにやつてゐますよ。何分此んなに急に來るなんて全く特別ですよ……此の部屋です」

レザレケエフは靜に戸を開けて這入つて行つた。他の者も後からつゞいて行つた。

セミオノフの枕許にはノキコフやイワノフやシャヴロフがゐた。皆セミオノフの瀕死の前でお互が挨拶していかと當惑した。そしてしたものもあればしないものもあつた。

セミオノフは普段とは全く變つてゐた。殆んど生命あるものとは思へず、何か避くる事の出來ない大きな勞作の方へ手探りをしてゐるやうな恐怖を皆の心に喚び起す出來事が、めまぐるしく彼を襲つて來た。

釣ランプに照し出された彼の顔には、陰影がはつきりと劃かれて、彼の呼吸は疲れ切つてゐながら息を殺した此の部屋の静けさの中に滅入る様に聞えた。

一同が側目も振らず、彼の容子に眼を注いでゐると、ふと戸が開いて老人の太つた牧師と瘦せぎすな役僧とが這入つて來た。その後からゆつたりと靜かにサアニンが隨いて這入つた。

牧師は丁寧な挨拶をし、他の一同にも一寸人懐つこく身をかゞめた。一同も同時に急いで過度に丁寧な答禮をした。

サアニンは黙つて窓際に凭つてセミオノフと餘の人々に、探るやうな眼付を投げた。彼は明かに彼自身並に人々々が今どんな考へを持つてゐるかを明細に觀察してゐた。

「もう少しも意識はないのですか」と牧師は物柔らかに問うた。

「さうです」と答へたのはノキコフであつた。
 牧師は十字架を立て、長い法衣をかけ、感情的な潤れた高音で、沈痛な印象を與へると云つた調子に祈禱を始めた。

役僧は不愉快な嗚れ聲の低音でやり出した。

此の二人の不調和音が、變挺子に悲しさうに鋭く訴へる様に響くと皆セミオノフを見やつた。セミオノフは一寸臉を震はして聲のする方へ眼を動かした。

しかしそれは誰にも分らなかつた。

一同は涙の出やうとするのを強ひて堪へた。

がカルサキナとゾボワアとは聲高に益々強く泣き出した。

サアニンは不愉快さうに額に皺をよせて、かうした歌が死とは非常に懸け離れた健康な者迄を陰氣になす事は堪らないと思つた。

「どうぞ低くやつて下さい」忌々しさうに彼は牧師に云つた。彼には只セミオノフに聞えさへすればいゝ筈だと思つた。師はサアニンの語を解するや尙一層高く歌つた。

一同の眼は吐責する様にサアニンを見た。

儀式が終ると尙一層、減入る様な氣持になつた。皆の心には恐ろしい感情、此の事が早く結末

を告ぐればいゝと云ふ、言葉を代ふれば、セミオノフが早く死ぬればいゝと云ふ感情が、それを抑壓しようと骨折つても、彼等の心に益々強くなつて行くのを、どうする事も出来なかつた。

「早く濟めばいゝに、何といふ陰氣さだ」と低聲でサアニンが呟くと「さうとも」とイワノフが應じた。

一同は二人を制裁する様に見やつた。殊にシャヴロフは何か注意しようと用意した。けれども此の時セミオノフの口から、重苦しさうな喘ぎが聞え出したので、皆の眼は一齊に痙攣つた様なおびえに慄へながらセミオノフの方へ注がれた。

牧師はやがて嚴かに赦されの歌を誦し始めた。二三分するとセミオノフは静まつた。

「もう終焉です」と牧師は呟いた。

しかしその粘りついた唇が、徐ろに動いて低い聲がかすかに響いて來た。

と突然「老耄の吝嗇坊」と云つて狂ほしく驚きと怖れに痙攣つた様に兩眼を開けて牧師を睨みつけた。

それまでその丸く肥えた、柔和な情深さうな顔に現はしてゐた感傷的な同情と悲しみを消して牧師が眞赤になつて汗を出してゐるのをサアニンだけは面白がつて微笑んだ。

それはしかし誰にも分らない事であつた。

セミオノフはそれから一つ長い呼吸を吸ひ込むと、もうそれ切り、何の音も動きも起らなかつた。

此の眞面目な嚴肅な事實はかうも簡單なものかと、皆は寢臺の圍りに集つて來た。

ノキコフは死人の眼を閉ぢて、その両手を胸の上に組み合してやつた。

そして彼等は此の部屋を靜かに寢音を殺して出て行つた。

廊下のランプは平生と變らず、明るく點いてゐた。それを見ると、一同は身が軽くなつた様に身體を伸ばした。

牧師は一番前に歩いてゐた。彼は皆に善い印象を與へるやうな事を云ひ度かつた。そして溜息をついて

「まだ若い人を、あつたら惜い事をしましたね。それに一層残念な事は改悔の容子の見えない事でした。しかし天帝の慈愛はね——さうでせう」

「さうですとも」シャヴロフは丁寧にかう答へた。

「あの人は御家族は？」

「さあ、私は知りません」

一同は彼の家族も親戚も知らない事が、恥づかしい様な氣がして互に見合つた。

「確かあの方のお姉様か妹様かゞ一人何處かの高等學校に這入つてゐられましたわ」とカルサヴナが言葉を入れた。

「さう。では私はこれで」牧師は帽子をあけて一同に別れた。

一同は往來へ出て、ほつとした。そして各自勝手の方へ歸つて行つた。

これで誰の胸からもセミオノフはも早や、此の世の交渉を絶つて了つた。けれどこの死をもつとセミオノフ自身について見て見よう。

セミオノフは血を見た時、そして人々が彼を運んで呉れた時、もう死ぬんだなあと自覺して、その死に對して平氣でゐられる自分を怪しんだ位であつた。

平生、彼は死を怖れてゐた。それが自分の肺病を知つてからは、特に彼の様子はいつも非常に苦しさうに見えた。

その時以來、彼にはも早や此の世界の存在はないものであつた。彼はいつも斷末魔の苦しみに落ちてゐた。セミオノフの前には、いつも黒い口をあけた空虚な深淵が、彼が生きてゐる此の世の美や、愉快や、音色や、感情をいつでも飲み込まうと用意してゐた。それは彼にとつては怖ろしい事あつた。堪へ難い事であつた。けれども、それは時が経つて彼が死に近づけば近づく程、その深淵も少しづつ彼から遠ざかつて行く様であつた。

そして再び彼の周囲は以前の様になつて行つた。

しかし太陽は今も以前の様である様に、彼自身の事迄が以前の様である事は、彼には非常に不愉快な事であつた。苦しい事であつた。

それで彼は態々あらゆる人に彼の死について興がらせようと強ひた。彼の怖しい立場を肯かせようと思つた。

それから彼は、又死の恐怖のどうする事も出来ない意識を存分に苦しみ悩まうと努力した。けれども、彼の周囲はいつまでも同じであるのに、それに彼自身の生命さへも以前の通りであるのに、いつかはそれが變つて了ふと云ふ事は、又實に堪へ難くも厭な思ひであつた。

そして彼の考へは二様にも三様にも變つて行つた。最初彼の心を鋭く刺してゐた死も次第に鈍くなつた。そして心は暢然となつて、全く忘れてゐる様な時が益々多くなつて來た。が彼が夜暗

闇の中で獨りゐる時は、近づいて來る例の深淵の意識が深く頭を擡けて來た。それで彼はいつもランプの光の下で寝る事にした。その光は闇の中のあらゆる恐ろしい囁きも彼が飲み込まうとする空虚な感じをも消して了つた。

それからランプの光の届かない限々からは矢張りいろ／＼な囁きや、恐ろしい思ひが涌いて來て彼を悩まさすには置かなかつた。

此の暗い闇は、やがてランプを消し、彼の周囲の凡てと共に、彼自身の日常をも消し、その闇を持つて全世界を掩ひ被せるであらうと云ふ事を考へる時堪へられない苦しい恐ろしい思ひに、彼は只管子供の様に泣く事だけがせめてもの慰さめであつた。

そして彼は、彼に死を思ひ起さず様な場合を努めて避けた。寺院へ通ずる道路をも、その爲、歩るかなかつた。又仰向になつて兩手を胸の上に組んで眠る事を決してしなかつた。

彼の心にも身體にも、二様の生活が出來上つた。一つはずつと以前からの死から離れた永久に生き度いと願ふ所のものであり、今一つは次第に自分の生命を浸蝕されて行く様な苦惱に充ちた生活であつた。

かうした二重の生活は、内部に或不可能のものがあつて、死が眼前に逼つた時にも、もはや格別、彼をして驚き怖れしめなかつた。

ゾボワが彼の恐怖を語つたのは、彼女自身の恐怖が死の當事者よりも大きい筈はないと思つたからなので、彼の蒼ざめた顔と、落着かない眼差とは、單に咯血の爲に生じた貧血の當然の結果であつたのである。

「もう終焉ですか」

彼は全然怖れからではなく、只一層その事實を確かめる爲にかう尋ねた。

その答を彼は周囲の人々の顔色から読み取つた時、かうも死とは簡單なものかと、自分自身に怪しんだ。

彼は病院へ送られる辻馬車の中で、も、病院でも、忙しく物珍らしく四圍を見廻した。そして彼は今迄、価値のないものだとか、些末な事柄とか、厭ふものとか思つてゐたものが實は彼に取つて非常に貴いものであり、可愛いものである事に気がついた、そして彼は、今迄経験した凡てのものは皆なつかしいものであつた。

その中彼の感じは、何處か深い所に沈んで行く様であつた。除ろに彼は生命を離れて何處かに行き始めた、もはや目に見える事も、耳に聞える事も、何の役にも立たない事であつた。生と死の最後の戦が始まつた。それは本當に彼自身だけの世界であつた。

其の間に一寸幾分、明瞭な瞬間が來た。苦痛も退き、呼吸も幾らか平靜に、物音や物の影等が極く遠い所からではあるが、ほんやりと現はれて來た。

隣の寢臺に何か讀んでゐる男、天井の吊ランプ、その周りを飛び廻つてゐる蠅の群、それ等皆他事の様彼の眼に這入つて來た。

しかしそれは又泡の様に跡方もなく消えて了つた。その中彼の腦は、微かに煌やき出した。明るい意識が不意に彼を呼び覺した。

しかし彼の意識した一切のものは、彼の死には少しの力もない無駄なものばかりであつた。

又もや彼は黒い霧の混沌界へ沈み込んでしまつた。彼の内部に捲き起つてゐる事には、何の關係もない冗漫な、泣聲と歌聲が始まつた時、彼は又生命を取り返して來た。しかしそれも一瞬間の事であつた。

一人の男が勿體振つた悲哀の表情で、枕許にゐるのをセミオノフは深く見究めた。その男はセミオノフに用があるでもなく、セミオノフも彼に何の用もないのである。

かうしてセミオノフは、生きてゐるものには全く不可解なその本人のみの世界の出來事を伴つた生命の終末に達したのであつた。

.....

さて病院を出たイワノフはサニンと連れ立つてゐた。

「僕の家に来たまへ、神に召された忠實な下僕の爲に祀りをしよう」とイワノフは勿體振つて云つた。

二人は途中でチツカと少量の食物を買つてユリイを誘つた。

ユリイは彼等の前に頭を垂れて、黙り込んで、散歩路をゆるく歩いてゐた。

「今さき、神の許へ召された下僕の死を弔ふと思ふんですがね」とイワノフは愉快さうに云つた。

「結構です。行きませう」とユリイは賛成した。彼には平生此の二人は苦々しく、そして忌はしく思はれてゐた、が今はセミオノフの死の事が彼を苦しめ悩ましてゐたからであらうか、彼は直ぐ賛成して了つたのである。

ユリイは彼の死で、重苦しい印象を與へられた。

そして、それに對する正しい理解によつて彼自身の心を休めようとしたが、それは不可能の事であつた。

此の充溢した生氣の、無限に微妙な組織からなつてゐる世界が、一瞬間に無になつて了ひ、木の切株見たいに變つて了ふといふ事は堪らなく氣味悪い事であり、同時に又不可解な事であつた。彼は、二度と經驗する事の出来ない此の經驗を一度は自分も嘗めねばならぬと思ふと、身體中に冷たい汗がべつとりと出て來た。

しかしユリイは、彼の時セミオノフが牧師を冷嘲してゐた事によつて、セミオノフは死の不安を痛感して死んだのではないと云ふ風に解釋した。

何か茲には重大な一點が残されてゐて、その一點さへ理解出來れば、他の一切の事は、獨りに分る様に思はれた。しかし此の一點と彼の心との間には到底達する事の出來ぬものがあつた。そして幾分、分りかゝつたかと思ふと、又不可解の膜は彼の考へを昏まして了ふのであつた。

此の努力は、彼にとつて苦しみであり、疲れであつた。そしてあの一二分後には、死が來ようと云ふ瞬間にセミオノフはどうして笑ふ事が出來たか？彼は勇者だらうか？又は自分の考へてゐる程死は怖ろしいものでないのか知ら？と考へながら、歩いてゐる時イワノフに呼びかけられたのである。

三人は黙つてイワノフの家に行つた。その暗い入口の傍の腰掛に太いステツキを持つた一人の男がかけてゐるのが見えた。

「おや叔父さんですか、ピョウトルイリイチさんか？」とイワノフは聲高く呼んだ。

「然うだよ」其の聲は凄い様に男らしく空中に響いた。

四人はイワノフの部屋に這入つて行つた。そこにはまるで物置のやうに、いろんなものが取り亂れて居た。そして主人がランプを點すと、そのいろんなが、くたくたに見えた物は積み重ねられた書籍であつた。その壁のどれにもワスニツワオフの銅版彫刻がかけてあつた。

サアニンはピョウトルイリイチにセミオノフの死んだ事を話した。

「どうぞ天國に往生するやうに」とイリイチは又その聲を響かした。彼は寺院の樂人の一人で、ニコライ一世陛下の兵士の様に灰色の鬚を生やしてをり、その古い上衣は異様な臭を發してゐた。

彼はイワノフが瓶の底を手の平で軽くほんど打つて、巧く栓を抜いたのを見て、
「巧いもんだなあ」と褒めた。

彼は非常な呑助であつた。

「さうだ、自分の技に覚えがあれば、人は直に認めて呉れるものだなあ」とイワノフは冗談を云つて緑色がよつた白色の液體を杯についだ。

「さあ諸君、彼の靈魂の安息の爲に——」

一同は杯を手に取つた。

やがてその小さい部屋は熱苦しくなつた。

ピョウトルイリイツチの吸ふ安煙草の匂が部屋一杯に漂うた。

ユリイはツツカと煙草と暑苦しさを爲に暈を覺えて來た。そして彼は又セミオノフの事を思ひ出した。彼はツツカの酔で、その周囲が廻つてゐる様に思つた。そして思はずかう呟いた。

「死は怖いものだ」

「貴方は神経過敏ですね」とイワノフは、ユリイが幾度も同じ事を繰り返すので見下ける様に云つた。

「では貴方は此事を感じる事が出来ないのですか」

「僕ですか——僕は死ぬのを望んでゐるませんよ。死ぬのは詰らない事ですもの……」

「だけど死ぬ時が來たら仕方がないでせう、僕は面倒な儀式などぬきにして死にますよ」

「だけど、君、君はまだ死んだ事がないぢやないか、だから何にも知るもんか」とサアニンは微笑して口を挟んだ。

「それもさうだなあ」とイワノフも笑つた。

急にユリイは誰にもなく妙に心が苛立つて來た。

「そんな様な事はもうとうに知つてゐますよ、議論は何とでも出來ますが死は何といつても死ですからね。死はそれ自身怖いことなんです。例へば——自分の生活を何と辯解してゐる人でも、此の怖ろしい力の前には、その一切の生の愉快を投げ出さねばならないんですからね——此の事はどんな意味を持つてゐるんでせう」

「その事だつて我々はもう疾くに聞いてゐますよ」とイワノフは侮つて遮つた。その様子には同様に忌々しげな風があつた。そして彼はつゞけて叫んだ。

「そんな事に何の意味があらう」

「否、それは不可能です我々の周囲は餘り伶俐過ぎる」

「僕の考へではよいといふ事は、何にもありませんね……」とサアニンが横から口を出した。
 「何を貴方は云ふんです。では自然もですか」
 「それはね。自然は完全なものと云ひ來つてゐますがね。實は人生と同様につまらないものですよ。僕等は今よりも百倍の優れた世界を想像する事が出來ませう。どうして永久の樂園がない事がありませう。而して意味ですと？ 勿論意味はありますとも、目的が事物の推移を決めてゐるといふ事が既に、意味のある原因です。そして此の目的は我々の實在以外に此の世界の根本に存してゐる事は云ふ迄もない事でせう。だから吾々はその最初でも最後でもなく補助役をつとめてゐるのです。吾々は生存してゐるといふ事實だけで、吾々の目的を遂げてゐるのです。だから吾々の生存は必要です、それと共に又死も必要なんです」

「誰の爲に」

「そんな事、僕がどうして知つてゐませう、土臺そんな事は僕に何の関係もないからね、僕の生命は愉快とか不愉快とかの僕の感情で、それ以外の物が何でせう。そりやどんな臆説も云ふ事は出來ようが要するに、それは臆説ですからね、それにその上に生活を築かうなんて、全く馬鹿ですよ。しかし、し度い人はするがいですがね。たゞ僕は生きて行くんです」

「そして貴方は神を信じますか。今時は誰もそれを信すべき事だと云ふ事をさへ信じないんです」

「からね」とビョウトル、イリイイチは曇つた眼をサアニンに向けて尋ねた。

「神ですか、信じますとも」とサアニンは笑つて「幼い時からね。それはそのまゝで、打壊す必要もなければ、強める必要もないんです。神が居れば正しい信仰を捧げようし、居なければ、僕にはもつと好都合ですけれど」

「しかし信仰、不信仰の上に全生活は築かれるものではありませんか」とユリイは口を入れた。

「なあに」とサアニンは面白さうに、事もなげに微笑んで「僕はそんな根柢は必要はありません」と云つた。

「僕は神は在ると信する、併しそれが存在してゐようがるまいが神は神で決して人間ぢやない。善も悪も生も死も、美も醜も、皆神の創造のものです。そしてその目的の意義は畢竟人間の目的意義ではない。其の善悪は決して人間の善悪ぢやない。吾々の神の定義は何時でも一種の偶像崇拜です」

「では一體、何の爲に人は生きてゐるのです」とユリイは忌々しさうに尋ねた。

「では何の爲に死ぬるんです。僕は只一事を知つてゐますがね、生命が僕に取つて不快でない事です、だから人間は第一に自然の慾望を充し得なくちやならない。これだけです。人にこの希望がなくなつたらその生命は死んだのです」

「だがその希望には悪い事もありはしないでせうか」
 「そりやありませう」

「では、どうです？」

「同じ事です」とサアニンは親しげにしかし明瞭にかう云ひ切つて、瞬きもせずユリイを見つめた。

ユリイはこのサアニンの視線を感じる事が苦しかつた。しかし自分も負けまいと思つて彼を見返した。

しばらくしてユリイは踉蹌として立上つた。

そして戸口を閉める時、イリイイチチに答へてゐるサアニンの聲が聞えて来た。

「貴方は子供みたいでないと可いんだけど……。しかし子供だつて善悪は辨へてゐませんよ、彼等は只正しいだけです。これを貴方がたはうまく欺いて……」

ユリイは外へ出た。

月は大空に高く懸つてゐた。物々は月の光を浴びて美しく見えた。

彼はサアニンの事を思ひ出した。しかし直ぐには彼を理解出来なかつた。かうした種類の人間が現はれる事はユリイには不愉快な事であつた。それで彼はサアニンをつまらない男だと決めて

了ふ事に、非常に氣味のいゝ物を感じた。

弄舌家だ、嘗ては人生を嘲笑つて得意になつた者もゐた。今では動物性に媚びる事を勿體ぶる種にしてゐるのだ。とかう思つた。此の考へは至極くユリイを満足させた。

それからユリイは、自分はまだ勿體ぶつた事はないと思つた。そして思想も、苦惱も、皆自家創造にかゝるものと断定した。

彼はそれから、又セミオノフの事を思つて見た。

……僕は死ぬるんです。而して貴方がたは、僕の墓の前を通られる事もありませう……」と云つたあの言葉が又も思ひ出された。そしてその病學生の腦の上を、胸を、腹を踏んでゐる様に思つて急に膝がしびれる様に感じた。

そしてそれと同じく自分が死んだ上を、矢張り人が歩くであらう……あゝ生きねばならぬ、一瞬も無駄には過せない。

「まだるつこいな、あゝ辛い、怖ろしい」

と彼は誰にか訴へる様に高く叫んだ。

しかし直ぐ自分の聲に驚いて四圍を見廻はした。

「僕は酔つてるんだなあ」と思ひながら、彼は明るい夜を歩いた。

静かな寂しい。明るい謎のやうな月の光が全市街を掩うてゐた。彼は低聲に歌を口ずさんで見たがどうしてもその死の觀念から逃れる事は出来なかつた。——酒で頭が少し亂れてゐるのだなあ」と思つた。此の静かな町の夜は照りかゞやく月と共に、穏やかに更けて行つた。

四

ユリイの生活はカルサキナとツボワアが、何處かに訪問の爲め旅行してからといふものは、全く單調で毎日々々退屈の日ばかり續いた。

彼の父は家の仕事と倶楽部の爲めに餘暇はないし、妹はレザンチェフの他の者は、もう全く不必要で餘計者として避けるので、ユリイは結局いつも一人ばかりで、無聊に苦しんでゐた。

一二度ノキコフとシャヴロフが彼を訪ね、彼も亦、講演會に出たり、人を訪問したりしたけれど、それは彼の心に何の悦びをも與へて呉れなかつた。

或日ユリイはレザンチェフの家を、ついでに訪ねた。

レザンチェフは立派な住居を持つて、部屋にはいろんな娯樂用の道具があり、啞鈴や、棍棒や、釣道具や、鵜網やがあつた。

彼はサアニンを自分の許嫁の兄として愛嬌よく迎へた。

そして明日獵に行かうといつてユリイを誘つた。ユリイが銃のない事を話すと彼は八本の銃を持出して、何れでもいゝのを撰べといひながら、一々その銃の種類別けをし、その構造や特徴を語つて聞かしたりして、終には的を設けて射つたりして見せた。

ユリイはその射的に非常に乘氣になつて、自分でも亦射つて見た。そして明日は是非鴨打ちに同道する事を約束して歸つた。

家に歸つてからも、銃を弄つたり、古い獵靴を出して油を塗つたりした。

そして翌日夕方、レザンチェフが約束通り獵用馬車に乗つて誘ひに来て呉れた時には、彼は、もうきちんと獵袋や、彈藥入を身につけて待ちかまへてゐた。

レザンチェフは彼のその仰々しい有様を見て幾分愕いて、彼に獵具を脱がせた。そしてそれを車の下の箱の中に入れて直に馬車を走らせた。

日はもう西に傾きかけてゐた。

やがて馬車が涯なく續いた西瓜畑に來た時レザンチェフは兩手を口に當て

「クスマーア クスマーア」と馴れた調子で叫んだ。

ユリイは凡て物珍らしいこの企てに、少なからずその好奇心を燃やしてゐた。

やがて、西瓜畑の遠い端の方から、幾人かの群を離れて一人こちらに畦道を歩いて來るのが見えた。

近づくに従つて、それは大きな百姓で、髯を一ばい生やし、兩腕は頑丈に節立つてゐた。

彼は二人の傍近く來ると、靜かに微笑みながら挨拶した。

「今日は、アナトウルパウロキツチさん」

「今日は、クスマ 近頃はどうかい。馬を預かつといて呉れないか」

「預かつときませう。狩りですかい、此方は誰方ですかね」

「ニコライ、エゴロキツチさんの御子息だよ」

「然うですかい……どうしても直ぐ分りませぬ、どうもルドミラニコライエヴナさんによく似ておいでると思つてゐましたよ」

ユリイは此の深切さうな老人が、自分の同胞を知つてゐて、それを素直に云つて呉れたのを愉快に感じた。

二人は箱の中から取り出した獵具を身につけて、クスマの「萬歳」と云ふ聲を背後に聞き、澤まで十町ばかりの途を歩いて行つた。

もう陽はとつぷり暮れて、黄昏の光が、水の上に仄かに残つて、空氣は冷たく濕つほく匂つて

來た。

水は深さうに澄んで、對岸一帶の地がほんのりと黒い一線を描いてゐる。

今二人はこの澤の前に立つた。

と、丁度此の時、傍から鴨が飛び立つたかと思ふとレザンチエフは、すつと銃を取り上げた。

その最初の一撃は見事に中つて、その中一羽は舞ひながら蘆の間に落ちて來た。

次には、ユリイも射つて巧く中てた。

二人はやがて無中になつた。

火薬の匂が低く沼の上に罩めて、射撃の度毎に明るい火花は暗くなつた夕空に、幾筋となく閃めいた。

撃たれた鴨は、皆赤い夕照の空を、美しく恰好よく、舞ひ落ちて來た。

暫らく経つと、星が幾つか新しく輝やき出した。そして鴨も段々飛ばなくなり、狙ひも闇の中で困難になつて來た。

「やあ……もう歸る時だあ」と大聲にユリイの居る方に向つてレザンチエフは叫んだ。

ユリイは此の壯快な興味から獵を止め度くはなかつた。けれど次第にレザンチエフの方へ近寄つて行つた。二人の眼は燃ゆるやうに輝やき、呼吸も荒くなつてゐた。

ユリイの獵袋は一杯になつてゐた。レザンチエフはその多獵を嬉しさに眺めやつた。彼等はやがてクスマの小舎の方へ歩いて行つた。小舎の傍には枯草を焚いてゐて、その周りから、百姓の話聲や女の笑聲が聞えて來た。

「おや、あそこにサアニンさんがゐる。どうして此處にゐるのだらう」とレザンチエフはその話聲の中にサアニンの聲を聞いて、びつくりした。

二人は焚火の方へ寄つて行つた。

クスマは二人を見つけて深切さうに尋ねた。

「巧く行つたかね」

サアニンは大きな冬瓜に腰を下して、二人を見ると微笑みかけた。

「どうして貴方はこんな所へなんぞ、來たんです」とレザンチエフはサアニンに尋ねた。

「僕ですか、僕とクスマプロキツチとは古い友達ですよ」とサアニンは相變らず笑ひながら答へた。

「さうだ、さうだ」とクスマも笑つて二人にかけるやうにすゝめた。

二人は重い二つの冬瓜を轉がして來て、火の傍に座を占めた。そして獵袋から獲物を取り出した。

サアニンは、閃めく火影に血の滲んだこの獲物を見ると額をしかめて立上つた。そして暗の中からこの獲物を見てゐる百姓や女達の方へ行つた。

ユリイはクスマが切つて呉れた西瓜を旨さうに嚙りかけた。彼には凡てが面白く嬉しかつた。

やがて、暫らくすると鬚の捲き上つた眼の小さな番人が、小犬の跡から歩いて來た。その老人は銃を側に置いて二人を見やつた。

「獵後ですかい、然うぢやらうな」と呻るやうにその男は云つて「やい、クスマ、馬鈴薯を煮る時分だらうぞ」

レザンチエフは此の老人の銃を取つて、ユリイに見せた。それは錆びて、針金で縋帶されたピストン銃であつた。

「こりや、昔の軍人用の火繩銃だ、これを撃つのは怖くないかね」

「然うでさね、すんでの事に自分を殺さうとした事がありますよ、何あにね、ステバンシヤブがピストンは撃つのにや、用はねえつて云つたもんだで、俺や、かう膝の上で、直ぐ曳鐵を曳いたんでがすよ。したがね、向ふを射つかはりに、すんでの事に俺を殺す所でしたぜ、へえ、曳鐵をかう曳くとね、ズドンとすんでの事に、此の身をやつゝける所でしたぜ」

一同はその可笑しな容子に腹を抱へて笑つた。その男も亦笑つた。

その時娘達が、暗の中でキャツキャツと笑つてゐる聲がした。そしてマッチがその闇の中でぱつと點いた。それはサアニンが擦つたもので、その焔の中に立つてゐる柔らかなサアニンの顔とそれに向ひ合つて立つて嬉しさに眺めてゐる一人の娘の生々した顔とがこちらから見えた。

レザンチエフは一寸それを見て、

「小父さん、孫娘さんに注意しないといけないよ」

「何故 そりや若い者同志の仕事でさあね、へゝえ え」と老人は人の好きよりに云つた。

サアニンは面白さうに笑つた。が娘は恥かしつかたと見へて、やがてそこにはもう二人の聲はしなかつた。

レザンチエフはユリイを促して、火の傍を離れた。急に火明りから離れたのでユリイはその冬瓜につまづいて轉けさうになつた。

「おつと、危い。ではさやうなら」と闇の中からサアニンが呼びかけたのを聞いてさよならと答へながら、女のすなりとした姿が、サアニンに密着してゐるのを見て胸を衝たれたやうに覺えて急にサアニンに對して憎しみの感情が涌き起つた。

やがて二人の馬車は、又草原を走りに走つた。

ユリイは何となく損はれた自分の感情に、いぢけて來た。そして一語も語り合はなかつた。

「しかし サアニンがあんなに抜目のない男とは些とも知りませんでした」と笑ひながら、レザンチエフが云つた。

「然うですか 僕は氣付きませんでしたけれど」と彼はサアニンに對する嫉妬から、そつけない調子でさう云つた。

レザンチエフはその調子には少しも氣付かず、妙に舌打をしたり、頭と肩を揺つたりしてゐたが遂に決心した様に

「ちえつ、忌々しい夜ですね。どうでせう、一つ乗込まうぢやありませんか。一三人は美しいのがゐますよ、彼所に行きませう」

ユリイは始め、何の事だか分らなかつたが其の意味が分ると、火の出る様に赤くなつた。

彼の抑へに抑へた本能は動物の様に、彼の身内をのたうち廻つた。そしていろんな空想が、跳るやうにその腦を貫き走つた。が彼は又直ぐに、それを抑制していかにも白々しく

「否 もう家に歸らなくちやならない時刻ですよ」と云ひながら、更に意識して意地悪く附け足した。「リヤリヤは僕等を、待つてゐるんです」

それを聞くと、レザンチエフは一時に身を凍めた。彼はおどくして呟いた。

「然うです……もうほんとに……實際時刻ですな……」

ユリイは怒と憎に凍りつく様に、レザンチエフを見やつた。そして暫らく経つとやつと彼は口を切つた。

「全體 僕はそんな遊興の仲間ぢやありませんよ」

「あゝ 然うです はゝゝ」とレザンチエフは痙攣つた様に嫌さうに苦笑して黙り込んだ。彼は何て拙い事を云つたものだらうと思つた。

「寄りませんか」馬車から降りる時、ユリイは冷やかにレザンチエフを見た。

「否、今夜は患者を一人持つてゐるもんですから。それに晩くもありませんし」と彼の返辭は要領を得なかつた。

ユリイは馬車を降りた。銃でも獲物でも、凡てレザンチエフの物はもう彼には手を觸れ度くもなかつた。しかしレザンチエフに注意せられて澁々獲物を取りレザンチエフの手を不器用に握つて家に入つて行つた。

そして獵具を運んで了ふと又庭に出た。

庭の石段にはリヤリヤが何か考へ事をして腰をかけてゐた。

ユリイは靜かに降りて行つて、妹の傍に腰をかけた。いつも快活な妹は今夜は只、獵があつたかと云ふ事と、レザンチエフは何處に行つたかと云ふ事を簡單にサアニンに尋ねたのみで、又只

獨りの黙想の中にひたつて行つた。

ユリイは、どうして彼奴の事を、妹に知らしてやらうか。本當なら「お前のアナトウルパウロキツチは畜生見たいな奴だよ」と云つてやりたかつた。

しかしリヤリヤは、靜かに自分の嬉しい夢想に酔つてゐた。これは恰度、餘りに靜かであり、彼女としては又異常な事なので、ユリイは、何か彼女は今悲しんでゐるのではないかと考へた。

リヤリヤの胸は生氣に溢れ、その魂は、流れ来る戀の諧調に陶醉してゐたのであつた。

その容子がユリイには却つて悲哀の狀に取られたのであつた。ユリイはその爲レザンチエフに對する憎しみが、益々妹に對する同情となつて行つた。

リヤリヤさん、お前はアナトウルパウロキツチさんを非常に愛してゐますが、そして、どんな所を……………」

「どんな所をですつて？ そんな事一口には云へませんわ、あの方は大變いゝお方で、深切で上品で……………」

彼女はその上美しくて、強くつてと云ひ度かつた。

「ではあの人をよく知つてゐるの」

「アナトウルさんは何もお隠しになりませんよ」

「それは確かだね」

「さうですとも」と答へたリヤリヤの聲は、一種負け惜みな不安の調子があつた。

「若しか貴方 さうした事に就いて、氣附いた事があつて？」と彼女は尋ねた。

「いや、僕が何を知つてゐやう。たゞ話だよ」

「いゝえ、さうでなければ、そんな話をなさる筈がありません」とリヤリヤは戀する者の敏感さで何かを悟つたらしく響きのとほる聲で主張した。

ユリイは狼狽へた。たうとうこんな拙い事になつて了つたと考へた。

「いや、ね、男つてもものは皆放縱になつてるので、それを云はうと思つたゞけさ」彼は苦しい辯疏を無理につゞけた。

リヤリヤはそれを聞くと急に輕快な調子になつた。

「さう、それなら私知つてゐますわ——」

さうした妹の態度はユリイを激さした。彼はそれで意地悪く、

「いや お前が考へてる通り、簡単な事ぢやないよ、この事は——」

「皆り男は放縱で女を得る事を手柄だと思つてゐる。まあどんな女だつて、金とパンの爲に、その夫に對して身を賣るのさ、それでゐるとどんな男だつて、淫を賣るやうな女を妻にしないと云

つてゐるがね、と云ふからと云つて決して男が、さうした女より善いのではないんだ。男はたゞ淫樂の爲に、云ふに云はれぬ方法で放蕩するんだ。この事は誰でも知つてゐて、それを又當然だとして見逃してゐる。そして神聖視されてゐる婚姻といふものは、無邪氣な、純潔な少女等が、狼のような兇狠な男どもに辱しめらるゝ事なのだ。そればかりか病毒迄も染らされる。」

ユリイは意氣昂つてかう話してゐるうちに自分の調子にひとりでに釣り込まれて行つた。

「私、そんな事は些とも知らないわ、ではトリヤさんも、そんなんでせうか」ユリイは始めて、妹がレザンチエフをさう、親しみ呼びかける名で、呼んだのを聞いた。

リヤリヤは、そして歎り泣き出した。

「ではきつとさうよ。あの人も——」

彼女はユリイが狼狽へて、なだめるのを耳にも入れず咽び泣いた。

彼女は今迄レザンチエフの内密の生活は考へた事もなかつた。自分が彼の最初の戀人でないと云ふ事は彼女も知つてゐたけれども、此の意識はまだ一度もはつきりした姿では、彼女の前に現はれて來なかつた。彼女は只、二人が愛し合つてればそれで十分で、その他のものは、今の處何も不必要であつた。それが今ユリイによつて眼の前に、一つの消す事の出來ぬ大きなものをつきつけられたのであつた。彼女の幸福はそれと共に永久に、彼女を去つて了ひ、レザンチエフを戀

する事はもう彼女には出来なくなつたと思はれた。

そして、彼女は身も心も細るかとはばかり、悶え泣いた。

ユリイはおどして、彼自身泣かんばかりに、彼女を慰さめた。接吻もした。しかし彼女の絶望的な歎泣きは依然として續いた。

その物々しい氣配に家の中から、父親が出て来た。そして泣いてゐるリヤリヤを訝しみ驚きながらユリイに尋ねた。

「どうしたのだ」

「何でもないので。レザンチエフさんの事を話したんですよ——」

ニコライエゴロキツチの顔は急に、不機嫌に變つた。

「何だ。馬鹿。馬鹿しい。」といつてさつさと後向きになつて行つて了つた。

それがユリイには非常な恥づかしさを與へた。そして父にやり込められたむしやくしや腹と、妹を憐む同情と自分に對する自嘲の情けない心を味はひながら、彼は石段を下りて庭の中へ入つて行つた。

彼はふと足許に一匹の蛙を踏みつけて、飛び上つた。その不快な氣味悪さで身體中を悪感を通り過ぎた。足の裏に何とも云へぬ無氣味な感じが集つた。

それから彼は闇の中にベンチを見出して、それにかけた。そしていろ／＼な事を考へ始めた。

もう、今さきの蛙は多分死んで了つただらう。そして苦しみ苦しんで自分だけでは、立派な生命に充ちた一個の生活が、誰にも知られずそこで今終焉をつけた。——

かう考へて來ると彼は今迄考へ及ばなかつた一つの思想にぶつかつた。

それは人間の感情や、本能や、善惡の觀念も、人格もそれから人間を作り上げてゐる一切のもの皆影薄い霧のやうなもので、その人間自身には最大の苦痛であつたり、切實であるいろいろな經驗も、此の全宇宙から見れば、やはり誰にも知られぬ蛙の死の苦しみのであると思つた。そして今迄彼が自分の苦惱や、分別や、善惡の觀念やは、他の人々にも、それ／＼重大であるかの如く自分獨りで決めて、人と自分との間に非常に密接な關係を作り出してゐたのが、かの蛙の死を一目見てから、その考は、どこかに消えて了つた。

彼はセミオノフがユリイを始め世間を動かす高尚深遠な理想に對して平氣で冷淡であつた事を思ひ出した。あのピクニツクの夜と、其の前の夜との、恐ろしい相違が其當時ユリイには分らなかつたが、今やつと分つて來た。

かうした些細な事こそ生活であり、生命であるのだ。高尚深遠な理想を一言の下に罵り棄てた彼が、その翌晩はまるで、變つて了ひ舟を漕いで見たり、少女等の美しいとか云ふあの些細な事

に何か重きを置いてゐた様であつた。

あれこそ切實な經驗であり、享樂に充ちた生命であるのだ。高遠な理想等云ふ事は要するに言葉と思想の空虚な組み合せに過ぎない。

この考は非常に自由であつた。

ユリイは、そして生活の意義は自由の實現實行に在る、快樂は恣に取つて味ふのが自然であり當然であると考へた。斯う考へて來るとレザンチエフだつて、純潔だつて、罪惡だつて、今迄ユリイが考へてる様なものにはもう見へなかつた。そして慎ましやかに羞らひ勝な處女例へば、カルサキナも、リヤリヤも自分から、その淫樂の眞只中へ飛び込んで、十分その生を娛しむ權利があると云ふものだ。

ユリイはかう考へて來ると慄然とした。さうして、さうは考へたくなかつた。矢張りそれは俗悪な事であると思つた。

そして、その今迄の考へに驚き怖れて、一時、彼から離れかゝつた平常の觀念や思想を呼び返した。

さうしながらも、彼の心には又いろんな妄想が起きて來た。

彼は「自分はもう疲れて了つてる、早く眠らなくちやあ」と思つて家に歸つて行つた。

床に入つてからも、彼はレザンチエフの事を思つた。その中彼はカルサキナの事に考へが移つてゐるのに氣付いた。そして何とも云へない快よい愛撫を感じた。

そして彼には今、レザンチエフが何故、純潔であらねばならぬか分つて來た。

「僕は本當に彼女を戀してゐた」とユリイは此時始めて意識した。そして此の意識は柔らかに彼を抱いて呉れた。彼の眼からは何とも譯の分らぬ涙が流れた。

しかしその次の瞬間には、苦々しい氣が起つた。

何といふ事だ。レザンチエフの純潔を強ひた自分に何處に彼女を戀する權利があらう。勿論今迄、彼女の存在を知らなかつたけれど。

ではレザンチエフだつてリヤリヤを知らなかつたのだ。

そして凡ての男は女を自分のものにしよと思ふ時は、その女だけが自分に最も適當した正しいものと見え、その前にかつて思つた事のある女は、自分の迷ひの然らしめたものと思ふ。しかし今度も矢張迷ひではなからうか。

かう思ふと取るべき方法は二つしかなかつた。一人の女に永久の貞操を持つか又は自分も女も自由に情熱の享樂に没頭して了ふかである。

もう彼は考へまいと努めた。しかしレザンチエフと比べて、自分の純潔に誇りを覺えた。

レザンチエフは多くの女を愛した様に、今もそれを續けてゐるから悪いのだと思つた。そしてユリイの今迄に経験した女は皆彼自身の全生涯を満足させるに足らなかつた——だから眞個の戀愛といふものは、所詮求め得られないもので、これを求めるのは至愚だと思はねばなるまい。

……彼は早くかうした妄念を打切つて眠らうと焦慮つた。

……成程貞操は理想ではある、しかしこれを實現しようとするれば人類は滅亡する他はない……だから愚だ。

彼は、自分の頭の中で相矛盾した思想を戦はして、夜の白む頃勞れに勞れて、重苦しい眠の中へ落ちて行つた。

翌日リヤリヤは昨夜晩く寝付くまで泣いてゐたので、今朝は頭も重く、眼も腫れてゐた。

もう泣いてはいけなと思ひながら、彼女は悲しさが込み上げて来て苦しい涙が頬を傳つて流れて來た。

彼女には凡てが辛い事ばかりであつた。悲しい事ばかりであつた。永久に失はれた幸福の事を思ふと胸が碎ける様であつた。

彼女は自分の生活が灰色に見えた。將來に希望のない生活は何と不幸なものであらうと思つた

彼の女の頭の中はいろんな考へが取止めもなく次から次に起つた。しかしどれもこれも了ひは彼女が不幸だといふ結論をもつて現はれた。

外は陰氣で小雨が降つてゐた。彼女は窓によつてしよんほり庭を眺めるともなく眺めてゐた。

彼女は昨日から餘りにも變つた自分の惨めさに冷たい窓板に頬をあてゝ泣いた。

と不意に彼女は今日晝飯の時レザンチエフの來る事を思ひ出した。そして驚いた。

「私はあの人に何と云つたらいいだらう」

彼女はどぎまぎした。彼女はユリイを思ひ出した。そしてあの潔白な兄さんならきつといふ事を教へて呉れるだらうと思つた。

彼女は幾分心が安らかになつて、兄の部屋に行つた。

丁度そこにはシャヴロフが來てゐて兄と同志救濟の爲に催はす演奏會の事で話し合つてゐた。

シャヴロフは何にも知らずに、その演奏會の事についてリヤリヤに語り、又意見をも求めた。

リヤリヤはレザンチエフの來る事ばかりを氣にしてゐたので、彼に與へる合槌とか意見とか、ともすればとんちんかんになつた。

ユリイはその内黙つて獨りで悶えた。あんな僕自身にも分らない事を喋つてこんなまでリヤリヤを苦しめた事は、とても堪らない事だ。何故下らない事を云つたのだらう」

彼は自分の髪をかき撈りたかつた。
そこへ女中がレザンチエフが来た事を告げに来た。
ユリイは自ら責められるやうに驚いて見た眼がリヤリヤと逢つたので、どきまぎしてシャヴロフの方を見た。

「君はチャアレスブレッドロオを読みましたか」

「え、ツボワアさんとカルサキナさんと一緒に読みました。面白かったですよ」

「さうですね。ではあの人達はもう旅行から歸つたんですか」

「さうです」

「いつ？」

「一昨日……」

自分が熱心になるのを隠さうとしてユリイはリヤリヤをだましてどもる様な気がして、恥かしかつた。

彼女はやがて思ひ決り悪るさうにその部屋を出て行つた。

食堂の中央にレザンチエフは立つてニコライエゴロウキツチと語り合つてゐた。

彼はリヤリヤの這入つて来るのを見ると急に彼女の方へ進んで来て、抱かうとする様に兩腕を

擴げた。これは二人にだけ分つてゐる事なのである。

彼女は黙つて廣間を横切つて濡縁に出た。

彼女の唇は慄へてゐた。

雨は矢張り降つてゐた。

レザンチエフは後を追つて彼女の前に立つた。そして彼女を自分の方へ引寄せて、そつとその唇を彼女の髪に當てた。

リヤリヤの心はまるで氷の様に解けて来た。

彼女は今迄の考へはどこかへ行つて了つてその腕はひとりで彼の頸に捲きついた。

二人は暫らく夢中に接吻した。

「私 貴方に對してどんなに怒つてゐるか、貴方はほんとに酷い人、悪い人ね、」

彼女は自分自身にさへ何とも云へぬ程、その氣持は直つて了つてゐた、何でもなかつたのだ、二人の間には何にも起つてゐなかつたのだ。

つまり彼女に關係した事ではなかつた。只二人は戀し合つてゐるのだ。

それでもリヤリヤは食事の時兄の顔を見て何と云つていゝか分らずに苦しんだ。兄も何とも云へない様な容子で彼女を見てゐるのが辛かつた。

「私 嫌な気がしたのよ」

彼女が機會をうかゞつて、彼に囁いた時、彼は苦笑するより仕方がなかつた。そして、何となくさうした幸福に對して輕蔑の念を起さうと努めた。

彼は自分の部屋に這入つて夕方迄ゐた。そして外がたそがれて雨があがると彼は、銃をとつて獵に出かけた。

彼は出來た事は考へまいと思つた、そして先日レザンチエフと來た澤の所に出た。

彼は鳥を射たうとは思はなかつた、その黄昏れかけて行く美しい景色に見惚れてゐた。

「何て自然は美しいんだらう、人間だけが汚なく忌々しい」と思つた。

遠くの方の篝火の前にはクスマとサアニンの姿が見えた。

ユリイはサアニンがこんな所で一體何をしてゐるのか知り度かつたが、決して其の方へ歩いて行かなかつた。彼はサアニンに見られるのを怖れた。

何か知ら彼等との間には、不可解なものがあつてそれはどうする事も出來ないものと思つた。すると急に彼は此の世の中でたつた一人になつた様な心細さを感じた。

彼は此の寂しさ、心細さに重く胸を垂れて夕暮の薄暗の中を町の方へ歸りかけた。

五

此の町は今、眞盛りの夏の前に置かれた。光と熱とは、白銀の陽炎を絶間なく大地から燃やしてゐた。

サルウヂンは白い寢間衣の釦を外しながら室の中をゆつくり歩いてゐた。

彼は先月中に七百留ほど負けて今借金せねばならなくなつてゐる。それに座床の上に横になつて彼を窺ひ見てゐるタナロウフの顔を見ると、もう二度程云ひ出されてゐる五十留の無心の事を思ひ出して厭な気がした。

——此の男にはまだ二百五十留の貸がある筈ぢやないか、成程二人は仲よく交際はしてゐるけれど些とは恥かしいと思ひさうなものだ。もう今度は貸してやるものかと思つた。

そこへ從卒が這入つて來た。そしてタナロウフに注目の禮をして、

「貴方様に申し上げます、貴方様から麥酒を云ひつかりましたが、麥酒はもう少しもありません」
「チツカも もう皆失くなりました」と彼は眞面目な顔をして云ひ足した。

サルウヂンは忌々しさうにタナロウフを見やつた。そして激しく從卒に向つて、

「去せやがれ、まだ貴様は二留は持つてる筈ぢやないか、要るものはそれで買つとけ」

「もう些とも残つては居りません」
「何だと、嘘を吐け」

「此の御方様のお命令で、洗濯女に拂ひました」
タナロウフは此の時、態と大風に口を挟んだ。

「然うだ。昨日僕が命令けたのだ、そら、ね君、もう奴一週間も僕の所にうるさく催促に来やがるんだから」

がその顔は赤くなり蒼くなつた。

サルウヂンの頬にも急に血潮が上つた。

彼は黙つて室内を歩いてゐるが急にタナロウフの傍に立止つて、

「まあ、君、僕は君にお願ひするがね、僕の錢で君の用達するのは止めて呉れ給へ」
タナロウフは益々赤くなつた。

「何を云ふんだ君、こんな些細な事……」

「ちつとも些細ぢやないよ、どうして僕は、君にそんな事云はねばならないのだ。その譯を云つて呉れ給へ、そんなやり方をするなんて全く不愉快だよ」

彼はさう云つて少時、タナロウフの返事を待つてゐるが、やがてぢやらぢやら、鍵の音をさし

て百留の手形を出した、

「さ、これで買へ、何なりと要るものを」

タナロウフは唇を痙攣るやうに慄はして、その従卒に渡す手形を見てゐるが、
「此の男にとつて、二留位が何であらう」と思つた。

サルウヂンは部屋を彼方此方歩いてゐるが、やがて従卒が麥酒を持つて来るとそれをコップに注いで飲みながら、今の事は忘れた様にタナロウフに話しかけた。

「昨日もね、リダが来たがね、面白い女だよ彼女は、全く大熱々なんだからね」
タナロウフは調子が變だから黙つてゐた。

「ね、君、昨日僕は彼女を○○○○○○○○ね、その時彼女は拒んだけれど、………ところが
さ 畜生!! 僕自身痙攣らうとした位だつたよ」

彼は鋭いその回想に興奮して眼は燃ゆる様に輝やき、顔は痙攣つた様に露骨に卑しく笑つてゐた。

「ほんとに君は幸福だよ、癪だね」とタナロウフは本當に妬ましさに叫んだ。

突然往來からイワノフが呼びかけた。そしてサルウヂンの在宅を知ると、どや／＼と、大勢這入り込んで来た。

オウトラ、アキョウ、騎兵大尉マリノヴスキ、別に二人の士官それにサアニンの六人であつた。サルウチンは困つたなあと思つた。しかしどんな散財になつても、聯隊内で一番錢放れのいゝ交際上手な男でないと思はれる事はそれよりもつと痛い事であつた。彼は鷹揚に微笑んだ。

「いらつしやい……おい チェリバノフ、チツカを持つて来るんだ、それからあればまだ他のものも、そして俱樂部に走つてね大急ぎで麥酒一箱持つて来い、急いでね」

酒が来ると皆の騒は一層盛になつた。皆は飲み、騒ぎ、叫んだ。そして愉快さうであつた。その中にノキコフだけは沈み込んでゐた。彼は昨日初めて知つたサルウチンとリダの評判に甚く苦しめられてゐた、彼は一晩中、自殺の念にいちめられた。しかし最後には猛獣の様な二人に對する激しい憎惡を覺えた。そして今朝になつてから彼はサルウチンに逢つて見ようと云ふ危ない望が動いた。

彼は今譯もなく麥酒をあふりながら、心では動物の様な感受性でサルウチンの一舉手一投足を感知し、今にも飛びかゝらうとする様に待ちかまへてゐた。

「サルウチン君、僕は君に本を一冊持つて来たよ」と云つてフォンドイツはトルセトイの女性觀を得意さうに手渡した。彼はトルストイの崇拜家で、士官である。

「面白いかね」

「まあ、読んで見れば分るよ」

「だつて井クトルセルゲキツチさんに何で、トルストイ等読む必要がありません、此の方の女性觀はもう丁と決つてゐるぢやありませんか」とノキコフは下を向いて云つた。

サルウチンは此の言葉の非難である事を本能的に感じて尋ねた。

「何故さう決めて了ふんです……」

ノキコフは極度の憎惡が涌き起つて来て、出来るならサルウチンを大地にたゞきつけて罵倒してやりたかつた。しかし一言も咽から出て来ず彼は狂氣のやうに顔を歪めて云つた。

「貴方を見るだけで然う決まつてゐます、僕が思ふんぢやなく實際がさうなんだ」

二人の顔色は變つた。しかし直にみんなに宥められ止められた。

ノキコフはどうしたらいいだらうと考へた。

「此の儘だと僕は非常な馬鹿けた地位に立たねばならない。僕から喧嘩を賣つた事は皆よく知つてゐるんだから。進んで撲り倒してやらうか……」

その時イワノフの言葉にふと興味を覺えた——女つて云ふものは、たゞ雌といふだけさ、男子の中には千に一人位は人間といへる價値のものもあるが女どもの中には一人もゐるやしない。裸出

で赤い豚肥の尻尾のない猿でさ……」

ノキコフはそれを聞いて然うかも知れないなあと思つた。

「ね、君『どの女でも男を色眼で見るとは既にその心姦淫せり』と世間に云つて御覽なさい」とイワノフはつゞけてフォンドイッツに云つた。

フォンドイッツは、この嘲弄を解せず、啞聲で笑つた。そしてイワノフを眺めてみると、突然ノキコフに手を握られて愕いた。

ノキコフは咽まで歎歎きが込み上げて来た。

サアニンは靜かに、彼に微笑みかけた。

「分つたよ。君の氣持はよく分つたよ。何だね女々しいぢやないか」

ノキコフは訴へる様にサアニンを見た。

さうして別れをも告げずに出て行つた。彼の心は嫉妬と心細さで重苦しく鎖されてゐた。

ノキコフが出て行くと跡では骨牌が始められた。

そしてサルウヂンは賭ける度負けた。彼は前月の七百留の負と今との總計が恐ろしい額に達する事を考へて見るさへ恐れた。何とも云へず不愉快であつた。此のサルウヂンの氣分は皆に移つて行つた。フォンドイッツとマリノヴスキーとは互に勝負の事で云ひ争つた。

そこへ不意に戸口を開けて立派な紳士が現はれた。

「おゝ、パウエルリキツチさんですね。どうしてまあ、此地へ……何時いらしたんですか」とサルウヂンは氣まり悪さうに赤くなつて其男を迎へた。

部屋の中は亂雜に取り散らかつてゐた。

その紳士は此様に瘠せ衰へてゐなく、又此様に小さい顔でなく齒も髭もつと立派だつたら、この亂雜な酔つぱらつた群の中で、どんに優れて見えたであらう。此男は清潔で香水の匂はその身を馥郁と匂はしてゐた。

「昨日着いたゞけです」彼の聲は物事をさも萬事込み込んだ様な落着があつたけれど、それは丁度頭を締められた鶏の様なきいゝ聲であつた。

「皆様、パウルリオキツチチロウシンさんです」

皆にサルウヂンは紹介した、そして上等の葡萄酒を従卒に命令けた。彼はこんな贅澤家が、折悪しくも丁度來合したものだと思つて腹が立つた。それにベテルスブルグの知人に、有る事ない事喋るに決つてゐる。此の男に喋られたらもう彼地では、立派な家では僕を寄せつけないだらう。チロウシンは一同を腹の中で評價した。そして詰らない連中だと思つた。たゞその中でサアニンだけが、その強さうな身體や服装まで並はづれて偉大に見えた。

サルウチンはチロウシンの隣にかけて、彼の工場の様様や、いろいろな事を尋ねて一同に此の男の、富裕で重要な人物である事を知らせようとした。

「貴方はどうです。」

「此方等に面白い事があるもんですか」

二語三語語を交へてゐる中、チロウシンは急に立上つて歸る用意をし出した。そこへ従卒がリダの來た事を告げた。

チロウシンはそれを聞いて卑しい好奇の眼を動かして、意味ありげに笑つた。サルウチンは彼を玄關に送り出すと又一度一同の部屋に來たが、骨牌の方をタナロウフに任して自分の部屋に入つて行つた。

そこにはサルウチンの寢臺の片方に座つてリダが待つてゐた。彼女はもうくの容姿は些とも見られない迄變つてゐた。あの力の充ち満ちた美しさは何處に行つて了つたのであらう。

しかし彼女の容子の變つた通りサルウチンの言葉にも、もとよはすつかり變つたものがあつた。「どうしたんだね、お前は餘程變な人間ぢやないか、僕ん所は今大勢の客で、まるで店の様だぜ、お前の兄貴もさ、それなのにこんな時來なくつたつて、外に來る時があるぢやないか、ほんとに癪に障つて——」

彼女は驚いて彼を見上げた。

サルウチンは、これは少し云ひ過ぎたとリダの手を握つた。

「何でもないんだよ、只お前の爲にさ、いつだつてお前の來て呉れる事は嬉しいよ」

「ほんと？」リダの眼は哀訴する様であつた。

「お前疑ふのか？」と云つたけれど彼にはこの言葉を云ふ事は少なからず辛かつた。彼の感情はその言葉を、さう公明正大には云はせなかつた。

彼はその激しい回想に身を焼くやうな慾望を感じたが、その感情はまるで冷たくなつて了つて、女に對する嫌氣がつくく起つて來た。

さうして何か要求される事を待つてゐるやうな不安な焦燥を感じて怒鳴り度い程癪に障つて來た。

「あゝあゝ女といふものは全くセクスピアの云つた通りだ」

リダは愕然として彼を見上げた。

そして、彼女の心は急に冷たいものでさし貫かれた様に感じた。

彼女は自分ももう捨てられたものだと思つて解し得た。彼女は自分の最も貴い取返しつかない純潔を此の男の爲に感謝や、喜悅の代りに仕放題な辱しめを以つて蹂躪られたと思ふと非常な絶望を

感してふら／＼倒れやうとした。

そして彼女の心には極度の憎悪と復讐の念がむら／＼と涌いた。

此の彼女の激情は、サルウチンに又新しい慾情を起させた。彼は彼女の劣情を、そゝる様に彼女を抱かうとした。しかしリダはまるで氷の様に冷淡で、何か他の事を考へてゐる様であつた。さうしてサルウチンは、リダが意地悪く自分の手を振りほどくので、すつかり或る感情の出鼻を挫ちかれて、興ざめて了つた。それは彼にとつて實に瘡で忌々しい事であつた。

「一體どうしたんだ」と彼は赤くなつて叫んだ。するとリダは今迄堪へてゐた涙が一時に堰を破つた様に流れて來た。そして止度なく泣き出した。

サルウチンはすつかり困じ果て、出來るなら戯けて機嫌を直してやらうと思つた。

そして又兩手を彼女の腰にそつと廻さうとした。けれど此の時不意にリダの鋭い肘鐵砲が、彼の顎に當つて齒と齒がち／＼突飛に滑稽に鳴つた。

彼は怖ろしく怒つて何か怒鳴つた。

彼女は、その事は少しも氣が付かなかつたけれど、何かしらサルウチンに起つたらしい滑稽な氣配を感じて、冷靜に彼を罵倒してやらうと思つた。

「何と云ふ態さまです」

「誰だつて腹が立つぞ、何に關した事か知る以上は」

「え、では貴方はまだそれを御存じなしなんですな」と嘲笑つた。そして彼女の顔は次第に激して行つた。

不意に鉛を飲まれた様にサルウチンは蒼白になつた。

全くその事は思ひ設けない事であつた。かうなれば、手切金をやつてゞも別れたいと思つたけれどそれは流石に云ひ出せなかつた。

そしてきれ／＼に

「リダさん、しかし、僕は、もと／＼お前を——」と怯々呟いた。

リダは立上つた。

彼女は彼に對して、極度の憎悪が胸に煮えくり返るのを覺へた。そして今迄、彼が彼女を救つて呉れるものだと思ひ込んだ自分の考に唾を吐きかけ度かつた。彼女の心には又新しい復讐が涌いて來た。しかしもう彼女は一語も口にする事は出來ない。今一言でも云ひ出すものなら直ぐに泣けて來ると思つた。

彼女は只一言「畜生奴」と罵つた。

サルウチンはこれを聞くとかつとなつた。此上ない侮辱だと思つた。しかしそれと同時に女と

別れ得たと云ふ仄かな喜びと安心が心の底に湧いて来た。と共に又少しの未練も彼を捉へた。——も早やあんな美しい處女が自分を戀する事はないであらう——かう思ふと堪らなく辛かつた。彼は此の思を無理に追ひやつた。

そして無頓着な顔をして客室に戻つて来た。

サルウチンの家を飛び出したリダは、家とは反対の方角へ常もなく急いだ。彼女の頭には様々の考へが次々に迅く働いてゐた。

彼女は今自分は盗人猫見たいに醜いものであつて、凡ての人から嘲けられ囃されても、何一つ抗辯する事の出来ないものであると思惟し、その考へは彼女を此上もなく辛くさせた。

彼女はかうした嘲罵や、世評から自分の美と誇りを守らねばならないと決心した。

その爲にはも早や自殺より他に撰ぶ道はなかつた。

彼女は只管、死の道を急いだ。彼女は路々自分の周りを取り捲いてゐる空虚をひし／＼と胸に感じた。

やがて彼女は橋の上に立つて青みがかつた河の流をのぞいて見た。すると今迄張りつめてゐた死の觀念は泡の様に消えてそれに對する人間の本然の恐怖が彼女を捉へた。しかし彼女はどうしても恐怖と戦つて始めから目ざしてゐた目的に達せねばならぬと考へた。

そして、ふと落した手袋が音もなく水面から下に吸はれて行つたのをつく／＼眺めた。

するとそれは又、凄味を帯びた深い水底からもう一度浮び上つて緩く輪を描いて又もや音もなく消えて了つた。そして河は何事もなかつた以前の平らな水面に變つて行つた。

彼女は何とも云へない氣がした。そして四圍を見廻すと幾らも人目があるので、もつといゝ場所を探さねばならぬと思つて又岸に沿うて歩き出した。

そして或る地點に達すると彼女は洋傘と手袋を草の上に置いて岸へ下つて行つた。

此時、彼女の頭には、めぐるましく昔からの回想が、ひつきりなしに浮んで来た。

サルウチンや母や、その他無量の思ひ出が………

そしていつかしら忘れかけてゐた子供の時の信仰が靜かに目覺めて来た。

「あゝ神様。どうぞ私をお救ひ下さい——」

此の瞬間一人の男が籬を飛び越して呼吸せき切つて叫んだ。

「いけないよ、馬鹿な真似をするんぢやない」と。

それはリダの兄のサアニンであつた。

彼はさつきサルウチンがリダに逢つてゐる時、客室を出て、庭の方から、その模様を蔭ながら聞いてゐた。

そしてリダが妊娠したと聞いた時、心からリダを憐んだ。そしてその窓際を離れて一人庭を歩いてゐたのであつた。

その時、不思議にもリダは無意識に、そのサルウヂンの庭の境に死場所を撰んでゐたのであつた。

サアニンは初めそれを見付けた時、黙つて放つて置いてリダの氣持を妨けまいと思つてゐたが餘りに苛立つてゐる彼女の容子がすつかり彼の同情をあふつたので、ふらふらと何考へる餘裕もなく彼女を水際に捉へたのであつた。

彼はリダを籬の所に伴れて來てそれに凭りかゝらした。リダはやがて正氣づくつと、何でも破れかぶれになつた様な氣がして歎歎け始めた。

そして暫らくして、兄の顔を見つめると、泣いちゃいけない、泣いてると何もかも動づかれて了ふと思つて急に泣き止んだ。

「僕は何でも皆知つてるよ、残らずね」

リダは愕いて兄の顔をしげ／＼見た。

「何をそんなに苦しんでゐるのだ。僕が知つてるからか？ それともサルウヂンに身を許した事を白状せねばならぬ事が、そんなに辛い程悪かつたとも思つてるのか、それとも彼がお前と結

婚しないからか、しかしそりやお前の爲には喜ぶべき事だ。彼奴の取り所は美男だと云ふばかりさ。そしてお前はそれをもう十分享樂したぢやないか、それからお前の妊娠は、そりやよくない。まあ子を生むと云ふ事は最も詰らん事だからね。お前は誰にも悪い事をしたんぢやなし、それにお前が此の最も詰らない事をしようと思ふなど、こんな馬鹿なことはありやしないよ」

サアニンは考へ考へ、靜かにつゞけた。

「まあ、お聞き、僕がお前の取るべき道を教へてあげるがね。何も死ぬ必要なかありやしない。それにお前の死ぬ動機が可笑いぢやないか、お前は妊娠したから死ぬるんぢやなく、只世間を恐れるからなんだ、お前の一番大きい不幸は、それ自身が不幸であるからでなく、そんな不幸があると思つてるからなんだ、お前は、お前の知らない人間なら少しも恐れやしないだらう。ところがお前の怖れてゐるその親しい人達と云ふものがさ、たゞお前が正式の式を擧げずにこんな事になつたと云ふに過ぎないので、お前を責むる事には何の躊躇もない人間達なんだよ、そんな連中の手前等恐れる必要があるものか、皆分らずやなんだよ、そんな奴の手前、お前が苦しみ死ぬる必要なんか些とも、ありやしない」

「だつて私には外にどうしたらいいか——」

「先づその腹の子を墮す事さ、え残酷だつて？ そりや生物を殺すのは残酷さ、だがまだ血と肉

の塊だけなんだよ、そんな事出来ないつて？ 何もそんなに慄へなくつてもいよ。ぢやあその事が出来なければノキコフと結婚するさ、そして幸福になる事さ、それにあのサルウチンの奴は此地から追ひやる様に、僕が骨折るからね」

リダはノキコフの名を聞くと、何か一筋の光明が見えた様に思つた。しかしその光明も直ぐ絶望にかはつて行つた。

もはや自分は人の前には出られない醜いものになつて了つてゐる。どうしてノキコフさんなんて、そんな事が出来やうと思つた。

「そんな事が……そんな恥知らずの事が……」

「恥知らずと、ぢやあね、母胎が難産で苦しむ時には、もう泣きかゝつてゐる嬰兒でさへ、その頭を潰すんだよ、あれは罪悪ぢやないのかい。それにまだ血の塊に過ぎないものを、一寸その反應を歌めさせるのが罪悪かね。それは母胎の生命どころか、生命より大切な幸福がどんなになるか知れないといふ此の大事な瀬戸際にだよ、こんな矛盾した事ばかりだ人間てものは。皆が寄り集つていろんな厩氣樓を築き上げて、その中に各自が苦しんでるのだよ。まあそれは別な話だがね。お前は恥知らずと云つたね。或ひはさうかも知れない、がノキコフに此度の事を話したら、彼の男は自殺するかも知れないよ。あの男だつてさうした厩氣樓を多分に持つてゐる人間なんだか

らね。しかし彼が眞個に物の分つてゐる男だつたら、お前に以前どんな事があらうと、お前と結婚するに決つてゐる……」

それにお前の事だつて、人間が一度しきや戀していけないものだつたらどんな事になるんだ。そんな馬鹿げた苦しい事があるものか。

所が實際はさうでないから有難いよ。

だからお前もノキコフに戀するさ。それとも本當に彼を好かない？ え 若しさうだつたら僕と道行をしようぢやないか。どこだつて面白く暮せるよ」

リダは溜息をついて、幾分軽い氣になつた。

リダの心は變つて來た。それはあながち、サアニンの言葉ばかりからではなかつた。彼女の内にも生きようとする自由な生命が高鳴つてゐた。

それに太陽は照り輝やき、水は美しい音を立て、緑の草を吹く風は涼しく凡てのものは皆生氣潑刺としてゐる。

彼女は一切のものゝ輝やく生命を會得した。

「生きるとも、生きるとも」と驚喜に夢中になつて叫んだ。

「さうさ、さて僕はお前の難儀を助ける——その代り一度、お前は接吻をさせなくちやいけない

よ

リダは黙つて極り悪るさうに微笑んだ。

サアニンは彼女の弾力のある身體を自分の方に引き寄せた。

リダは異様な堪へ難い快さを覺えた。何の憚かる所もなく、自分の腕を兄の頸に捲きつけ、眼をとぢて其唇を、彼の唇に押し當てた。

彼女は、その快よさに絶え入る様に、まるで自分を忘れて了つた。誰に抱かれてゐる等は、今この愉快の時に思ひ出す事は出来なかつた。

何といふ快よい事であらう。今度は私の方から接吻しよう。あゝ私はさつき身投しようとしたけれど人の事の様に思ひ出した。

彼女の眼は夢みてゐる様に美しく輝いた。

サアニンは緩くりと彼女を腕から放した。

リダは、こはれた髪を直し、そして何氣ない風を装つて彼を見た。

彼は黙つて微笑み返した。そして二人は並んで岸を歩いて行つた。

それから、サアニンはリダと別れて獨り、ノキコフを訪れた。

ノキコフの部屋は大風の跡の様に甚く取り散らされてゐた。彼はどこかに旅立つと見えて行李

がその部屋の真中に投げ出されてゐて、彼は機械的に荷造りをしてゐた。

サアニンは興味を以つて彼を見た。

「何處へ？」

「僕は飢饉地へ行く事になつたんだよ。手紙が来てね」と彼は甚く悲しさうであつた。寂しさうであつた。

「どうしてそんなに、何でも投げやりに包むんだね？」

「もう何にも云つて呉れるな、僕はとても辛いんだよ。察して呉れ給へ」と彼は悲しさうにサアニンを見上げた。

サアニンは暫らく黙つてゐたが、徐ろに、口を切つた。

「ね、君 それよりも君はリダと結婚した方が餘程、優だらうよ」

「そんな事はもう云はなかつて呉れ給へ、頼むから」ノキコフの聲は辛さうに震へた。

「それともリダと一緒にゐるのは不幸かね？」

「止して、止して呉れ給へ」ノキコフの聲は殆んど泣く様であつた。

「いゝよ、僕は何でも知つてゐるんだ」とサアニンは欺上げさうになつてゐるノキコフを慰さめた。

「ね、君何でも隠さず云はうよ、君はリダが拒絶したから、そして今日サルウヂンの家へ彼女が

尋ねたと思つて旅立つと云ふんだらう。

僕は二人の仲を委しくは知らない、そして二人の交りは短かゝつたし、それにリダの性格を考へれば十分分る筈だ。よしんば些とした事があつたとしても、もう過ぎ去つた事だからね、若い女つてものは自分の幸福以外何物もないものだからね、そんな女の感情なんか僕等が惱まされてなるものか、君自身より以上の忌はしい感情を有つてゐる事を考へればね」

ノキコフはこの言葉を聞きながら次第にその眼を信頼に輝かして來た。

「僕は一言云つて置くがね。二人の間には、何事も出来てはゐないよ。今後出来はしないんだ」
「さうかね。僕は……」

ノキコフはさも嬉しげにサアニンの手を振つて、それを握つた。サアニンは自分に身を任せる女にまだ誰も手をつけてゐないと云ふ事を有頂天になつて喜んでゐるノキコフを憎さげに見凝めた。

「それでね、リダはサルウチンに惚れてゐたばかりぢやないよ、二人の関係はちやんと、もう着いてゐるリダは妊娠してゐるよ」

ノキコフは弱々しい苦笑を洩したが、何かこの時もう一言云はれたら涙が出さうであつた。サアニンの口は皮肉に至んだ。

「そしてね、リダは若し僕が行かなかつたらあのまゝ投身して川底の泥にまみれて、蟹の餌にでもなつてゐたやうよ、まあ人間一匹が死ぬつて云ふ事は些とも關する事ぢやないけれど、彼女はまだ十分人生に愉快を與へるものを持つてゐるからね、全く世の中から若い女が失くなつたら、それこそ此世は暗も同然だからね…… ね君、僕は君がリダと結婚しようと思つた馬鹿な真似をしようと、それは平氣だがね、只あんな若い女が一度男を撰ぶのを誤つたからといつて、君自身をも亦女をも不幸に陥れると云ふ事は辛い事なんだよ。」

女は戀愛と性慾の満足を知つて始めて人間になるんで、其迄はまだ未成品だからね、リダのやつた事は只春の活力素なんだよ。美なんだよ、それに反して君は幾度淫賣婦のやうな女に引つかかつて、犬見たいな真似をしたやう。一體、君がどうして彼女から遠ざかる理由を有たう、それとも君は彼女が醜くなつてゐると思つてゐるのか、又もう、彼女は君に十分の楽しみを與へて呉れる事は出来ぬとも思つてゐるのか」

サアニンはノキコフの思想の片鱗をも見のがすまいとするかの様に彼を見つめて尙つゞけた。

「ね、君、一體君が何を損してゐるんだね、彼女の足だつて胸だつてもとのまゝだよ、彼女の感情だつてもさ。若しもリダが痲瘡でもやつて、見る影もなくなつたのなら君は三日と辛抱は出来ないだらうよ、ね君 高尚な事業迄その享樂は伴つてゐるんだよ、今彼女を君のものにするとい

ふ事は何と愉快な、美しい事ではないか、ね」

ノキコフはサアニンの云つてゐる事を聞いてゐると自分へ對する自分の同情は小さく壓し潰されさうになつた。

「君はさう云ふけれど、僕だつてそんなに冷酷ぢやないよ。まあ先入の僻見は幾分あるだらうがね——リダさんさへ、僕を愛して呉れてゐる事が分れば、苦情なんかありはしないさ」とノキコフは辛さうに云つた。

「まあ、彼女が今君を戀するかどうか、そりや分らないが——僕は君が、君自身の快樂の爲に彼女を苦しめる心算でなく——であつたら彼女だつて——と信するがね——」

ノキコフは悲しみと喜びの交つた心で、ちつと近づいて來る幸福を見つめた。

「ね、行かう、彼女の所へ、僕等が行つたらきつと喜ぶに極つてゐるよ、さあ行かう」

「でもリダさんの心持を悪くする様な事があつては」

「そんな事を考へる必要があるのかね。自分だけ正當な信念さへあれば——」

「よし、行かう」

ノキコフは、彼自身覺えのない程の力を、覺えた。そしてリダを幸福にしてやると云ふ大きな仕事を思ふと、彼の心は甚く緊張して來た。

彼はサアニンと一緒にリダと逢つたら何と眞先に云つたらいゝかと臆病に考へながら路を歩いた。それは恥かしい様な恐ろしい様な氣持であつた。

彼はリダを一目見るや、その以前と、まるで變つて悄れ切つてゐるのに驚いた。そして嫉妬とか憎悪とかは何處かに行つて了つて、彼はリダが、どれ程苦しんだであらうと心からの同情を彼女に寄せた。

しかしその日は兩人とも、自分達の魂の底迄苦しめられた事に關しては一言も語り合はずに別れた。

しかしこれは二人には早晚、出合はねばならない避ける事の出來ないものであつた。

リダは兄の慰めに力を得たものゝ、一人になると、あの明るい氣持は直ぐに消え失せて自分もはや何等の幸福をも人に望む權利はないと思つた。

彼女は時としては堪らなくノキコフに手も心も引きつけられる様な思をした。けれど彼女は自分の存在がノキコフの赦と愛とで決まると思ふ事には深い反抗心を呼び起した。

その自尊心も反抗心も、失意の意識と、生に對する愛欲との前にはまるで力のない空虚なものになつて行つた。そして自分が嘗てした事は今迄讀んだ澤山の本や、澤山の偉大な思想に照して見ると極く、當然な事で又美しい事であり、それを認めない世間の馬鹿らしさを嘲り度いと云ふ難

な考へは、此の二つの意欲の前には消えて了つてノキコフの顔を自由に見る代りに奴隷のやうに彼の前にひれ伏した。

彼女は苦しくなると兄の事を思ひ浮べた。あの利己主義で不道徳らしく見ゆる兄の前だけで彼女は身も心も伸々と成り、どんな恥かしい話でも、彼とは平氣で出来るのであつた。

——妊娠してゐる。可いぢやないか。人に輕蔑される。それが何だ。只我々の前に存在するものは生であり太陽であり自由である。

母が心配したつて、それは母の勝手さ。生の途中で不圖行き逢つたお互がどうして各自道を邪魔する事が許されやう、

リダはしかし、自分獨りでは、とてもさう迄は自由になりきれなかつた。そんな時、彼女は兄に對して恥かしい誘惑を感じた。彼女は其の考へを恥ぢて、それをノキコフの方へ向けた。

彼女はノキコフの愛を願ひ待つた。

彼女は今日もこの庭に終日坐つて、そんな事を考へながら、地平線の彼方に沈む夕映を悲しげに眺めてゐた。

そこへノキコフとサアニンは黙つて彼女の方へ進んで來た。

彼女は何だか怖ろしい最後の時が來た様に蒼白になつて胸は強く動悸をうつた。

「それ、此處にゐた。ノキコフ君を伴れて來たよ、直接何か話すんだらう。僕は一寸お茶を飲んで來るから……」

とサアニンはさつさと家の方へ行つて了つた。

「リヂアベトロヴナさん」ノキコフの聲は血を絞る様に切なく響いた。

リダは何となくノキコフを痛む心に切ない嬉しさを覺えた。

「私は何もかも知つてゐます。それでも私は以前通り貴女を戀してゐます。貴女だつて、いつかは私を思つて下さるでせう……」

貴女は僕の妻になつて呉れませんか。」

リダは黙つてゐた。そしてやがて簡單に、

「え、どうか……」と答へた、

彼女の眼にはノキコフを狂喜させるものがあつた。

——私は誓つてよい妻になりますわ、絶えず貴方を思つてゐます、貴方の心はいつも私の心よ

彼は狂ほしくリダの手を唇に持つて行つた。

自分も俄かに、かうした興奮に捉はるゝ嬉しさに彼は身を慄はした。そしてそれはリダに彼女

の恥と悲しみを忘れ去らせる程強くリダの心にも響いて行つた。

二人はもう萬事が済んだ。

此の後に残されたものは二人の取るに任した幸福だけだと思つた、そしてリダは此んな嬉しいことは、今迄一度もなかつたと、つくづく考へた。

やがてサアニンは、ゆつたりと歩いて來た。

彼はもう大方いゝ時分だらうと思つて、

二人は彼の來るのを見ると狼へて、嬉しさ、頼もしさの眼をもつて彼を迎へた。

「うゝん、まあ有難い。二人共合せになつて呉れ」

サアニンは眞面目に云つた。そしてまだ何か云ひ足さうと思つたが急に川向ふ迄も聞える位、氣持よく颯を一つやつて、

「此所は濕るね、風邪なんか引かない様にし給へ」と云つて彼は臉を赤くした。

リダは、愉快さうに面白がつて、高く響く聲で笑つた。

「ぢや僕は行くよ」

「何處へ……？」

「なあに、さつきセワロシツチ君と、あのトルストイの崇拜家の士官ね、うゝん、フォンドイッ

ツ君、あの二人が來てね、何か講演會があるからつて僕等を誘ひに來たんだから。まあお前達二人は今ゐないと云つといたよ」

「何故」とリダは笑ひながら尋ねた。彼女の笑聲は、もう以前見た様に華やかであつた。

「此所にゐるがいゝさ、僕だつて相手さへるりや、あんな所へなんぞ、行きやしないんだけど」

サアニンはたうとう今度は本當に行つて了つた。

もうすつかり夜になつてしまつて、庭の境を流るゝ川の仄暗い水面には、ちら／＼と星が揺めいてゐた。

六

暑く燃ゆる様な夏が此町全部を掩ひかぶせてゐた。

日中は皆仕事をしたり政治、人生、藝術を論じたり水泳をやつたりして忙しいが、遠い地平線に丸い月が出て來ると萬物は息を憩め、涼しい風は、そろ／＼と吹いて來た。

ユリイスイワロンツチはシャヴロフと、政治を談じ又自己修養協會設立の相談をしたり、最近刊の書籍の批評をしたりして其處に自分の生活は存してゐるものと思つた。

併し、彼の生活は益々倦怠を増して來るばかりであつた。只暫らくでも、その倦怠が忘れられて

ある時と云つたら、それは彼がカルサキナの事を思ひ出してゐる時であつた。彼女の前に出ると、彼の話聲は全く調子が變つて、色調を帯びて來、明瞭に力付いて來るのであつた。

日中は終日、彼の女の事を思ひ、夜は彼女を探しに出た。それは、しかし勿論自分にさへ、さう白状しはしなかつた。

そしてカルサキナの方はと云ふと、彼女の心にも、確かに臆氣ながらも、ユリイに對する慕情が起つてゐた。彼女は二人が何の關係もあるのではないと思ふと、何かしら貴いものを奪はれた様に思はれ、自分がユリイに愛せられてゐると思ふと甚く幸福に感ずるのであつた。

しかしカルサキナには又サアニンが沈着いた確かな、力のある足取りで歩いて來るのに逢ふと一種の感能的な興奮を覺ゆるのが常であつた。そして或る特別の興味をいつも彼につないでゐた。或夜ユリイは町の圖書館で、カルサキナに逢つた。二人は館を出る時に一緒になつた。

ユリイはカルサキナを送つて、月夜の路を歩いてゐた。そして彼女の家の近くに來ると路傍の樹蔭のベンチに並んで腰を下した。

月の光は一樣に照り渡つて、寺の圓塔や、菩提樹の繁みや、幅廣い散歩路等が、まるで夢の様に展開されてゐた。

ユリイはカルサキナの二の腕や唇を見て、奇怪な慾情を感じて、身内は激情で熱くなつた。しかし、彼は此の瞬間の機會を捉へる事が出来なかつた。するとカルサキは不意に彼の方へ向いて尋ねた。

「貴方、何時か戀をなすつた事がありますか」

「え、あります」と彼は落着いて答へてから幾分、躊躇ひながら「そして今も」といつた。

「誰方を？」

「貴女をです」と彼は冗談に云つた風をしようと思つたけれど、どうしても、そんな調子が出て來なかつた。

したか、何だか、彼女を抱いてゐる様な錯覺を感じて、それに愕き、力が失せ、氣が抜けて了つたので、彼は「あゝ」と偽の欠伸をした。

その事は、明かにカルサキナを苦しめた。さつき彼の告白を聞いてから、彼女の顔は幸福さうに、輝やいてゐたのに、その欠伸と共に自分が欺されたと思ふ感じと又非常な侮辱の感じとで、彼女の情は氷の様に冷めたくなつて了つた。彼女は泣けさうになるのを無理に堪へた。

「つまらない。彼女の聲は全く變つて了つてゐた。

「嘘ぢやないんですよ、眞面目ですよ、貴女はこれを信じないんですか」

「もう時間ですから歸ります」と彼女は本を寄せ集めて彼に手を差し出した。するとユリイはその手を握り柔かい掌に接吻をした。

「何をなさるんです」

彼はこの感能的な感觸に有頂天になつた。

彼女の遠ざかり行く蹙音に耳を傾けながら彼はその幸福感に戦きながら自分も家路に着いた。しかし此の感じは家について自分の部屋に入つた時には、全く無意味なものになつてゐた。

——接吻をすると——ふん、それがなんで幸福だらう……何が詩的だ。愚かな事だ。此んなつまらない田舎にゐると、どんな凡俗になつて行くか知れやしない。

彼が都にゐた時は、田舎に行つて純な労働で、大地に親しむ簡単な生活こそ、自分の實在を有意義ならしむるものと思つてゐたのだが今はこんな所に焼つてゐないで都に飛んで行つたら、どんなにそれは正常な事であらうと思つた。

しかし又翻つて考へるとその都會の凡てだつて一體何の意義があらう。

そして僕の煩悶、戦ひ、自己征服、それだつて全體何であらう。それに僕が果して自分に打克つだらうか、いや、僕は只自分の爲ばかり……いつも自分に負けてゐるぢやないか。

僕はいつも僕の心で輕蔑してゐる一般民衆と何の違ひもないではないか。

——いや、しかし、彼奴等とは違ふ。かう云ふ事を考へる事からして、僕は奴等とは違つてゐる。レザンチエフ、サアニン、ノキコフの輩は決して、斯様な事には氣も着かないであらう。

彼等は悲劇的な自己批判等と云ふ事からずつと遠い所にゐる。ニイチエの所謂、凱歌を奏する豚の群だ。

「ところで」と彼は又別な考へを考へ始めた。「僕とカルサキナは何うなんだらう」

——僕が彼女と結婚するか、一時彼女と關係をつける。いやそれは悪い事だ。では彼女を愛してゐるとして彼女は子供を生む。それを僕が可愛がる。否、否、そんな凡俗な事をどうして出来る。さうしたら自分に何等レザンチエフと撰ぶ所がないぢやないか。彼だつて、きつとその子を愛するだらうから。

それぢや彼と僕との相違は何處にある。生きて行つて身を犠牲にする。が一體誰に身を捧げるのだ。身を犠牲にしても惜しくない様な理想は抑も、何處にある？

いや生と云ふものからして、自分を犠牲にする程の價值のあるものではないのだ。しかしさうだとすると一體何の爲に生きて行くのだらう。

彼は始めて、かく迄強く生の意義を考へて見た。

と不圖、卓子の上の拳銃が、月光をうけてびか／＼光つてゐるのが彼の目を射た。

彼はちつと手に、それを取つて見た。彈丸が填めてあつた。ユリイはその銃口を額頭に當て、見た。冷たい鐵が熱した類に觸れるのが氣味よくもあり又同時に恐ろしくもあつた。彼の頭には又カルサキナの事が考へられた。

しかし又、無理にそんな事は自分の考へてる深遠な理想に比べると實に些細な事だと思ひ決めた。けれど此の無理に押しつけられた自然な感情は片隅に小さくなりながら、ユリイに生活に對する嫌惡と苦惱の情を愈々強からしめた。

「何故、實際決行するのは悪い事だ」と心を戦かせながら、どきまぎして銃口を額頭に當てた。そしてその企てゝゐる事に理由を與へる猶豫もなく曳鐵を引いた。

同時に彼の背筋を冷たいものが流れた。

彼はふら／＼と恐怖か火ら全身を戦き慄はした。

拳銃は發火しなかつたのである。

彼は鏡の前に立つた。そして舌を出しながら獨言した。

「僕の運命がさうでないのだ」

そして此れは彼を慰さめ、氣丈にした。彼は四圍を見廻した。しかし誰もそこには彼を見てゐるものはなかつた。そこでランプの所に戻つて來てそれを消した。すると愕いた事にもう外から

朝日が室内に射し込んでゐた。

彼は、びつくりして寢床の中に入つたが、いつまでも奇怪な幻影が彼を悩ました。

それから數日の間ユリイには又倦怠の日が續いた。

或る暗い陰氣な夜であつた。

ユリイは、ソロフアイチツクの家でやる今夜の會合にフォドイッツとサアニンの二人と連れ立つてその家を出た。

黒い木々の梢を雲は重たけに渦巻いては、次々に追ひつくらしをしてゐる様であつた。

四圍は夜の静けさにひっそりしてゐた。

フォンドイッツの荒い聲が又四圍の静けさを破つた。

「そりや、どうあらうとも、一般的人道教として基督教は、不滅の寶を人類の上に與へてゐるのです」

「そりや、只貴方の見解です、動物的本能に對する戰では、それは矢張り同様に不結果を見せてゐるのです、他のいろんな教へと同じく」

ユリイはフォンドイッツの背を惡さけに見ながら頑強に反對した。

「どんな不結果をですか、未來こそ基督教の世界だのに貴方は、まるで過去の話でもする様に、

そんな調子で……」

「基督教に未来があるもんですか、その全盛期でさへ墮落した偽善者の道具に過ぎなかつたので、これにもはや基督教といふ語さへ古腐い今、そんな奇蹟を期待するなんて、何と馬鹿な話です。歴史は強ひる事は出来ないのです。一度舞臺から落ちたものは決して二度と上る事はありません」

「基督教が舞臺から落ちたんですと」

「無論です、それが進化の法則ですよ。それとも貴方は人間が永久の法則を作る事が出来るのも主張しようとするんですか」とユリイは彼がこんな明白な事も判らない馬鹿だらうかと思つた。そして自分の僥倖感を感じると、此の男を説き伏せて了ふ愉快を思ひやつた。

「しかし基督教は何と云つても未来の根柢をなしてゐます。滅んだのでなくやがて實を結ぶべき地中の種です」

「誰がそんな事を云つてゐるんです。僕の云ふのは違ふですよ、僕は……」

「否、それはいけません。貴方はたつた今、云つたばかりぢやありませんか」とフォンドイツツは得意になつて凱歌を奏するやうに云つた。

「違ふんですよ……違ふといつたら……僕が云つたのはね……」ユリイはこんな馬鹿に一瞬でも

自分より優れてゐる等思はれて堪るものと癪癪を起して叫んだ。

「あゝ、然うかも知れない、で、貴方の云つた事を僕が正當に解し得なかつたのなら、お許し下さい」と彼は大様に笑つた。そしてユリイをやり込めたと言ふ風であつた。

ユリイはその氣持が分つて癪にさはつた。

「僕は基督教の偉い點を否定はしません」

「では貴方自身で矛盾してゐますわ」とフォドイッツは勝ち誇つた氣がした。そして、俺とはとても頭が違ふんだと思つた。

「否、矛盾してゐるのは貴方ですよ。僕はね前に云つた事を今も云ふんですがね、基督教はもうそこから何も新しいものを得る事が出来ないと言つてゐるのです」

「では貴方は基督教の善行爲の影響を否定しようといふんですか」

「それは僕は些とも否定はしません」

此の時迄、二人の後から黙々として歩んでゐたサアニンは微笑みながら突然口を入れた。「いや、僕は否定する」

その冷たい幾分揶揄氣味な言葉の調子は、ユリイに取つてはいつも手痛いものであつた。彼は黙り込んで了つた。

しかしフォンドイツはこの不意の横鎗に氣を苛つて叫んだ。

「何故です。」

「全く譯はない。たゞさうなんです」

「どうしてです。そんな事を云ふ以上何か根據がなくちやありませんまい」

「何の爲に……」

「何の爲ですつて、貴方は何を云ふんです」とフォンドイツは苛き込んだ。

「に僕は、そんな根據等擧げる必要は些ともない、只私の確信ですよ。と云つて貴方に迄確信させようなんて野心はこれんばかりも持合はしてゐませんか。又一體、それが何になりませう」「いや」とユリイは努めて云つた「そんな風に考へたら、何もかも一切の文學さへ役に立たないものになるぢやありませんか」

「そりや、違ひます。勿論僕の云ふ文學といふものは只口先ばかりで自分の偉さうな事を吹聴するやうな頭の不確かな連中を相手に、論議される性質のものぢやありませんがね、文學は全生命を形成するものですよ。若し文學を拒んだなら人生はその色を失つて了ふのでせう」

フォンドイツはユリイより後になりサアニンと並んだ、

「いやあ、大變興味のある事ですね。話して下さい」

「僕の考へは極く簡單です、貴方が強いてお望みなら説明させよう。僕の考へでは基督教は歴史上に一つの悲劇を演じたのです。不當な被征服者や被脅迫者の理性が覺めてその忍従から血を持つて、心身の解放を期せようとした時、此の温健な基督教が、未來に多くの善い事を約束して現はれて來たのです。此の世を未來の幸福の爲の犠牲だと説いたのです。」

頑丈でとても奴隷になりさうもない人間には基督教は懺悔の衣を着せ自分の幸福を自分で攔む事の出来る様な強者にはまだ誰も見事もない未來の爲に此の世の生活の意義があると云つたんです。その爲人生から敢爲の精神も、自由な熱情も不屈の意志も、皆その姿を消し、只残されたものは義務と例の馬鹿な未來の花々しい夢想とだけです。その爲被征服者の反抗は腑脱にされたのです。も一度それが恐ろしい勢を得る爲には、今後救世紀の極端な壓倒と束縛とが續かなければなりません。何といふ悲劇です。で耶蘇基督と云ふ名は、今後人類の永い間の呪となるでせう」

フォンドイツは妙に怯々した愕きに聲も慄へて云つた。

「だつて、そりや——」

ユリイの心にも妙な感じが起きた。彼は、サアニンに臆するものかと思ひながら一種重苦しい壓迫を感じた。そして此の感じは、長い間忘れてゐた自分の生れ付の記憶を又してもまご／＼と

見せ付けるものであつたので、何とも云へぬ不愉快な氣持になつた。

「でも若しも基督教が防ぎ止めなかつたとして全人類の上に来る血の供養を考へはしないのですか」

「ところが、それがね、最初の血は基督教のあのまやかしの下に殉教者達が流したのですよ。それからは同じく人間が殺され、牢に叩き込まれ、今でも矢張り血を流してゐるんですよ……悲しい事ですが、あらゆる改良は血と革命によらなければ得られないものですよ。それに、どうして人道とか博愛とか云ふものを考へねばならないでせう。あらゆる欺瞞も偽善もそこから生れて來るのです。僕はこんな馬鹿げた生活が二千年も續くより全世界の極端な太破綻を望みますね」

ユリイは彼の言葉の意味等は少しも考へる餘裕なくじつとサアニンの人格を凝視してゐた。彼はサアニンの強い調子が堪まらなく癪に障つた。それで突然意外な事を尋ねた。

「何故、貴方はまるで子供にでも云つて聞かせる様な調子で有仰るんです、それは實に不愉快です」彼の語は頑固で殆んど脅迫的であつた。

「これは僕の持前です」

「いや、穩當を缺いてゐる。僕は何故貴方が、いつもさう尊大ぶるか、さつぱり譯が分らない」

「多分、貴方より僕の方が偉いと確信してゐるからでせう」

ユリイの顔は蒼ざめて來た。

「まあ、御立腹なさるな、何ですか？　ぶしつけですつて？　だから面白くないんですよ、先刻からの貴方とフォンドイッツさんの議論だつてそこですよ。一語一語氣を腐らしてさ。若し貴方も有の儘を云ひ合ふ様でしたら、もうちつと、愉快ですよ」

ユリイは何とも答へなかつた。けれど、その不愉快は去つてサアニンの云ふ事が成程と思はれた。がどうしても自分が負けたとは思ひたくなかつた。

その中フォンドイッツは又改めて、

「だが、それでは餘り單純すぎはしませんか」

「貴方は何でも複雑で混亂したのがお好きですか」

フォンドイッツは黙つた。

三人はやがて荒れた、廣い邸の前に出た。

「こゝです」とフォンドイッツは小さな粗末な戸を開けた。

「まあ殺風景な所ですね」とサアニンが云つた。

「おゝもう大分集つてゐますよ」

成程通りすがりの寒越に幾つもの頭が黒く見えてゐた。

三人は石段を登つて行つた。一人の男が嬉しさうに急いで出迎へた。
フォンドイッツは直に二人を紹介した。

「ソロフアイチツクさんです。此方がサアニンさん」

「あゝ、お名前はもう幾度もうかゞつてゐます、私は大變に嬉しいんです」と彼はおづ／＼と嬉しさうにサアニンの手を放さなかつた。

そして、彼等が室内に這入るとサアニンはソロフアイチツクが年若い猶太人で黒眼の髪縮れた、瘦せ形の美しい顔で、柔和な微笑をいつも浮べてゐる男である事を見て取つた。

ユリイは直ぐにカルサキナに目をつけた。すると彼には凡ての物が急に愉快に見えて來た。

「さあ、皆揃はないんですけれど、ホシエンコさん貴方、發起人として開會の辭を述べなくちやあ」とゾボワアは眞面目だか擲捨半分だか分らない調子でかう云つた。

するとホシエンコウと呼ばれた一人の大學生が徐ろに聲を張り上げて開會の辭を述べ始めた。

其の間々に、幾度もゾボワアは野次つて半疊を入れた。丁度それはホシエンコウがソロフアイチツクに對して取つてゐる様に一段見下して皮肉に峻烈に言葉尻を取つた。

そこにソロフアイチツクの工場の職工が高等工業學校生徒に續いて入つて來た。

ソロフアイチツクはさも嬉しさうに二人の間をすり抜けて、

「皆様、これは……」と鹿爪らしく紹介しようとする、ホシエンコウの例によつての意地悪い一喝にあつて、おろ／＼した。

「まあ、お待ちなさい。今日は」

「ビスツオフ君にクドリヤキ君です。宜しく」と高等工業學校生徒が早速紹介した。

「だがニコライエフ君はどうして來ないんです」

「ニコライエフ君はへ／＼に酔つばらつてゐるんです」とクドリヤキイが窮屈さうに口を出した。

「ぢやあ、ニコライエフ君の方が、餘つ程氣が利いてら」と突然イワノフが叫んだ。

その時又、犬が吠えた。

「スルタン、叱ッ」とソロフアイチツクは石段の上から鋭く叱つた。

そこへノキコフが嬉しさうに入つて來た。

「さあ始めませう」と高等工業生が不平さうに云つた。

「そこで諸君、我々是我々の世界觀の擴大を願つてゐます、そしてそれは組織的系統的な讀書によつてなされると思ひます、先づ問題は今、我々が何を讀むべきかと云ふにあるのです。誰方が

その欄目を鑑識なさる方ではありませんか」とホシエンコウは四圍を見廻した。
すると一冊のノートを手にしてシアヴロフが立上つた。

「僕の意見を申します。我々の讀書法を二つに分けて一つは發展的に觀察した生活に關して即ち自然科学に根柢を置く各種の書籍を讀み、もう一つは個々の生活中の出來事其物の知識に關するもの、即ち文藝の研究によつて得らるゝもの、此の二つの方法を執りたいのです」

「まあ、随分まだるつこいお話しですね」とゾボワはぢつとしてゐられなくて面白さうに云つた。

「僕は綱目を拵へてゐますけれど一々講釋する事はお退屈でせうから、唯かう云つたもの讀んだらどうでせうと云ふだけについて、申上げます。先づエンゲルスの「家族の起原」デアウインの物、それから文學としてはトルストイ、チエホフ、イブセン、クヌウウト、ハムズン」

「だつてもうさうしたものは疾くに讀んで了つてゐるんですもの」とカルサキナは驚いて言つた。
するとユリイはそれを引取つて。

「無論です、シアヴロフは日曜學校と間違へてゐるのです、それにトルストイとハムズンの組合せは何て變擬でせう」

シアヴロフは、自分の説を辯護し反駁した。

「否、私はそれに賛成する事は出來ません」

ユリイはカルサキナの視線を感じて快かつた。
而して彼は自分の觀察の要點を説き初めた。

するとホシエンコウは何となく此の會合の創始者としての第一の役を彼に奪はれてもしたやうな不快を覺えて、誰よりも教育もあり才分も優れてゐると云ふ自信の手前ユリイの缺點ばかり探して意地悪く突つかまつて行つた。

議論はいつ果つる様子もなかつた。皆がやゝ、思ひ思ひに口を出して喋り合つた。

カルサキナは窓の扉を開けた。そして軟かい風に吹かれながら自分の戀してゐる男の聲に聞き入つた。そして自分自身を弄んでゐると彼女は甚く愉快になつた。

室内の喧騒は一層甚くなつて行つた。誰も彼も、自分を一番教養があり識見があると思つて他を教へ諭さうとしてゐる事が益々明になつて行つた。

「そんな方面から事を論ずるなら我々は思想の原始に溯らなくちやならない」
ユリイは躍氣となつた。

「では貴方は、何を讀まねばならぬといふんです」とホシエンコウは嘲つた。

「僕の考へによれば、孔子、福音書、傳導書……」

ホシエンコウは自分が、まだ此んな本の一冊も読んでゐない事は考へずに、彼の云ふのを蔑んだ

「讚美歌に高僧傳……これはどうです」と高等工業學校生は訊つた。

「お寺見たいですね」と誰か、隅の方から、くすくす笑つた。

ユリイは火の様に赤くなつた。

「僕は冗談ぢやないですよ、我々が人生の研究に立入るには、或る確かな世界觀を組み立て、自分と他との關係を明かにしようとするのではないですが、さうした場合、人類の最良の代表者であつた人々の偉業を研究するのは當然ぢやないでせうか」

皆は又大聲に烈しく論争した。

ソロフアイチツクは論争の始まるや黙つて聞いてゐたが、終には段々と辛らさうな悲しさうな表情が浮んで來た。

此時迄黙つてゐたサアニンはその紛糾した論争が喧しくなると、退屈さうに云つた。

「どうです。皆さん段々貴方がたの話は退屈になつて來ますね」

「ほんたうよ、退屈で仕様が有りやしない」とゾボリアも直ぐ應じた。

「利いた風な空囀りは聞くにも骨が折れる」

イワノフは吐き出す様にさう云つた。

「何故です？」高等學校生徒は憤つて喰つてかゝつた。

サアニンはそれには答へもせずユリイに尋ねた。

「貴方は實際、何かの本で或る確かな世界觀を握めると信じてゐるんですか」

「え、勿論です」

「ところが、それは違つてゐますよ、若しさうだつたら、全人類を直ぐ一定の型にはめて了ふ事も出来るでせう、一つの定つた本を讀ましさへしたら…… だけど世界觀と云ふものは、生活それ自身から形作られるものなんですよ、世界觀は理論ぢやないんです、

各個人の性格の調子ですよ、そしてこの調子は人間が生きてゐる間いつも變るものです」

だからどんなに貴方が骨折つても、そんな不易の世界觀なんてありはしないんです」

「どうしてですつて。そりや當然ぢやありませんか。若し一定の完成された世界觀が可能なら我々の思考は全く動きのとれぬものになつて了ふぢやありませんか。それは死の状態ですよ、だから我々が生きてゐる間そんな事は全然あり得ないのです。——だが全體何の爲に、こんな事を論議する必要があらう」

と自分の乘氣になつてゐた事に愕いて、

「まあ、貴方は貴方の勝手に考ふるがいゝんです、だが唯一つお尋ねしたいのは傳導書からマルクス迄澤山の本を読んでいらつしやる貴方が又どうしてまだ一つの世界観をも捉め得ないのでせう」

「僕が、一つの世界観も有つてゐないんですつて？」とユリイは甚く彼の言葉に傷けられて「お氣の毒ですが僕は自分の世界観は、確かに有つてゐますよ」

「さうですか。ぢやあ、何もその上附け加へなくつてもいゝぢやありませんか——」

カルサキナはその筋道の立つた議論に驚嘆した。
そして二人を引き比べて見た。何だか二人は彼女に聞かせようとして云ひ合つてゐる様に彼女に思へた。

「ですからね、そんなに自分の意見を認めさせよう、誰かに説伏せられはしないかとかそんな事ばかり氣にしてゐるたんぢや、全く正直な所つまりませんよ、何らさう深い必要で集つたんではないんですからね」

「否、一寸お待ち下さい」とホシエンコウは叫んだ。

「まあ、お止しなさい。貴方は定めし立派な御意見もお有ちでせうし、澤山の本もお読みでせうよ、ですけど、今皆が貴方の通りに考へないからつて憤つてゐるぢやありませんか。それに、ま

たソロフアイチツクさんが何も少しも貴方に損害も加へないのに、今迄再三吐り飛ばしましたね——」

ホシエンコウは何か、まだ一度も聞かなかつた重大な事を聞いた様な氣がして黙つた。

そして暫らくすると眞赤になつて叫んだ。

「貴方は餘り勝手な事ばかり仰言しやる」

「なあに、貴方より餘程勝手が少ない。考へても御覽なさい。貴方の聞き辛い言葉は僕の面白がつて云ふ言葉より、もつと亂暴で、滅茶苦茶ですよ」

「貴方の云ふ事は分らない」

「それは、僕の知つた事ぢやない」

「何ですと？」

サアニンは帽子を取つて「僕はお暇します、全く面白くもない」と云つて後をも見ずにさつさと出て行つた。

「さうだ、そして麥酒も出ないや」イワノフも後からつゞいた。

ゾボワアもカルサキナも立上つた、そして「此會は花も咲かず散つて了つた」と呟いた。

ソロフアイチツクは痛ましさに、その顔は泣き出しさうになつてゐた。

サアニンはその辛さうな顔を見て云つた。

「あ、ソロフアイチツクさん。僕は個人として又、貴方をお訪ねしますよ」
「え、どうぞ、ね」と彼は嬉しさうに手を振つた。

やがて皆が歸つて了ふとソロフアイチツクはそのまゝ長い間石段の上に立つてゐた。そして星もない、空を、それから物々しい雲の行き交ひを眺めてゐると此の無限の真只中で自分が非常に小さいものである事を沁々痛感した。

人のいゝ先刻迄の彼は、どこかに去つて了つて、何となく悲しげに眞面目な彼が残つてゐた。彼は徐かに室に歸り、その取散らかつた室内を掃いて、又ことごとく外に出て行つた。そして桶を置いて大小舎の傍にしやがんだ。

犬は嬉しさうに鼻を鳴らしてその桶の中のものを嚼る音を立てた。

ソロフアイチツクは微笑みながら味氣なく暗を見つめた。

僕は、今夜こそ、人間はどんなに生き、どんなに考へねばならぬか、あの人達に聞けると思つてゐたのに……。

僕はどうしたらいいのだらう。

あの人達はまあ、皆何んて偉い人達だらう。

いろいろな事をよくも知つたものだなあ。——それなのに僕は……

スルタンは人懐つこく咽を鳴らした。

「スルタンお食りよ——」

スルタンは懶るさうに、溜息を吐いた。

ソロフアイチツクは、人生に對して全く見當がつかなくかつた。かうして生きて行けるものだらうか。それとも行けないのだらうか？

彼の前の暗黒の中を人間の群が黙々と通つた。それは、始めもなく終りもない絲が、——又光明もなく、意義もない、救ひもなく望みもない苦惱の鎖の幻が現はれた——。

スルタンは空桶の中に首を突込んで、それを轉がし、じやれてゐた。

鎖がちやらく鳴つた。

「もう、食べちやつたのか、うむ、よし、よし」と彼はスルタンの背を撫で、やつて何とも云へぬ親しさを覺えた。

聽て又あの黒い、大旗の様な雲の漲つた空の下を彼は家へと歩いて行つた。そして部屋に這入ると、云ふに云はれぬ頼りない氣持になつて、凡ての物を自分は失つて了ひ、今はもう全く孤獨の中にゐると云ふ哀しみをひし／＼と感じた。

彼は投げる様に身を、その卓子に寄せかけて、只獨り潜々と泣き出した。

七

マリアイワノウナは或日、サルウチンから娘に贈つた手紙が、女中の不注意で、臺所の卓子の上に置き忘れてあるのを手に取つて見た。

彼女はその手紙で今迄、純潔で、まだ子供であるとばかり思つてゐた娘の上に、厭な汚はじい影が落ちてゐるのに愕き悲しんだ。

その手紙にはあの難かしい事も、まだどうにもなると云ふ事を仄めかして、もう一度逢ひたいと願つてあつた。

彼女は様々に考へては途方に暮れた。自分の若かつた頃の事や、その後の事を考へてゐると、急にもうリダが快樂と悲哀や、人の渦巻の中に、落ち込んでゐてどうする事も出来なくなつてゐるに違ひないと思つて甚く愕いた。

しかしその愕は直ぐと、憤怒に變つて行つた。

そしてリダを引張つて来て、その首筋をつかんで、地面にたゞきつけたかつた。

「何て、忌々しい淫奔娘だらう」とマリアイワノウナはさう呟やくと全くがつかりして了つた。

しかし彼女には凡ての事が、まだどうする事も出来ない羽目になつてゐないらしいのがまだしもだと思つて幾分氣が落着いた。

それから又幾度も手紙を読み返して見た。

しかし、それからはその上の事は何も掴めなかつたので、彼女は辛さうに顔を歪めた。

彼女はどうしたらいいだらうと考へまどつた。

そしてサアニンの所へ行つたら何かいゝ考へでも出来るか知れないと思つて、その部屋をそつとのぞいてみた。

サアニンは机にかゝつて何か書いてゐた。母に取つてはその息子が机にかゝつて眞面目に仕事をしてゐる事は珍らしい事なので、娘の事で心痛はしてゐながら一寸感興を覺えた。

「お前、何を書いてゐるの」

「手紙ですよ」

サアニンはさう答へて穏やかに微笑んだ。

「誰に？」

「知人の新聞記者にですよ」

「何故？」

「僕も、やつて見ようと思つてね、多分その男のゐる編輯局へ這入る事になるでせう」

「さう。お前ほんとに新聞に筆を取らうと思つてゐるのかい」

「えゝ何でもやりますよ」

「だつて、何故此家にあるて悪いのです」

「もう飽きましたよ、すつかりね」

マリアイワノウナは彼女自身が何となく悪口を云はれた様な気がして息子の顔を見やつた。彼女は心配の上に又心配が來たと思ふと何とも云へない寂しい気がした。リダの事がなかつたらサアニンのそのやり方に對して小言も云つたであらうが、彼女は唯そのハンカチを皺だらけにして悲しさうな調子で、

「さうだ一人は狼見たいに家を飛び出さうとするし、一人は——」と捨鉢のやうに叫んだ。

サアニンは何か珍らしいものでも見たかの様に好奇に尋ねた。

「貴女はどこからその事を知つたのです。お母さん」

「妾だつて、そりや盲目ぢやないからね」と云つたものゝ彼女は明かに、その娘宛の手紙を、開封した事を恥ぢて赤くなつて、その調子はしどろもどろであつた。

「お母さん貴女は何も御存じぢやありませんか。實はリダ自身で云ふだらうと思つてゐましたけ

れども……、僕はお母さんにリダの結婚の祝を述べ様と思つてゐるんですよ」

「えゝ？」

「リダが結婚するんですよ」

「誰と……？」

「ノキコフ君とですよ、無論」

「だつて、あの、彼の……彼は？」

「サルウチンですか？ あんな奴何でもありませんよ。今に罰でも當りませうよ。そんな餘計な事心配する必要がありませんものか」

「いや、一寸ね、何ね少し分らないから……」

老母はひどく狼狽へて云ひ出した。

「何が分らない事がありますものか……、リダは前に一人の男を戀してゐましたが、今は別な男を戀してゐるだけです。明日は又別な戀をするかも知れません。神様も御承知ですよ。ねさうでせう」

「お前何を云ふんだね……」

「ぢやあ、お母さん、貴女は貴女の長い生涯に、一度つきりしか戀しなかつたんですか？」

「何ですつて？ そんな事を母に云ふもんぢやありません」

「誰が」

「……誰がですつて？」

「誰が云つちやいけないです」と彼は眉をあげて母を心から見やつた。

「誰だつても、そんな事は云ひません」

「所が僕は云ふんです。まあお母さん、貴女も若い時はきつと思ふ通りの事をなすつたでせうね、だからリダにはあれを苦しめる様な事をなさつてはいけませんよ」と彼は機嫌よくさう云ふと又静かに筆を執つた。

マリアイワノウナは眼を大きく見開いた。そして若い時の回想をなるべく避けて、一たい此子はどうして母に對して、こんな事を云ふのだらうと、それにばかり考をかぢりつかせてゐた。

しかしその時サアニンが、

「が、まあ、萬事御心配なさらなくつてもいゝんですよ。サルウチンが來たら追拂つて下さい。でないと、彼奴どんな詰らない眞似をし出かすか分かりませんから、それにサアシャ君を大事にする點から云つてもね」と云つたので彼女の心は急に和んで來た。

「さうとも、お前の云ふ通りだよ」

此の時下婢のヅウニアが、サミウチンの來た事を告げた。

「それに、もう一人知らない方がいらつしやいます」

「追つ拂つちまへ」とサアニンが靜かに云つた。

「でも、旦那様、そんな事が……」とヅウニアはくすくす笑つた。

「構はないよ。あんな奴に用なんぞありやしない。忌々しい」

ヅウニアは笑ひ笑ひ出て行つた。

マリアイワノウナは立上つた。彼女の様子は全く變つて仕舞つた。

氣が輕くなつた様であつた。

サアニンは今訪問して來た連中が、どんな目に逢ふか、此の經緯（いきさつ）がどんな風に免をつけるかと云ふ事に、新しい好奇心を動かして母の後について行つた。

サルウチンは強ひて平氣を裝つてゐたが、平素の様に快活ではなかつた。どこかおづくして狡い落着を見せてゐた。

「マリアのお母さん、僕の親友、パウロクヲウイツチヲロシン君です。どうぞ、よろしく」

ヲロシンは一寸身を屈めた。そして兩人は一寸の間、眼と眼で狡るさうに何か云ひ合つた。

二人には其時さつきヲロシンが訪れて來て、馬車で此家に来る迄の事が思ひ出された。

享樂に苦しみ切つたヲロシンと、その意を迎へてのサルウチンの話は、只獸慾を唆るやうな頭の心の痛む様な事柄ばかりであつた。

二人は話してゐる中に、その眼は卑しく輝き、口は神經的に痙攣つて露骨な女の持つ品格を棄てた臆面もない感能をとろかす様な重苦しい挑發の中に、その身を投げ込んだ。

二人の間には不健康な空氣が相呼應し、その惡臭を放つ汗ばんだ身體は、まるで動物の様にのたうち廻つた。

サルウチンは此の無恥な、ペテルブルグの紳士に對して、何か知ら威張つてやらうとして、自分の女が如何に別嬪であり、その身體がいゝかと云ふ事を話し出した。二人の間では終始リダは淫賣婦見たいに眞裸にされ、恥かしめられた。そして呼吸すんだ二人にはどうしてもその場合、リダを見なければ、どうにも氣が濟まなくなつて了つた。それから貸馬車を雇はして此家へ來たのである。

「それはどうも……………」

サルウチンの紹介に對して答へたマリアイワノウナの聲は水のように冷たかつた。

若しやと危ぶみながら訪ねて來たサルウチンにはもう萬事が直ぐ飲み込めた。或ひは大丈夫と思つてゐた最後の頼みも、すつかり消え去つて了つた。

これは來ない方が優だつた。一體あの此の道にかけては全く及びさうもない、ヲロシンに此方から調子に乗つて、つきあひをして凡てのいきさつをすつかり忘れて了つてゐたとは、何とした愚かな事であつたらう。

しかし何と云つても、一度は何もかも、自分に任したリダだもの、それに今は自分の子の母となつてゐるリダだもの、此處に來ない筈はなからう。したが自分は一體彼女に何と云つたらいいだらう。彼女の顔を見て自分はどんな顔をしたらいゝだらう。と思ふと彼の心は臆病に慄へ上つた。

しかしこの焦燥不安を決してヲロシンに知らしてはならなかつた。それだけに彼には、悪い所に來た、此の家は來る處ではなかつたといふ後悔が強く彼の意識に上つて來た。

「貴方は長く此地へいらつしやるんですか」

マリアイワノウナの聲は不親切であつた。

「否」彼はこの田舎婆がと輕蔑した。

そして巧者な手つきで葉巻を口に挟んだ。

「ベチエにゐらしつた後では、此地は退屈で仕方がないでせう」

「どう致しまして。此地は族長制の風があつて、なかくいゝ所ですよ」

「近郊にはいゝ所もありますよ」

「え一度と出かけ様と思つてゐます」

チロシンはもう此の老婆との會話は退屈になつた。

そして再三、意味ありけな眼をしてサルウヂンを見やつた。彼はもはやチロシンが今後今迄通り自分を見て呉れないぢやないかと思ふと、凡ての臆病を押しつけて思ひ切つて尋ねた。

「リヂャベトロウナさんは何處にゐますか」

マリアイワノウナは愕いて敵意を有つて彼を見つめた。

——結婚する氣もないお前が、一體リヂに何の用があるのかねとその眼は云つてゐた。

「さあ、多分自分の部屋でせうよ。私知りませんがね」と彼女の答は冷やかであつた。

チロシンは又もやサルウヂンを見やつた。

その意味は興味ありけに一隅から、二人を觀察してゐるサアニンにもよく讀めた。

「そのリドカはちつとも出やあしないぢやないか。何とか早く引き出す方法はないかね、それに此の婆はほんとに面白くない奴だな」あとその眼は云つてゐた。

サルウヂンは、てれ隠しに鬚をひねつた、

「私はお嬢様について、色々艶聞を聴きましたが——一つ御紹介下されば仕合せだと思つてゐる

んですが——」とチロシンが手を揉みながら身體を乗り出すのを見て、マリアイワノウナはサルウヂンの方へ睨めつける様に険しい眼をした。

「此の腐つた菌の様な顔をする圖々しい奴にサルウヂン奴が何を喋つたんだらう。そして此奴は又娘をどうせうと云ふんだらう。さあ一體どうする氣なんだ。——」

それを思ふと彼女は堪らなかつた。思つた通りリヂは墮落してゐるのだなあと思ふと、彼女は愕きと怖れに氣も力も抜けて了つて、ぐつたり其處へ坐り込んだ。

此の時サアニンは何てうるさい奴等だらう早く追ひ出してやらないと、又どんな馬鹿を見るかも分らないと思つて立上つた。

そして不意に穩かに尋ねた。

「君は、もう出立なさるといふ事を聞いてゐたが——」

「え、……、その心算ですよ。少し保養がてら——少しは新らしい空氣を吸はないと」

サルウヂンはどうしてこんないゝ抜道があるのに先刻から氣がつかかなかつたらうと、自分ながら呆れて了つた。

さうだ一二ヶ月賜暇を取らう——と彼の頭を光物の様に一つの考へが閃いた。

サアニンは朗らかに打笑つた。

彼には皆が皆瞞し合つてゐて、それを又お互に知つてゐながら、それで尙、街ひつゞけて行く一本調子が可笑しくつて堪らなくなつたのである。

「ふん、では、随分達者で、去せ給へ」と彼は平気で云つた。

すると、その言葉はそこにゐる三人に三様に作用して、皆の様子がすっかり變つて來た。

マリアイワノウナは顔を眞蒼にし、チロシンは臆病な栗鼠見たいに眼を輝やかせ、そして我がサルウヂンは、緩く、曖昧な、耳を疑ふ様な調子で椅子から立上つた。そして自分の中で、その言葉を繰り返して見て、やがてさつと顔色を變へた。

「何ですと、何と云つた今貴方は」

部屋の中は何となく殺氣だつた。

チロシンは怯づ怯づした態度で帽子を取らうとした。彼の半分開いた口からは、歎息の様な音が洩れて出た。

サアニンは愉快さうに二人を見下して、何にも云はずに黙つてサルウヂンの帽子を取つて渡した。

「貴方の云ふ事は僕には何の事だか、些とも分らない」とサルウヂンは又叫んだ。

自分は眞暗い穴の中に落ち込んだ様に感じた。

「なあに、よく分つてるさ。所がね、貴方は全く此の家には必要のないものなんですよ。一分間でも出て失せる事が早ければ、それだけ我々の愉快も多いんです」

サルウヂンの硬くなつた頭を、喧嘩だと云ふ閃きが、貫き走つた。彼は一步前へ進み寄つた。その顔は蒼くなつて呼吸は切れさうにはづんでゐた。

「うむ……、然うですか。よしつ」と彼は呻るやうにわめいた。

「だからさ、さつさと失せるさ」

サアニンの聲には鐵の様な強い威嚇が籠つてゐたので、サルウヂンは我知らず身を退いた。

「どうした事だらう」とチロシンは獨りで呟いて戸口の方へ急いだ。

此の時、冷たい態度で闖を入つて來たリダを見て、サアニンの心は、又好奇心で燃え上り、面白がつて妹を見た。そして——これはどうしたんだらうと思つた。

リダは、初め二人が訪ねて來たと知つた時非常な屈辱に歎息き、又もや自殺しようとして、河の方へ走つて行つた。

じかし爽やかに、明るい庭や、快よい水や、鮮やかな草花、さては蒼々とした空やを眺めてゐると、彼女の思考は全く變つて來た。

——何で死ぬ必要があらう。彼が訪ねて來たつて、それは私の關つた事ぢやない。そりや以前

には戀人だつたわ。でも今ではもう別れて了つてるんだもの——かう思ひ返して彼女は又家へ引返した。

「私こゝよ、ネクトルセルゲイエキツチさん、まあ帽子を御放しなさいよ」

彼女のその言葉は嚇しつける様だが、處女らしい可愛さがあつて、その爲男達の荒くれた感情はひとりでに軟かになつて行つた。

サルウヂンは憐を乞ふ様に吃りながら、

「ね、リヂャベトロヅナさん、考へてみて下さい」

その聲を聞くと急にリダの顔には優しい彼を傷む様な表情が一寸通り過ぎた。そして彼を見ると俄に堪へられない哀しみに襲はれた。しかし、それは一瞬間の状態で、彼女の心には直ぐ復讐に似た或る願が起つて來た。

彼女は、自分が如何に彼に辱しめられたか、そしてそれに惱んだか。しかし今はその苦しみにも惱みにも打勝つて、如何に強く清く自分を持堪へ得たか。そして彼の損失が如何に大きいかをサルウヂンに見せてやらねばならぬと云ふ願を心に起した。

彼女はいくらか芝居じみた眼付をして勿體らしく云つた。

「私は別に、何も考へて見る必要はありません」

彼女は、髪は流行の捲髪でなくて簡單に束ね、不斷着のまゝでゐるが、それが又變つて佳い姿に見えた。

チロシンは、その不斷着にやつと包まれてゐる肉體の感で自分の身も心も妙な工合になつて行くのを覺えた。彼は、その乾いた唇を濕し、兩眼を細くして、全身は本能的な恍惚に入つてゐる様であつた。

リダは鷹揚にサルウヂンを見て云つた。

「どうか、紹介して下さいな」

「パウルリチキツチチロシンさんです」とサルウヂンは呟いた。

彼はチロシンに對して、これが自分の戀人であつたと誇りを覺えたが、それと同時に、取り返しのつかない損失をしたといふ意識は又どうする事も出来なく彼の心を重くした。

リダは靜かに母に對つて注意した。

「お母さん、外に誰か貴方に話し度いと云つて來てゐますよ」

「まあ、それは後でいゝよ」

サルウヂンは直ぐ引受けて云つた。

「その、僕等も、何です……………」

リダは彼の事等には格別、氣にも留めてゐないらし風で、一層母に促んだ。
「だつて、外にもう随分待つてゐますつてば……」

彼女の聲はおろ／＼してゐた。
母は急いで立上つた。

サルウチンとチロシンは、もうどうする事も出来ないかの様に氣遣はしさうに、互に顔を見合した。そして庭にと云つて先に立つて行くリダの後から曳きずられる様について行つた。

チロシンは全く恍惚として彼女だけが、彼の全世界であるかの様であつた。

リダはやがて菩提樹の下の椅子に掛けて、小さい兩足を投げ出し妖冶カマメかしく、嬌態を作つた。

それは全く美しく、艶つほくチロシンの享樂を追ふ神經をすつかり酔ひ痴らして了つた。

「あの、パウリリキツチさん、こんな淺鄙な所が、貴方にどんな印象を與へて？」

「まあ、云へば林中の中に偶然にも美しい花を見つけた様な心持ですね」

それから彼等の間には深みのない、薄つぺらな雜談が始まつた。チロシンは指を頻りに揉み合した。

サルウチンは自棄に煙草を續け様に幾本も吹かした。

サアニンは少し離れて、彼等の顔や、手足の動き方や、聲の響や震へ方等を仔細に觀察して、

彼等の口で云ふ言葉でなく、心で話し合つてる會話をちつと聞いてゐた。

リダはちつと辛抱した。

チロシンは飽足らず彼女の匂を、美を、惱ましさうに吸つた。

サルウチンの心は憎悪で張り裂けさうであつた。チロシンをも、サアニンをも、リダをも亦ありとあらゆる全世界をも憎んだ。出て行つて了はうを思ひながら、それも出来かねた。出来る事ならリダを自分の情婦として皆に見せつけてやり度かつた。

「では、此地が、ほんたうに貴方のお氣に入つて？ ベテルブルグをお出になつた事を後悔していらつしやるでせう」

「どうじて、どうして、全く正反對ですよ」と云ひながら、彼はリダの豊かな胸を見つめた。「あんな事許り、御世辭はぬきよ」

彼女は非常な恥づかしさを感じながら、貪る様に自分を見つめてゐるチロシンの眼の前に戀と一層大膽に、臆面もなくその胸を、張り出した。

そして心の中に獨言ちた。

——サルウチン、お前は私を不幸な、蹂み躪られた女だと思つてゐるだらうけれど、ほれ御覽、まるで反對だよ、私の此の幸福さうな胸を、此の輝いた顔を、私は私のした事等ちつとも恥ぢら

やるないよ……」

サルウチンは不愉快ながらも、一寸口を入れた。

「なあに、リヂャベトロウナさん、それが御世辭なもんですか」

「何とか仰言つたね」と冷やかに云つて、今度はすっかり調子を變へてチロシンに云つた。

「どうか、あちらの生活振りをお話し下さいな。ね、此地では人は生きてるんでなく、只時間を消してただけですよ」

チロシンはサルウチンを一寸窺み見て笑つた。

サルウチンは、それを見るときも此男は、自分がリダの戀人であつたといふ事等はてんで信じてるはしないだらうと思つた。

「彼方の生活振りですつて？ おや、おや、……」彼は巧みに丁度馬鹿者が囁つてゐる様に、輕口に喋つた。そしてリダの顔、腰、さては彼の慾情の對稱であるもの迄、着物の上から探り、嗅ぎ求めた。

「リヂャベトロウナさん、彼地の生活といふものは、そりや全く退屈至極なものですよ、……ええほんたうに。まあ僕は今日迄人生と云ふものは、何處で暮したつてつまらないものと思つてゐましたがね——全體人生に意義のあるのは一つ女性の美があるからなんです。人生を救へるのは

この美だけです。それにどうせう。大都會の女どもと來たら……そりや全くお話しになりませんよ。皆同じ型の中にはまり込んで了つて、殺風景で、僕等の美の尊敬に値する様な女は、一人も見當りませんよ。どうしても、そんな女は深い田舎へ入り込まなければ得られませんよ。田舎の生活と云ふものはまだ處女のように清く美しく、そこだけにしか清い綺麗な花は咲かないのですよ」

「でもね、それを摘み取るだけの資格を有つた男のゐない田舎に、どうしてもそんな花が咲くんでせう。ね」

菩提樹のかけで皆を靜かに觀察してゐたサアニンは「成程」と面白がつて肯いた。

「それを云ふ爲だつたのだなあ……」

「と、被仰ると？」

「でもさうぢやないの。誰がその花を一體摘むのでせう。私共が本當に男らしいとして尊敬し得る男が何處にゐるでせう」

「さうですね」

先刻からリダに對するチロシンの怪しい心ときめきを察して少なからず嫉妬の念に悩まされてゐたサルウチンは此時、彼女の言葉に隠れた影に對して思はず叫んだ。

「それはリヂャベトロナさん。僕等に對して餘り酷すぎますよ」
 リダは笑つた、復讐と羞恥に燃えてゐる眼で彼の顔を穴の明く程見返した。
 テロシンの話はその間も絶え間なく續いた。

美しい彫刻的な肉體の女は裸かで往來を歩いて、決して人に卑猥な情慾を挑發させるものでないと、惱ましさうに説明した。

リダは聲高に笑つた。けれど其の笑は彼女に取つては屈辱と悲哀に對する新しい涙であつた。
 サルウチンは嫉妬と憤怒の情に最早や堪へ切れなくなつた。リダのその聲高い笑も、眼つきもみんなそのまゝ自分の頬に受くる苦々しい打擲の様に思へた。そしてリダに對する腹立たしさとテロシンに對する激しい嫉ましさ、それから、取り返しのつかぬ損失をしたと云ふ感じとに、すつかり疲れて了つて、囁れた聲で叫んだ。

「お暇ませう」

「もう、お歸り」とリダは何氣なくテロシンに尋ねた。

「仕方ありません——并クトルセルゲイエキツチさんは氣分が悪いと見えます」

彼の調子には、明かにサルウチンに對する嘲りが含まれてゐた。

二人は暇を告げた。

サルウチンは少し身を屈めてリダに握手を求めた時不意に「さよなら」と囁いてその手を直ぐにつツばなした。

それは、かつて彼女に對して一度も感じた事のない愛と憎しみの激しい感情が、すーつと彼の心を通り過ぎた爲であつた。

その時リダは此の言葉を聞くと急に或る希望、それは今迄の二人の快樂への感謝だけで、立派に氣を悪くする事なく別れようと云ふ希望の念に強はれたが又彼女はそれを抑へると共に冷やかに聲高に答へた。

「ではお達者で、旅行なさいまし、バウルリテキツチさん。御忘れなさない様にね」

出て行くテロシンの態とらしい聲がサアニンとリダの耳に入つた。

「全く、彼女はセクト酒の様に人を酔はせるなあ……」

彼等の聲音が聞えなくなると、リダの容子は今迄とは全く一變した。彼女は椅子に凭つて身を慄はし、哀つほく泣いた。

サアニンは、それを見て、ロシアの民謡に出て來る物思はしけなロシア少女の傷ましい光景を思ひ浮べた。

そしてこの味気なささうなリダに對して、水の様な同情が流れて來た。

「どうしたの。泣くのはお止しよ」
リダは両手で顔を掩つた。

「まあ、此の世つて何て恐ろしいものでせうね……」

「何だね、この位の事……」

「ほんとにいゝ人つて一人もゐないものでせうかね」とリダの調子は訴へる様に響いた。

「無論ゐない。それが人生なんだ。誰にだつて善い事等期待せない方がいゝよ。さうすると人がどんな悪をお前にしようよ、それは決してお前の悲しみにはならないから——」

「では、貴方は誰にも善を期待しない？」

「無論さ。誰にするものか。僕は僕だけで生きてゐるんだ」

彼女は驚きの眼を睥つた。そしてその表情は次第に兄に對して、何て堂々とした人だらうと云ふ風に尊敬の情に變つて行つた。

暑い日も次第に暮れかゝつて來た。

菩提樹の下からは、涼風が靜かに涌いて二人の圍りを吹いた。

サアニンは靜かに家に這入つて行つた。

夕闇は、その部屋の窓から軟かに流れ込んだ。

彼は自分の好きなチエホフの或る小説を最後の日光で讀んでゐた。

人々に圍まれ、香の煙に包まれ、黄金の飾のついた法衣をまとひ、その手には寶玉の輝やく十字架を持ち、諸々の人の敬愛の祈禱の裡に、老僧は今や死ぬるのである——。

彼は熱心に本を讀み、考へ味つた。

サアニンの表情は次第に悲しさうになつて行つた。

人生に横はる暗い悲哀、それから一般の民衆の無神經と粗野とを思ふと自分だけが獨り遠く彼等から離れてゐると思つた。

若しも自分が、此の老僧と知り合つてゐたら、此の人もかほど寂しくはなかつたらうにと云ふ様に考へた。

又リダは獨り庭に残つてサルウヂンの事を思ひ、ノキコフの事を思つた。今彼女の心にはサルウヂンに對する憎惡の氣持は消えて了つてゐた。しかしノキコフの事を考へ出すと彼女の心からは、自然にサルウヂン自身さへもはや姿を消して了つた。

彼女は今ノキコフと幸福にならうと云ふ氣で一杯であつた。

夕風は靜かに河の方から吹いて來て、彼女の頬を撫でた。

リダは足取も軽く家の方へと足を運んだ。

誰もゐなくなつた庭には暫らく薄明が漂つてゐたが、暮れ出すと急に、急いで四圍が暗くなつて、空には新しい星が、明るく瞬き出した。

その翌日も空はからりと晴れて太陽は強く照り輝いた。

サアニンは庭に下りて、小路の草を引いてゐた。

そこにヅウニアが慌てゝ、怖ろしさに、馬鹿々々しく大きな眼を開いて走つて来た。

「旦那様 士官さん達が貴方に話し度い事があるからつて……」

サアニンは少しも愕かなかつた。

サルウヂンが決闘を申し込んで来る事は既に豫期してゐた。

けれどヅウニアは、何か恐ろしい事を想像するかして周章へた同情の眼で、彼の顔を見つめた。

彼は平然として家の方へ歩いて行つた。

「……馬鹿な青二才共だ、全く阿呆な奴等だなあ」と彼は忌々しさうにぺつと唾を吐いた。

彼が家へ這入るとリダが恐怖で緊張して蒼くなつて出て来た。

彼女の眼には悲哀の色が現はれて、何となく自分が此の世で一番不幸で罪深いものと云つてゐる様であつた。

母は途方に暮れて、氣遣はしけな、訴へるやうな眼つきでサアニンを見やつた。

二人共黙つてゐた。

サアニンはにっこり微笑んで二人の前を通つて廣間の方へ歩いた。

そこへはタナロウフとフォンドイッツが椅子に凭つてゐた。二人共固くなつて、その足は丁と揃へて窮屈さうであつた。

サアニンが這入ると二人は立上つて、どんな風に應對しようかと迷つてゐるらしかつた。

「やあ、今日は、皆さん」とサアニンは快活に挨拶して手を伸べた。

フォンドイッツは明らかに度を失つてゐる様であつた。

しかしサアニンは特別に丁寧な様子をしたタナロウフを見て、よくもかう馬鹿け切つた儀式に馴れたものだと思つた。

フォンドイッツは冷靜にならうと努めたがその爲却つて狼狽へて了つた。

そして平生は言葉の少ない内気なタナロウフが確かな調子で直ぐ語を切つたは面白い光景であつた。

「我々は友人キクトル、セルゲイエキツチ、サルウヂン君の依頼によつて貴方と成る事を評議する光榮を帯びて来たものであります」

「はゝあ、そりや結構ですなあ」

「然うですとも、サルウチン君は貴方に説明を請ふ理由を有つてゐる積りですよ、同君に對する貴方の態度の——どうも——」

「勿論です。分つてゐますとも」とサアニンは我慢し切れなくて叫んだ。

「分つてゐますとも『どうも』だの何だのと云ふ段ちやありませんよ。階段から突落してやらうと思つた程ですよ」

「然うでせう、で同君は貴方の仰言つた言葉の取消を要求してゐるのです」

「全くその通りです——」ひよろ長いフォンドイッツも此の時鶴の様に一步進んだ。

「どうして取消せますか。語は雀とは違ひますよ、一度口外したものはもう捕へて戻す事は出来ませんよ」とサアニンは微笑んだ。

タナロウフは狼狽てた。そしてサアニンの氣持を覺るや、七面鳥の様に顔を赤くして鋭く叫んだ。

「我々は冗談を云ひに來たのではありません。で貴方は貴方の云つた言葉を取り消す積りですか取り消さない積りですか」

サアニンは何て立派な馬鹿だらうと氣の毒に思つた。

「サルウチン君を安心させる爲なら取消してもいゝんです。僕に取つちや何でもない事なんです

から。だが第一サルウチン君は馬鹿だから安心しなくて凱歌を奏するでせう——それに又、彼の男は僕は絶対に好きになれません。こんな事情だから取り消しても何にもならないでせう」

「然うですか……斯うなつた以上は、も……」タナロウフの聲は一層高くなり脅かす様に響いた。

それがサアニンには全く厭になつて了つた。

「さうですよ、何でも僕は知つてるよ。だけど僕はサルウチン君と決闘はしませんよ」

フォンドイッツは俄に身を拵つた。タナロウフは立上つた。そして輕蔑し切つた顔で、一語毎に力を籠めて、鋭く叫んだ。

「それは、何故です？」

「何故も糞もない。第一僕はこの人を殺す氣もないし、それにこの事が肝要ですが、僕が彼の人に殺されたくないんです」

「しかし……」タナロウフの顔は引き歪んだ。

「何でもありません。僕は嫌ひです。それだけです。何故つて、一體僕は何故それを説明しなければならぬんですか。僕はね、嫌ひですよ。だからしないつて云ふんです、それだけです。それで十分ですよ」

決闘の申込を承諾しない男に對しての深い輕蔑と、軍人以外には、それをなし得る名譽と勇氣を持つた者は居ないと云ふ信念で、タナロウフは彼の拒絶を少しも不思議とは思はなかつた。そしてその信念を確め得たので、何れかと云へば却つて悦んだ位であつた。

「それは君等の事でせう。しかしねこんな場合に立つた時はですね、僕は教へて置きますが……」

「それも知つてゐるまさね。僕の方からこそサウルヂンに注意し度い位のもですよ」

「何ですと」

「僕はね、サルウヂン君が僕に觸らない様に教へて置き度いんです、若し觸りでもしようものならそれこそ僕は撲りつけて……」

「何を云ふんです」とフォンドイッツは怒鳴つて遮つた「そんな事を云はしては置きませんぞ。

決闘を拒絶するといふ事がどんな事か貴方は知らないんですね、それはね、それはね……」

彼の頭は、赤いものや青いものがごつちやに混合がつた。彼が狼狽して、怒鳴る唇に泡が溜つた。

サアニンはその泡を興味ありけに眺めやつた。

「こんな男がトルストイの崇拜家だと自稱するんだからなあ」と思つた。

「私は貴方に忠告する。そんな事はこの場合云ふものぢやありません。そんな事は何も、関係した事ぢやないぢやないですが」

「ところが正反對に、大きに、大きに關係してゐるんです」

「忠告するつて云つてゐるぢやありませんか、そんな事は實に——つまり——」

サアニンはも早や堪らなくなつた。そのフォンドイッツの吐く唾の飛沫を避けながら、

「もう澤山です。澤山です。貴方は貴方の勝手に考へるさ。そしてサルウヂン君にはその馬鹿である事を悟らせるさ」

「まだ、そんな無法な事……」

フォンドイッツは頭を振り口角泡を飛ばして叫んだ。

「いや、いゝんです、さあ歸りませう」とタナロウフは至極満足さうに云つた。

「いゝえ、どうしてこんな思ひ切つた事を云ふんでせう。實に……言語道斷……」

サアニンは一寸彼を見たがもう澤山と云ふ風に、手を振つて出て行つた。

「我々は一語も違はずサルウヂン君に報告するんですぞ」タナロウフの聲は、その後から追ひかけた。

「結構、々々、どうだね」サアニンは振り返りもしなかつた。

後ではまだフォンドイッツが支離滅裂な風で何か我鳴り立てゝゐた。

「チロヂア兄さん」

「何に？」

「入らつしやいな、話し度い事があるわ」

サアニンは通りすがりの妹の部屋に入つて四圍を見廻した。

「何て、お前の部屋は居心地がいゝんだらう」

そこには深緑の影が立罩めて、仄かに香水の匂が漂うてゐた。サアニンは此處に来てから氣がせいゝした。

「で、どんな用？」

リダは何にも云はず幾度も深く溜息を吐いた。

「どうしたんだ？」

「貴方——あの決闘はしないの？」

「しないよ、それで？」

「どうしてしないの。私には分らないわ……分らないわ」

「おや、氣の毒だなあ。それが分らないとは」

サアニンはリダが矢張あの醜いひよろ長い士官と同じく卑しい愚かな淺間じさを持つてゐる事に往生して了つた。

で、彼はやがて忌々しさに黙つて出て行つた。

そして自分の部屋に来て、何するともなく煙草を吹かしてゐたが、彼は夕景になつてから帽子も冠らずイワノフの住居の方へとぶら／＼歩いた。

夕方は静かであつた。丁度あの玲瓏とした端嚴な空から下りて來た静けさが大地を包んで眠りの中に、這入らうとしてゐる様であつた。

四圍は薄明の中に沈んでゐた。空氣は澄み渡つて、その小徑には露が深く置いてゐて、埃も立たなかつた。彼方此方の物音は空を翔る様に響いて來た。

「今日は」サアニンは香の強い莢を窓傍で眞面目な風で吸つてゐるイワノフに手を差し伸べて云つた。

「今日は」

「僕は今日決闘を申し込まれたよ」

「可からう。誰から、そしてどうして？」

「イワノフは無雜作に平氣であつた。」

「サルウチンから、僕が彼を家から追出したからさ……」

「然うか。君はやる氣かね、結構、僕が立會人にならう」

「いやあ、僕はやる気は些ともありません」

「それとも分つた話だ。決闘して何にならう。あんな事全く不要ぬ事だよ」

「ところがね、妹はね、違つた判断をしてゐるよ」

「そりや馬鹿だからさ」

彼は煙草を詰め終ると窓から外へ跳び出した。

「で今夜は、何をしよう？」

「ソロフアイチツク君の宅へ行かうか」

「何だね、あんな男」

「何故」

「だつて、あんな蚯蚓見たいな男」

「他の者より優だよ」

「ぢやあ行かう、どうでもいゝ」

二人は並んで歩いた。二人は遅ましく、愉快さうに豪放不羈に話しながら歩いた。

ソロフアイチツクの家は閉まつて門の内はしいんとして音もなく荒れ果てゐた。

「何て荒れた所だらう、一層の事散歩路へ行かうぢやないか」

公園の音楽堂では例の通り彈奏が始まつてゐた。散歩道は澤山の人が歩いてゐて、夕暗の中に帽子や女の服が丁度花の様にほんやり浮き出てゐた。

二人は不圖、路でソロフアイチツクに逢つた。

彼は物思はしげに俯向いてゐた。

「僕等は、今さき、貴方の所へお訪ねしましたよ」

「おや。さうでしたか。失禮しましたね。貴方がたがお出になるとは思はなかつたのですから……知つてゐたらお待受け致しましたものを——」

彼は内氣に微笑んだがやがて直ぐ悲しさうな眼をした。

「一緒に歩きませう」とサアニンは優しく云つて彼の腕をとつた。

ソロフアイチツクは嬉しさうに、サアニンの腕を何か貴いものでも抱へてゐる様な風で抱へてゐた。

彼等は道でゾボワアとシャヴロフとスワロシツチに逢つた。お互に挨拶をして微笑を取り交はして別れた。

そして彼等が一度公園の涯まで行つて、歸りかゝると又ゾボワアの連中と逢つた。此の時はカルサキナも一緒であつた。

彼女は遠くからサアニンに媚びる様に微笑みかけてゐた。

その二つの連中は一緒になつて歩いた。

この楽しさうな一團は本道から並木道に入つて歩いた。

愉快さうな笑聲と、晴々した話聲とが絶えず起つた。

彼等が並木路の端れを戻らうとする時、丁度その時、彼方の角からサルウヂンとタナロウフと
チロシンとが此方へ曲つて来るのに逢つた。

サルウヂンは餘りの不意の出来事に狼狽へてゐるらしかつた。タナロウフは、その顔に嘲笑と
憤怒の影を漂はしてゐた。

するとイワノフはチロシンの方を見て、

「あのやつが、しらはまだるんだな」と叫んだ。

チロシンはその事には氣付かぬかして、一心にカルサキナの後姿を見つめてゐた。

「全くだね」とサアニンは笑つた。

サルウヂンの耳には此の笑聲が自分に降りかゝつた様に聞えた。彼は自分の頬をいやつと撲り
つけられた様に感じた。彼の頭はかつとして呼吸は窒つた様であつた。彼は何か大きな力に引き
ずられる様にサアニンの方へ大股で進んで来た。

「何か用ですか」サアニンは眞面目に尋ねた。

彼はサルウヂンの握つてゐる乗馬用の筈の動きに興味を有つた。

「僕は貴方に少し話があります。僕の決闘の申込は届いたでせう」

サルウヂンの聲は腹れてゐた。サアニンの眼はまだその筈を見つめてゐた。彼は何て馬鹿な、
小癩な奴だらう。と思つた。

「然うです」

「そして貴方は、それを拒絶するんですね、——恥かしくはないんですか——」

自分ながらサルウヂンはその聲の太いのに驚き、その筈を握つた手が汗ばんで冷やつとした柄
の感じを明瞭覺えた事に驚いた。

けれどももうどうする事も出来なくなつてゐた。

皆立止つて彼の聲を聞いた。

「無論、斷然拒絶します」サアニンの聲は、妙に平靜であつた。

「最後に、も一度尋ねる——拒絶するんですか」

彼の聲は、重苦しさうであつた。

ソロフアイチツクは神經的に此場の納りを飲み込んで、本能的にサアニンの前に、庇ふ様に進